

平安京右京六条一坊三町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇〇八―七

平安京右京六条一坊三町跡

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京六条一坊三町跡

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでに多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた古都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様へ京都の地域の歴史に対し関心を深めていただけるよう努めております。

当研究所では、平成 13 年より個々の発掘調査の概要をまとめた報告書を刊行しており、その成果を公表しています。

このたび、施設新築工事にともなう平安京跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきましてご意見、ご批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際してご協力ならびにご支援たまわりました関係者各位に厚く感謝し、お礼申し上げます。

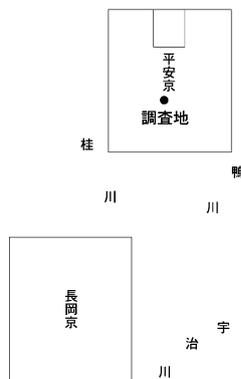
平成 20 年 11 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京六条一坊三町跡
- 2 調査所在地 京都下京区中堂寺南町地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2008年5月8日～2008年9月18日
- 5 調査面積 約 1,670 m²
- 6 調査担当者 布川豊治・鈴木廣司・南 孝雄
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「西京極」「島原」を参考にし、作成した
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 南 孝雄・鈴木廣司・布川豊治
- 14 執筆分担 布川豊治：1～3・5、南 孝雄：4、(株)パリオ・サーヴェイ：付章
- 15 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
3. 遺 構	5
(1) 基本層序	5
(2) 遺構	5
4. 遺 物	23
(1) 土器類	23
(2) 硯	31
(3) 瓦類	31
(4) 石製品	33
(5) 木製品	33
5. ま と め	35
6. 付章 自然科学分析	39
(1) 調査地点・試料	39
(2) 分析方法	39
(3) 結果	41
(4) 西坊城小路東側溝（溝 44・48）の溝機能期の古環境	55
(5) 楊梅小路北側溝（溝 3）の溝機能期の古環境	57
(6) 13 世紀の森林植生について	57

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	1 区全景（北から）
		2	2 区全景（北西から）
図版 2	遺構	1	溝状遺構 22（東から）
		2	門 1（東から）
図版 3	遺構	1	門 2（北西から）
		2	門 3 および土坑 262（北から）
図版 4	遺構	1	溝 3 および溝 110（東から）
		2	溝 3（北東から）

- 3 溝3瓦器出土状況（北西から）
- 図版5 遺構
 - 1 溝110（東から）
 - 2 溝110土師器皿出土状況（北東から）
 - 3 溝44・48（北から）
- 図版6 遺構
 - 1 溝44・48北部（南から）
 - 2 土坑136（北東から）
 - 3 井戸81（北から）
- 図版7 遺構
 - 1 井戸124（西から）
 - 2 井戸124半裁（南から）
- 図版8 遺構
 - 1 建物1（北から）
 - 2 柱穴65礎板出土状況（北東から）
 - 3 柱穴138礎検出状況（南西から）
- 図版9 遺物 土器類
- 図版10 遺物 土器類・硯
- 図版11 遺物 瓦類
- 図版12 遺物 石製品・木製品

挿 図 目 次

図1 調査地位置図（1：5,000）	1
図2 調査区配置図（1：1,000）	3
図3 調査前全景（北から）	3
図4 調査風景（南から）	3
図5 調査区壁・断割断面図（1：50）	6
図6 遺構平面図（1：250）	7
図7 建物1実測図（1：80）	8
図8 建物1柱穴断面図（1：80）	9
図9 柱穴63礎板出土状況（南から）	9
図10 柱穴148礎板出土状況（西から）	9
図11 建物1礎板出土柱穴実測図（1：40）	10
図12 門1実測図（1：50）	11
図13 門2・3実測図（1：50）	12
図14 溝3実測図（1：40、1：60）	13

図 15	溝 43・44・48、土坑 136、整地土 171 実測図 (1 : 50、1 : 100)	14
図 16	溝 110・134・139 実測図 (1 : 20、1 : 40、1 : 60)	16
図 17	土坑 262 断面図 (1 : 40)	17
図 18	井戸 81 実測図 (1 : 50)	18
図 19	井戸 124 実測図 (1 : 40)	19
図 20	井戸 124 円筒木枠取上状況	20
図 21	溝状遺構 22 実測図 (1 : 20)	20
図 22	調査区南西部土取土坑断面図 (1 : 50)	21
図 23	溝 3・110 出土土器実測図 (1 : 4)	25
図 24	柱穴 132・土坑 136・262 出土土器実測図 (1 : 4)	26
図 25	土坑 16・溝 44 出土土器実測図 (1 : 4)	26
図 26	溝 48 出土土器実測図 (1 : 4)	27
図 27	井戸 81 出土土器実測図 (1 : 4)	28
図 28	井戸 124 出土土器実測図 (1 : 4)	28
図 29	土取土坑出土土器実測図 (1 : 4)	29
図 30	硯実測図 (1 : 4)	30
図 31	軒瓦・文字瓦拓影・実測図 (1 : 4)	32
図 32	石製品実測図 (1 : 4)	33
図 33	木製品実測図 (1 : 4、215 のみ 1 : 3)	34
図 34	平安時代前期の主な遺構 (1 : 2,000)	35
図 35	平安時代後期から鎌倉時代の主な遺構 (1 : 2,000)	36
図 36	室町時代以降の主な遺構 (1 : 2,000)	37
図 37	調査地点の位置および層序模式柱状図	40
図 38	溝 44 埋土の試料・軟X線写真および主な構造のトレース図	42
図 39	溝 48 埋土の試料・軟X線写真および主な構造のトレース図	43
図 40	主要花粉化石群集の層位分布	45
図 41	植物珪酸体群集の層位分布	47
図 42	植物珪酸体含量密度の層位分布	48
図 43	花粉化石	60
図 44	植物珪酸体	61
図 45	大型植物化石	62

表 目 次

表 1	調査一覧表	2
表 2	遺構概要表	5
表 3	建物 1 出土礎板一覧表	11
表 4	遺物概要表	22
表 5	溝 110 出土土器の構成	23
表 6	溝 3 出土土器の構成	23
表 7	溝 44 出土土器の構成	24
表 8	溝 48 出土土器の構成	24
表 9	花粉分析結果	44
表 10	植物珪酸体分析結果（産出個数）	47
表 11	植物珪酸体分析結果（含量密度）	48
表 12	大型植物化石分析結果	50

平安京右京六条一坊三町跡

1. 調査経過

この調査は、京都市中央卸売第一市場青果配送加工センターの新築が計画され、それに伴う発掘調査である。調査地は、京都市下京区中堂寺南町地内に所在する。

試掘調査は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下保護課と略する）が実施し、条坊関連遺構や柱穴、土坑などが検出された。遺構の遺存状態が良好であったため、保護課の指導のもと、当研究所が発掘調査を実施することとなった。

調査区は、南北約 34 m、東西約 49 m、面積 1670 m²で、残土置き場の関係から 2 分割して設定した。西坊城小路、楊梅小路にあたる範囲を含む西側部分を 1 区、東側部分を 2 区とし、調査は 1 区から開始した。

調査地は駐車場として使用されていたため、まずアスファルトをカッター切断したのち、2008 年 5 月 21 日から 1 区の盛土および旧耕土の機械掘削を開始した。盛土には、石炭燃えガラなどが大量に含まれていたため、産業廃棄物として場外搬出・処理を行った。盛土・旧耕土の除去ののち、

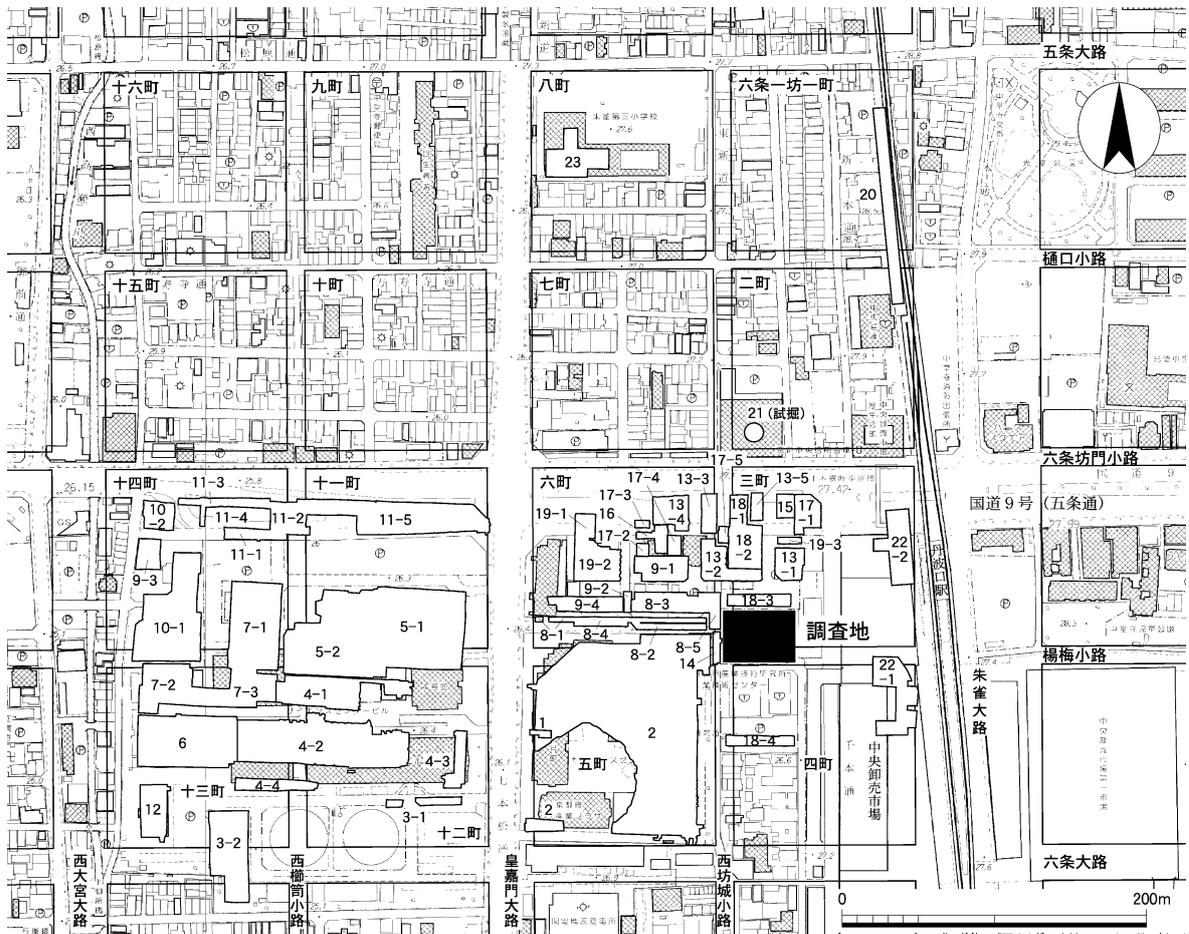


図1 調査地位置図 (1 : 5,000)

表1 調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	面積/m ²	調査期間	主な遺構	文献
1	右京六条一坊五町	下京区中堂寺南町17他	55	1987.08.03 ～1987.08.04	平安時代末～鎌倉時代前期の皇嘉門大路東側溝。	1
2	右京六条一坊五町	下京区中堂寺南町	9,646	1987.09.16 ～1988.04.21	平安時代前期の邸宅。	2
3-1 ～2	右京六条一坊十二・十三町、七条一坊十六町	下京区中堂寺栗田町1	1,610	1989.03.28 ～1989.06.07	縄文時代～古墳時代の湿地。平安時代の六条大路北側溝。	3
4-1 ～4	右京六条一坊十二・十三町	下京区中堂寺栗田町1	5,670	1989.07.20 ～1990.05.30	平安時代の掘立柱建物・井戸・西櫛笥小路東側溝、平安時代末～鎌倉時代の西側溝。	4
5-1 ～2	右京六条一坊十一町	下京区中堂寺栗田町	6,050	1991.02.12 ～1991.06.19	平安時代の掘立柱建物・井戸・西櫛笥小路西側溝。	5
6	右京六条一坊十三町	下京区中堂寺栗田町1	2,000	1991.11.18 ～1992.03.07	縄文時代～弥生時代の流路。平安時代の掘立柱建物・井戸・溝。	6
7-1 ～3	右京六条一坊十三・十四町	下京区中堂寺栗田町1	3,805	1992.07.13 ～1993.01.14	縄文時代～弥生時代・古墳時代の川跡。平安時代の楊梅小路路面と南北両側溝・掘立柱建物。	7
8-1 ～5	右京六条一坊六町	下京区中堂寺南町	1,400	1993.08.07 ～1994.03.24	縄文時代～古墳時代の湿地。平安時代前期の掘立柱建物・井戸。平安時代後期～鎌倉時代の掘立柱建物・井戸・西坊城小路西側溝。	8
9-1 ～4	右京六条一坊六・十四町	下京区中堂寺南町地内	1,247	1994.04.18 ～1994.08.31	縄文時代～古墳時代の湿地。平安時代後期～鎌倉時代の井戸・溝。	8
10-1 ～5	右京六条一坊十四町	下京区中堂寺栗田町地内	2,770	1994.08.29 ～1995.02.24	古墳時代～平安時代後期の川跡。平安時代前期の井戸・掘立柱建物・楊梅小路北側溝。	8
11-1 ～5	右京六条一坊十一・十四町	下京区中堂寺栗田町地内	3,320	1995.04.10 ～1995.12.01	平安時代の川跡。平安時代前期の掘立柱建物・井戸。	8
12	右京六条一坊十三町	下京区中堂寺栗田町地内	650	1996.09.02 ～1996.12.28	平安時代前期の掘立柱建物。平安時代の池。	9
13-1 ～5	右京六条一坊三・六町	下京区中堂寺南町地内	1,894	1997.07.13 ～1997.12.19	平安時代前期の掘立柱建物。鎌倉時代の井戸・池・西坊城小路西側溝。	8
14	右京六条一坊六町	下京区中堂寺南町地内	120	1998.10.26 ～1998.12.04	平安時代後期の井戸・西坊城小路西側溝。鎌倉時代の西坊城小路西側溝。	8
15	右京六条一坊三町	下京区中堂寺南町地内	210	1999.01.29 ～1999.03.10	平安時代後期の井戸。	8
16	右京六条一坊六町	下京区中堂寺南町地内	230	1999.09.29 ～1999.10.26	土取の跡。	8
17-1 ～5	右京六条一坊三・六町	下京区中堂寺南町地内	627	2000.01.18 ～2000.04.06	平安時代末～鎌倉時代の西坊城小路西側溝。御土居濠。	8
18-1 ～5	右京六条一坊三・四町	下京区中堂寺南町地内	1,385	2000.04.09 ～2000.10.05	平安時代末～鎌倉時代の西坊城小路東側溝。	8
19-1 ～3	右京六条一坊六町	下京区中堂寺南町地内	1,058	2001.12.03 ～2002.05.23	平安時代以前の川跡。鎌倉時代の建物(御堂)・池跡。	8
20	右京六条一坊一・二町	下京区中堂寺北町	324	2005.11.10 ～2005.12.26	鎌倉時代～室町時代の土坑。	10
21	右京六条一坊二町	下京区中堂寺北町16-1	—	1988.03.23	六条坊門小路北側溝。平安時代末期の路面。	11
22-1 ～2	右京六条一坊三・四町	下京区中堂寺南町地内	2,000	1979.03.10 ～1979.06.11	平安時代の溝。室町時代の井戸。	12
23	右京六条一坊八町	下京区中堂寺北町23(朱雀第三小学校)	810	1999.08.09 ～1999.12.09	平安時代中期の流路。平安時代後期以降の耕作溝	13

※ 表の番号は図1の調査地点の番号と対応する

手作業により掘削を進め、平安時代から鎌倉時代の遺構、江戸時代の土取土坑などを同一面で検出した。それらの遺構を時代ごとに掘り下げ、平面図・断面図の記録作業などの調査を進めた。全体の写真測量・全景写真撮影などを実施したのち、補足調査を行った。1区の補足調査と並行して、2区の盛土・旧耕土の機械掘削を開始し、1区と同様、手作業により遺構面を検出し、掘下げ、遺構実測、全景写真撮影などの調査を進めた。調査完了後、器材搬出、調査区の埋戻し、駐車場として復旧するためにアスファルト舗装などを行い、9月18日に現場での全ての作業を終了した。調査中は適宜、保護課の検査・指導を受けた。

なお、7月19日に遺跡の現地説明会を実施し、約300名の参加があった。



図2 調査区配置図(1:1,000)

2. 位置と環境

調査地は、平安京右京六条一坊三町の南西部にあたり、東三・四行、北七・八門および西坊城小路と楊梅小路の両小路が交差する北東部を含む。調査地の南西の近隣には、官営の市場である西市跡が、南方の近隣には外国使節の迎賓館である西鴻臚館があった。桃山時代には現千本通付近に御土居が南北に設営され、千本七条あたりに「丹波口」があった。現在のJR丹波口駅は、約700m北に位置している。

調査地周辺では、京都市リサーチパークの建設やJR丹波口駅周辺の市街地再開発などに伴い、こ



図3 調査前全景(北から)



図4 調査風景(南から)

れまでに平安京右京六条一坊三～六町と十一～十四町にあたる地域において、当研究所が数多くの発掘調査を実施し、同五町では1町のほぼ全域を占める平安時代前期の邸宅跡を、同六町では平安時代末期から鎌倉時代の池や御堂を備えた邸宅跡などを、同十一町・十四町では平安時代以前の川跡を検出した。全体では、平安時代前期の建物や井戸、条坊関連遺構などを検出しているが、平安時代中期の遺構は、ほとんど検出されていない。平安時代後期から鎌倉時代の遺構は、皇嘉門大路より東で、建物や井戸、池、条坊関連遺構などが多く検出されている。同十二町・十三町間では西櫛笥小路西側溝が検出されている。室町時代以降の遺構は、同三町の現千本通付近で江戸時代の御土居堀を検出している。また朱雀第三小学校の調査（同八町）では、平安時代後期以降の耕作溝が検出されている。

文献（表1 調査一覧表）

- 1 小森俊寛「平安京右京六条一坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 2 梅川光隆・杉山信三ほか『平安京右京六条一坊 ー平安時代前期邸宅跡の調査ー』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第11冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1992年
- 3 長宗繁一「平安京右京六条一坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 4 長宗繁一「平安京右京六条一坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 5 平尾政幸「平安京右京六条一坊」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 6 平尾政幸「平安京右京六条一坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 7 平尾政幸「平安京右京六条一坊」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 8 平尾政幸ほか『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-6（財）京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 9 平尾政幸「平安京右京六条一坊」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1998年
- 10 加納敬二ほか「平安京右京六条一坊一・二町跡」『平安京跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-18（財）京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 11 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和63年度 京都市文化観光局 1989年
- 12 （財）京都市埋蔵文化財研究所内部資料 昭和53年度
- 13 山本雅和ほか「平安京右京六条一坊2」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2002年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図5)

現地表面の標高は、26.7～26.9 mである。以下順に、アスファルトは厚さ約0.1 m、近現代の整地・盛土は厚さ0.6～0.9 m、旧耕土や水田の床土は調査区北西部には見られないが、他では厚さ0.1～0.2 mであり、耕作関連層の直下で遺構面が検出され、その標高は25.8 m前後である。遺構面の基盤層は、調査区南半が砂礫、調査区北半および西側は固く締まる黄褐色系砂泥およびシルト層であるが、Y=-23,625 ライン付近で南北の断割調査を行ったところ、砂礫層の上に黄褐色系砂泥層が堆積しており、これらは地山であることが確認できた。調査区北半を中心に土取土坑が密集していたが、調査区西端の一部は、土取土坑の境界のためか攪乱を免れ、耕作溝や南北溝が残存し、調査区中央部の西半では、黄褐色系砂泥およびシルト層が薄いためか（厚さ0.2～0.3 m）土取りを免れ、建物などが比較的良好に残存していた。砂礫の分布する範囲では、条坊関連の溝や柱穴などを検出したが、浅いものが多く、後世に削平を受けている可能性が高い。

(2) 遺構 (図6、図版1)

平安時代から江戸時代の遺構を検出した。これらは、平安時代前期、平安時代後期から鎌倉時代、室町時代、江戸時代の4つの時期に大別できる。平安時代前期の遺構は、建物を1棟検出したのみである。平安時代後期から鎌倉時代の遺構は、建物（門）や条坊関連遺構など多数を検出した。室町時代の遺構は、溝状遺構を検出した。江戸時代の遺構は、耕作溝や土坑を検出した。耕作溝は少数、土坑は調査区北半を中心に数多く検出した。地山である黄褐色系砂泥およびシルト層の土取り跡の土取土坑である。形状は多様であり、調査区南西部は深いものが、調査区北半には浅いものが多い。以下では、時代ごとに主な遺構について述べる。

平安時代前期

建物1棟を検出した。

建物1 (図7～11、表3、図版8) 調査区中央部西側で検出した南北棟の掘立柱建物である。東西3間×南北4間分を検出した。北および西側は土取土坑によって攪乱を受けていた。身舎が

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代前期	掘立柱建物1	建物1は南北棟、2間×3間以上。東庇および南に庇か縁が付く。
平安時代後期 ～鎌倉時代	門1～3、溝3・44・48・110・256・257、土坑136・262、井戸81・124、整地土171など	門3は柱穴2基からなる。溝44・48は西坊城小路東側溝。
室町時代	溝状遺構22	
江戸時代	土取土坑、溝	土取土坑は多数検出。

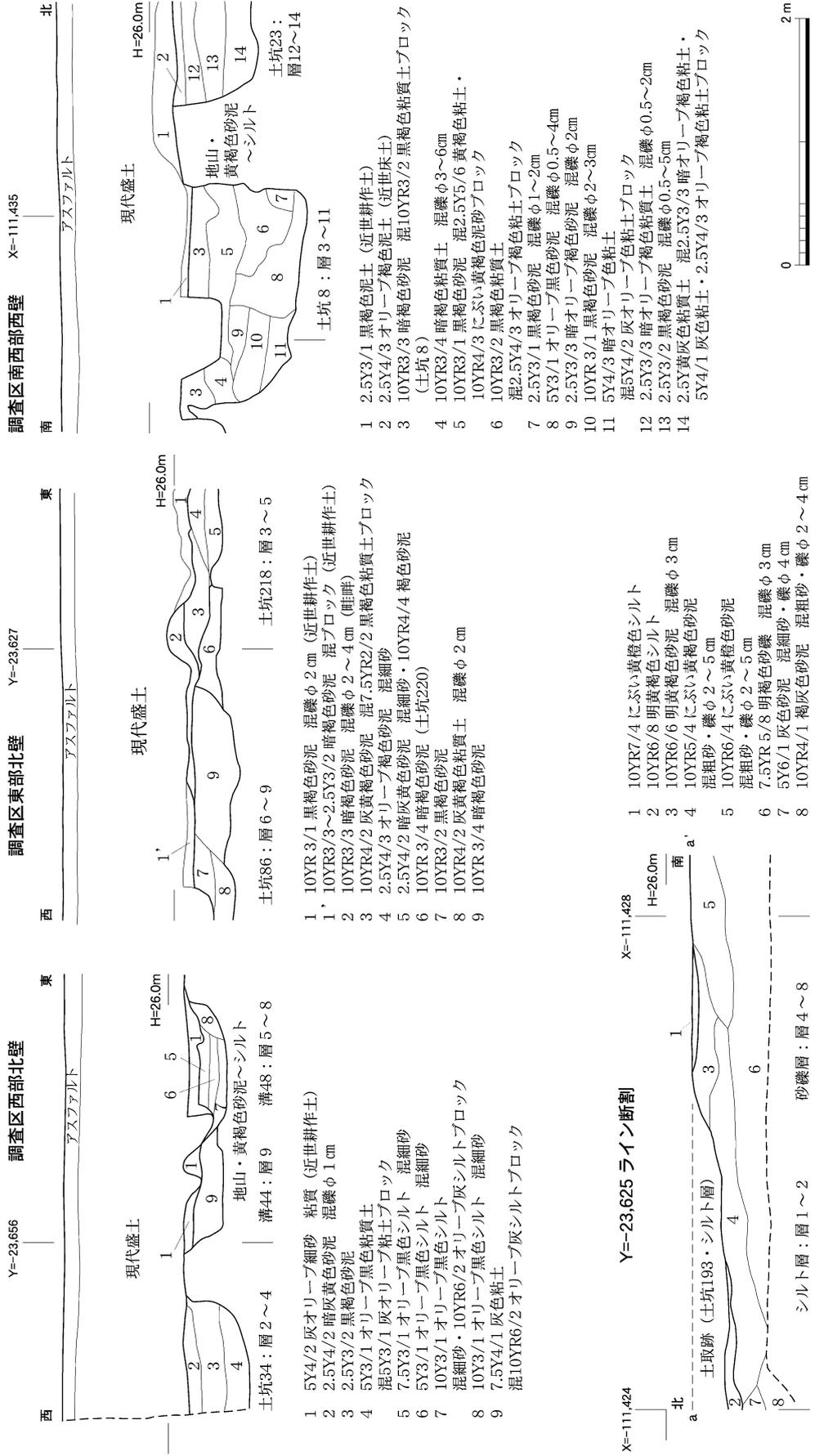


図5 調査区際・断壁断面図 (1:50)

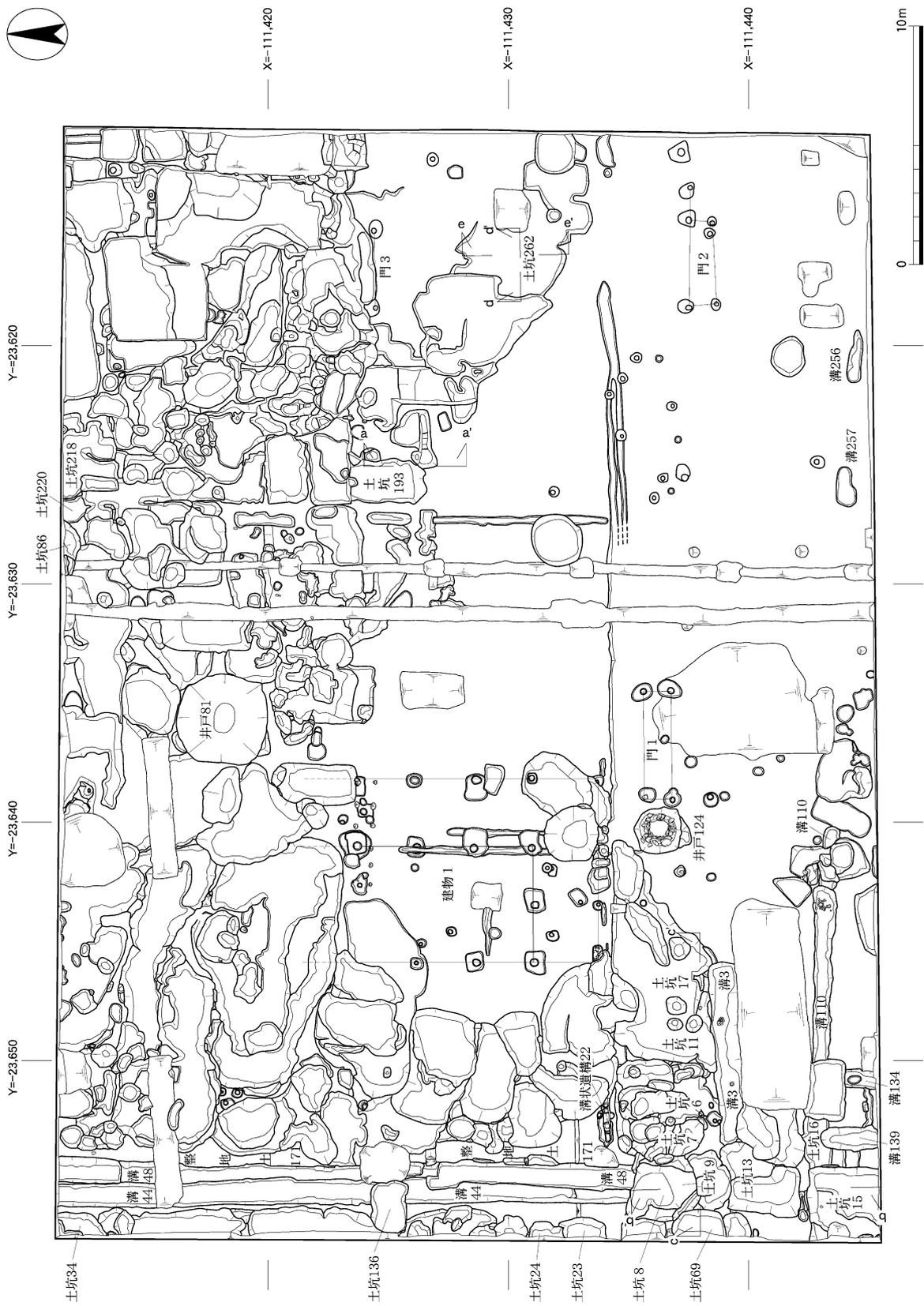


図6 遺構平面図 (1 : 250)

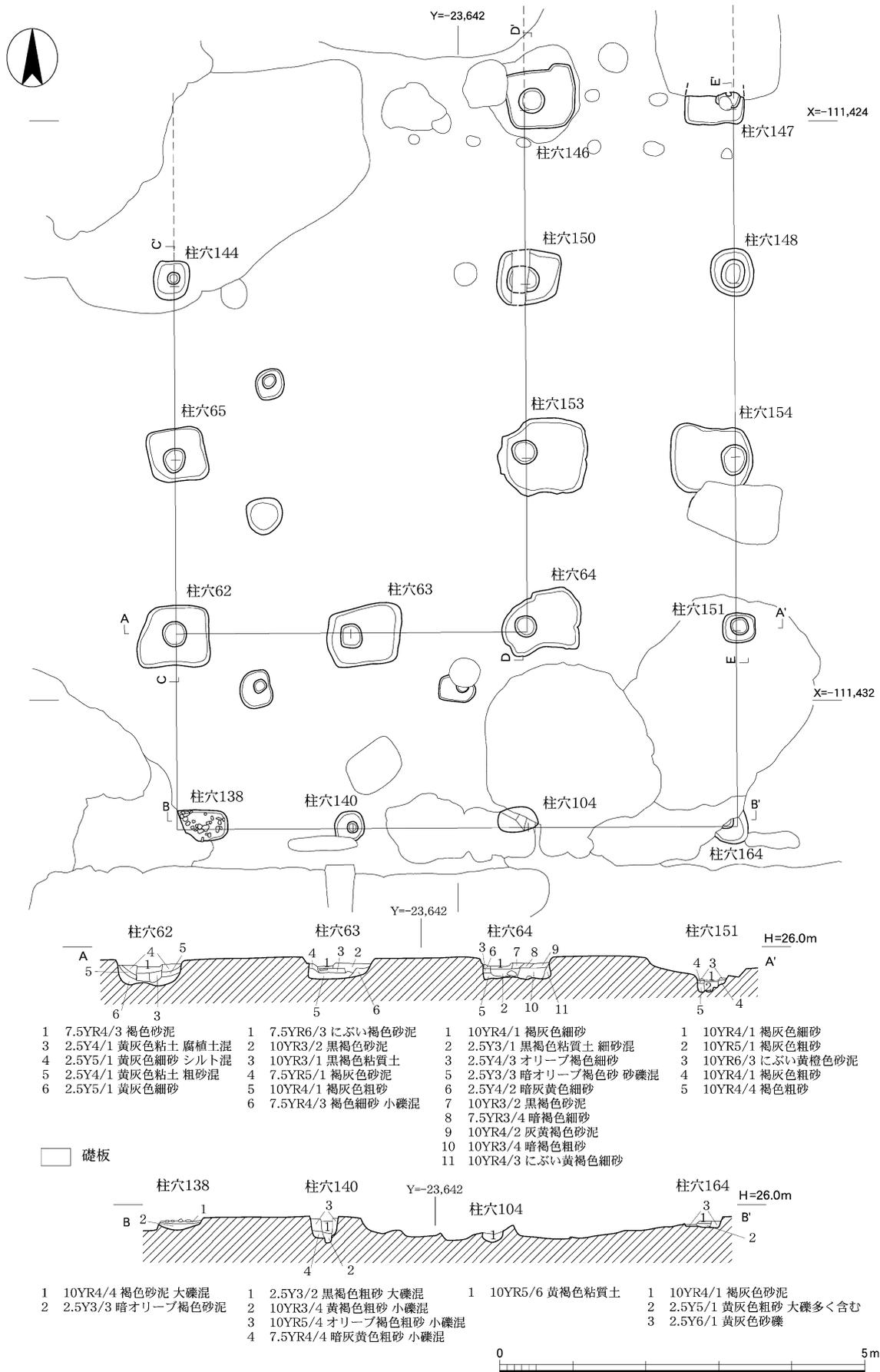


図7 建物1実測図 (1:80)

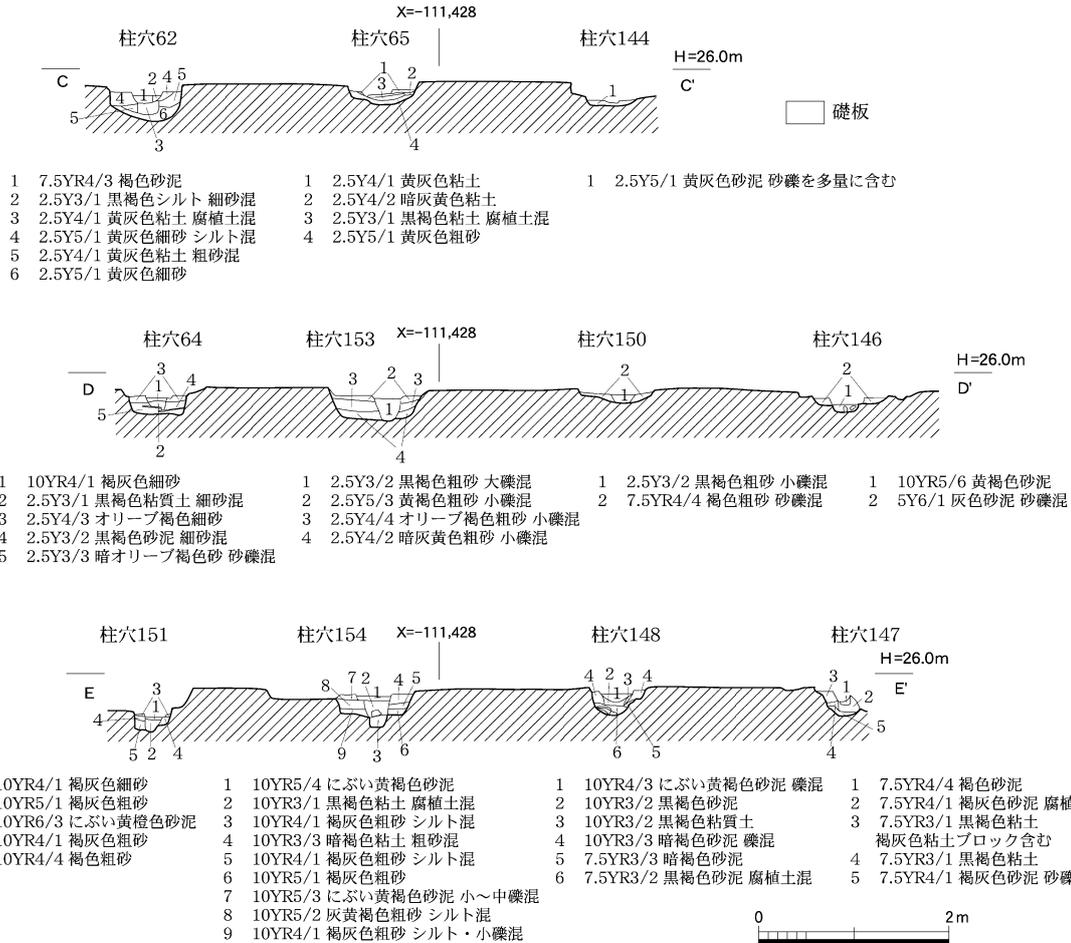


図8 建物1柱穴断面図(1:80)

東西2間×南北3間以上、東および南に庇が付く。身舎の柱間は、桁行・梁間とも2.4m(8尺)の等間である。庇の柱間は、東庇が2.85m(9.5尺)、南庇が2.7m(9尺)である。身舎の柱穴掘形は、隅丸方形であり、小さいものが一辺約0.5m、大きいものは一辺0.8~1.2m、深さは0.2~0.5mである。柱痕跡の径は0.3~0.4mである。東庇の柱穴掘形は、隅丸方形ないし楕円形であり、一辺が0.5~1.2m、楕円形の径は0.6~0.7m、柱痕跡の径は0.3~0.4m、深さは0.3~0.4mである。南庇の掘形および柱痕跡は、一回り小さく、掘形径は0.3~0.5m、柱痕跡は

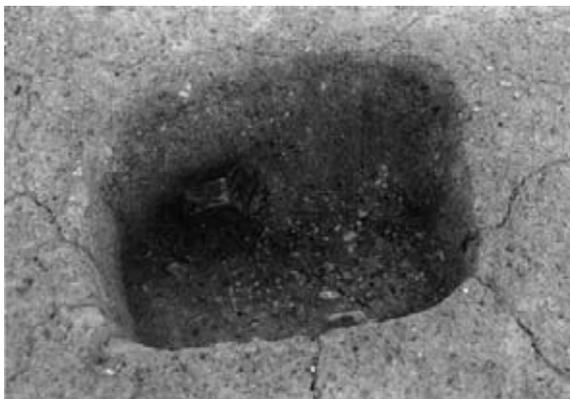
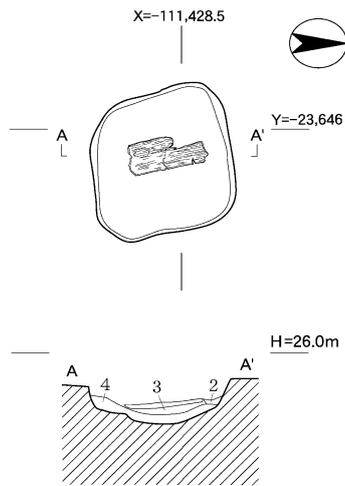


図9 柱穴63礎板出土状況(南から)



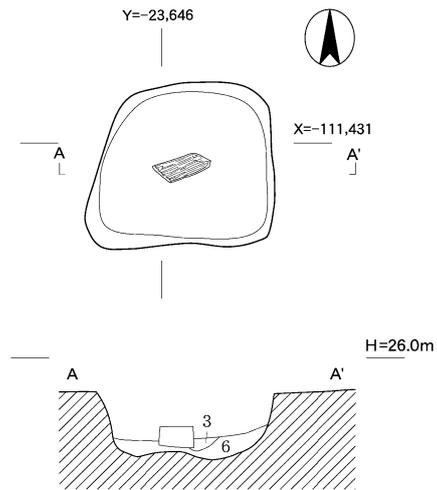
図10 柱穴148礎板出土状況(西から)

柱穴65



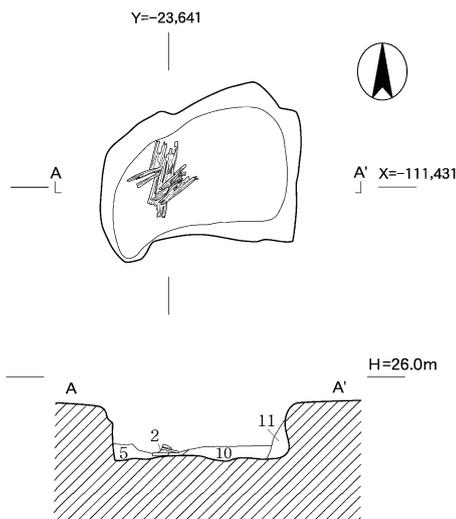
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土
- 3 2.5Y3/1 黒褐色粘土 腐植土混
- 4 2.5Y5/1 黄灰色粗砂

柱穴62



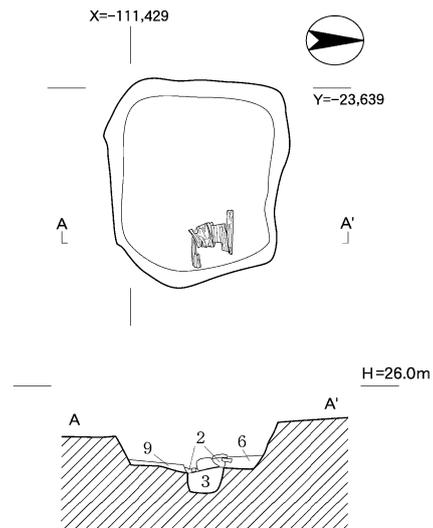
- 3 2.5Y4/1 暗灰黄色細砂 腐植土混
- 6 2.5Y4/1 黄灰色粘土

柱穴64



- 2 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 細砂混
- 5 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細砂
- 10 10YR3/4 暗褐色粗砂
- 11 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂

柱穴154



- 2 10YR3/1 黒褐色粘土 腐植土混
- 3 10YR4/1 褐灰色粗砂 シルト混
- 6 10YR5/1 褐灰色粗砂
- 9 10YR4/1 褐灰色粗砂 シルト・小礫混



図 11 建物 1 礎板出土柱穴実測図 (1 : 40)

約 0.15 m、深さは 0.2 ~ 0.4 m であり、西端の柱穴 138 は、柱痕跡はなく、5 ~ 10 cm の小礫が混じり、西半は土取土坑によって攪乱されている。形状は東西にやや長い隅丸方形で、検出した規模は、東西約 0.7 m、南北約 0.4 m、深さは約 0.2 m である。身舎と東庇の柱穴 6 基には、礎板が据えられていた (表 3)。角材と板材がある。柱穴から平安時代前期の土師器の小片が出土している。

表3 建物1出土礎板一覧表

柱穴No.	樹種	形状	寸法 (cm)	出土状況
柱穴62	ヒノキ	角材	縦23、横11、厚さ12	角材が1本。下には根固め?の小礫
柱穴63	ヒノキ	板片2枚	縦10、横6、厚さ5 縦15、横9、厚さ2	板片が2枚と小片1枚。北西に偏る
柱穴64	スギ	板片3片	縦40、横12、厚さ6 縦25、横9、厚さ4	厚めの板の上に崩れた板が2枚乗る。西に偏る。
柱穴65	ヒノキ	板片	縦41、横16、厚さ2	1枚の板。下に厚い礎板の腐植土
柱穴148	スギ	板片2片	縦11、横4、厚さ4 縦8、横4、厚さ2	崩れている。周りに礎板の腐植土
柱穴154	ヒノキ、スギ	角材、板片	縦11、横4、厚さ3 縦13、横10、厚さ6	1本の角材と板片。周りに礎板の腐植土。礎板の下に柱痕跡。柱の取替えか。

平安時代後期から鎌倉時代

門や条坊関連遺構、井戸などを検出した。

門1 (図12、図版2) 調査区中央部南側で検出した。その位置は、柱穴北側列は楊梅小路北築地心推定ラインとほぼ重なり、東西が東四行南辺のほぼ中央にある。楊梅小路に面して開く門である。4基の柱穴からなり、柱間は、南北が約1.2m、東西が約4.4mである。柱穴掘形は、楕円形で、径が0.6~1.0m、深さは0.1~0.3mである。柱痕跡の径は0.25m前後である。柱穴158は、一辺約0.2mの方形の礎石を伴い、柱穴133には、径約0.25mの根石を持つ。平安時代後期の土師器皿が出土している。

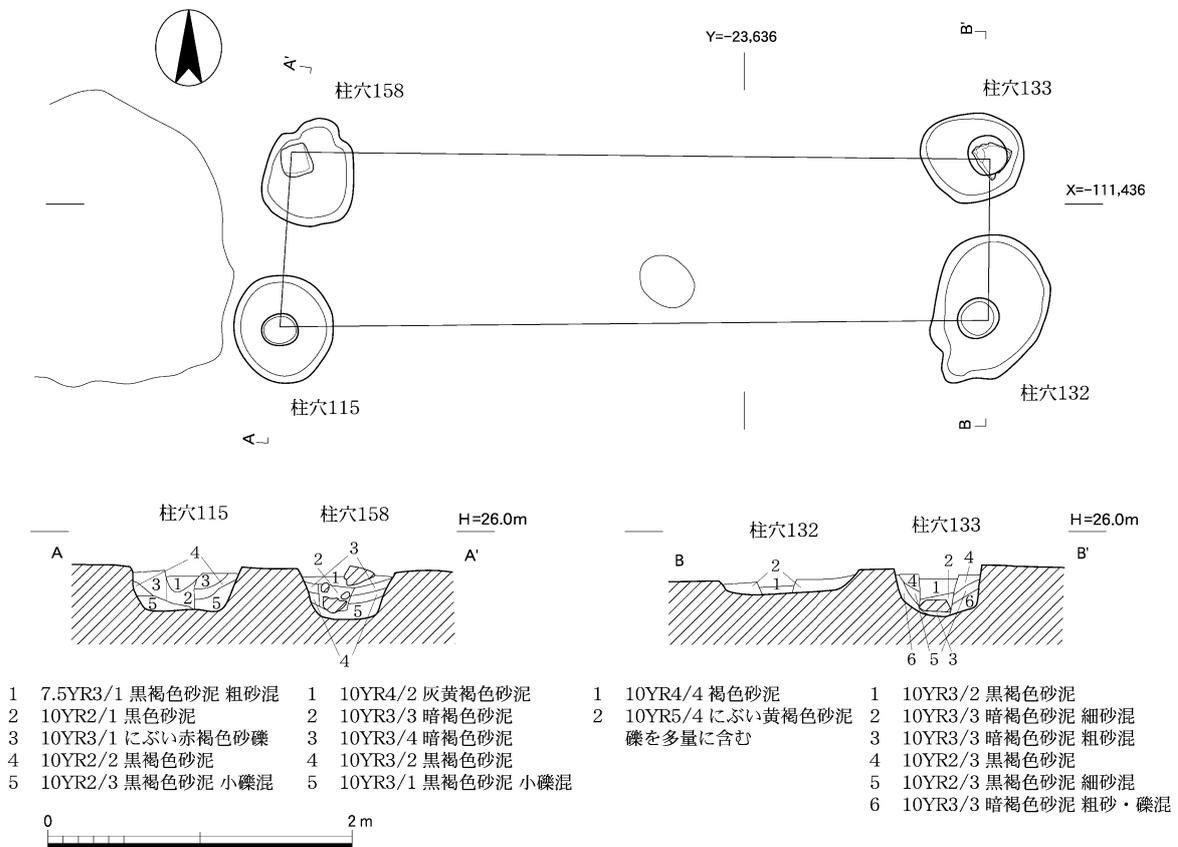
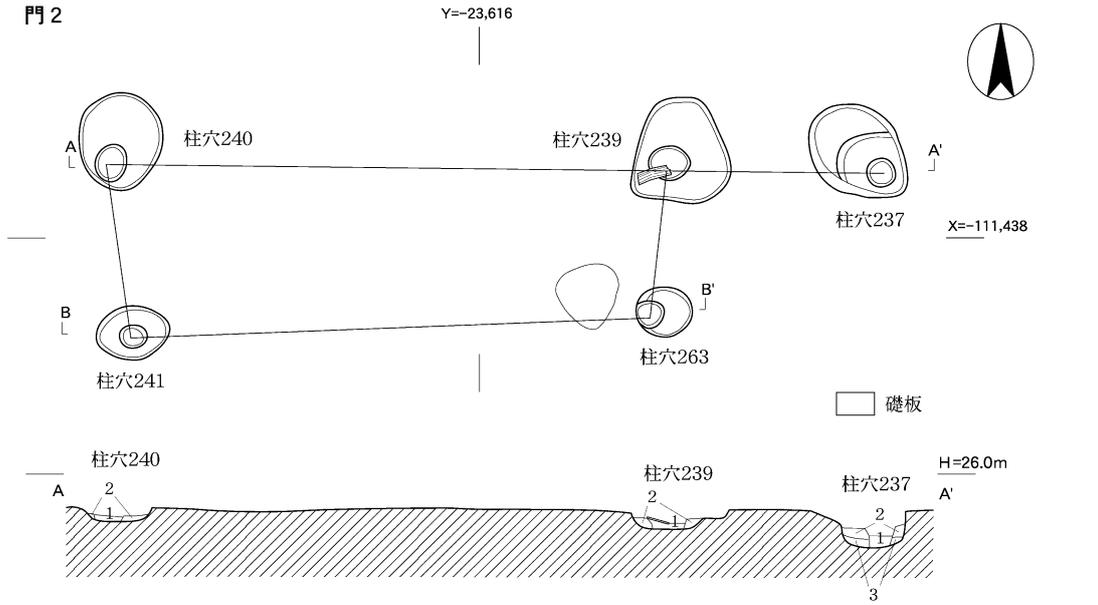
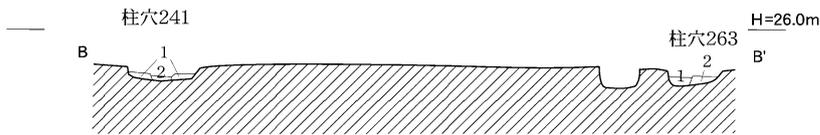


図12 門1実測図 (1:50)

門 2



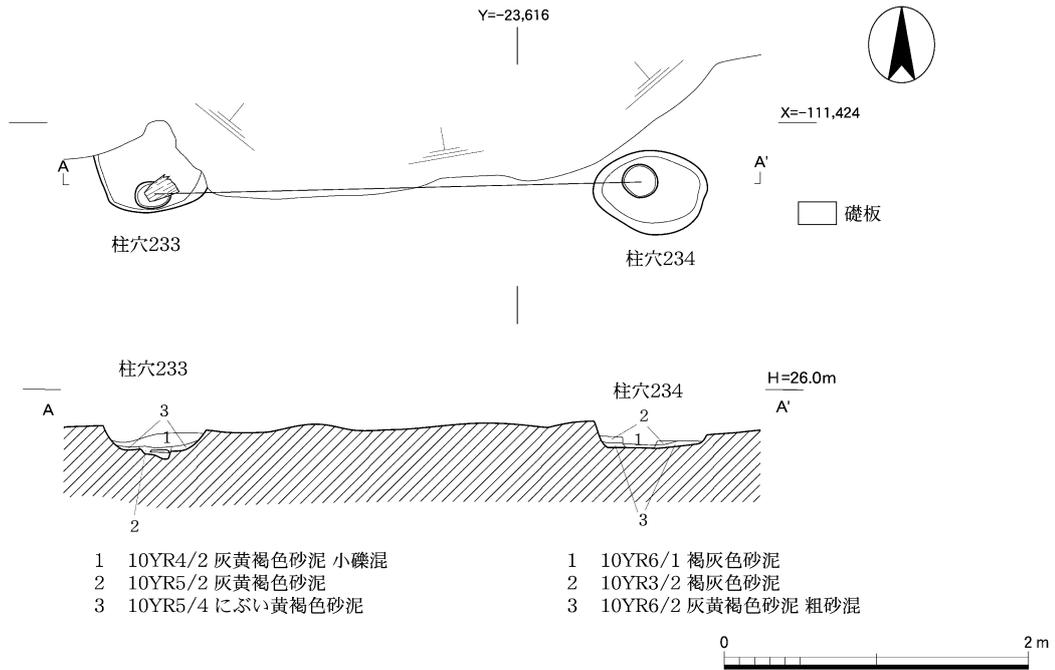
- | | | |
|---------------------|---------------------|------------------------|
| 1 7.5YR4/4 褐色泥砂 粗砂混 | 1 7.5YR4/4 褐色泥砂 粗砂混 | 1 7.5YR4/2 灰褐色砂泥 |
| 2 10YR3/3 暗褐色砂泥 小礫混 | 2 5YR4/4 にぶい赤褐色砂礫 | 2 10YR3/2 黒褐色砂泥 |
| | | 3 10YR4/1 灰褐色砂泥 (やや粘質) |



- | | |
|----------------------------|-------------------------|
| 1 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 | 1 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 |
| 2 5YR5/6 明赤褐色砂泥 小~中礫を多量に含む | 2 7.5YR4/4 褐色砂礫 小~中礫を含む |



門 3



- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 小礫混 | 1 10YR6/1 褐灰色砂泥 |
| 2 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 | 2 10YR3/2 褐灰色砂泥 |
| 3 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 | 3 10YR6/2 灰黄褐色砂泥 粗砂混 |



図 13 門 2・3 実測図 (1:50)

門2（図13、図版3）調査区東部南側で検出した。門1から約20m東に位置し、北側列が楊梅小路北築地心推定ラインより約1.8m南へ張り出している。楊梅小路に面して開く門である。4基の柱穴ならびに、北側列の東側延長ラインで1基、計5基の柱穴からなる。柱間は、南北約1.2m、東西が約3.6mおよび約1.2mである。柱穴掘形は、柱穴239が不定形、その他は楕円形であり、北側列の径が0.6～0.7m、南側列はやや小さく径が0.4～0.5m、深さは0.1～0.3mである。柱痕跡の径は0.2～0.3mである。柱穴239は礎板を伴う。その大きさは、縦約20cm、横7cm前後、厚さ1cm前後で、樹種はスギである。鎌倉時代前半の土師器皿の小片が出土している。

門3（図13、図版3）調査区東部北側で検出し、門2の北側約13mに位置する。周囲に対応する柱穴は検出できず、柱穴2基からなる遺構であろう。柱間は約3.3mで東西に並ぶ。柱穴掘形は楕円形であり、径が0.6～0.8m、深さは0.2m前後である。柱痕跡の径は約0.25mである。柱穴233は礎板を伴う。その大きさは、縦約20cm、横約10cm、厚さ約2cmである。樹種はスギである。埋土は灰褐色系の砂泥である。鎌倉時代前半の土師器皿の小片が出土している。周辺に関連する遺構はないが、門2の真北に位置しており、構造から宅地内の区画施設の可能性がある。

溝3（図14、図版4）調査区西部南半で検出した東西溝である。南肩は基礎により攪乱され、溝の幅はこれより南に広がる。溝の北肩は楊梅小路北築地心推定ラインより約3m南に位置する。溝の西側延長部は土取土坑により攪乱されている。東側は次第に浅くなり、延長部は後世の削平により失われたと考えられる。検出した規模は、長さが東西約7m、幅は約0.9m、深さは0.2～0.4

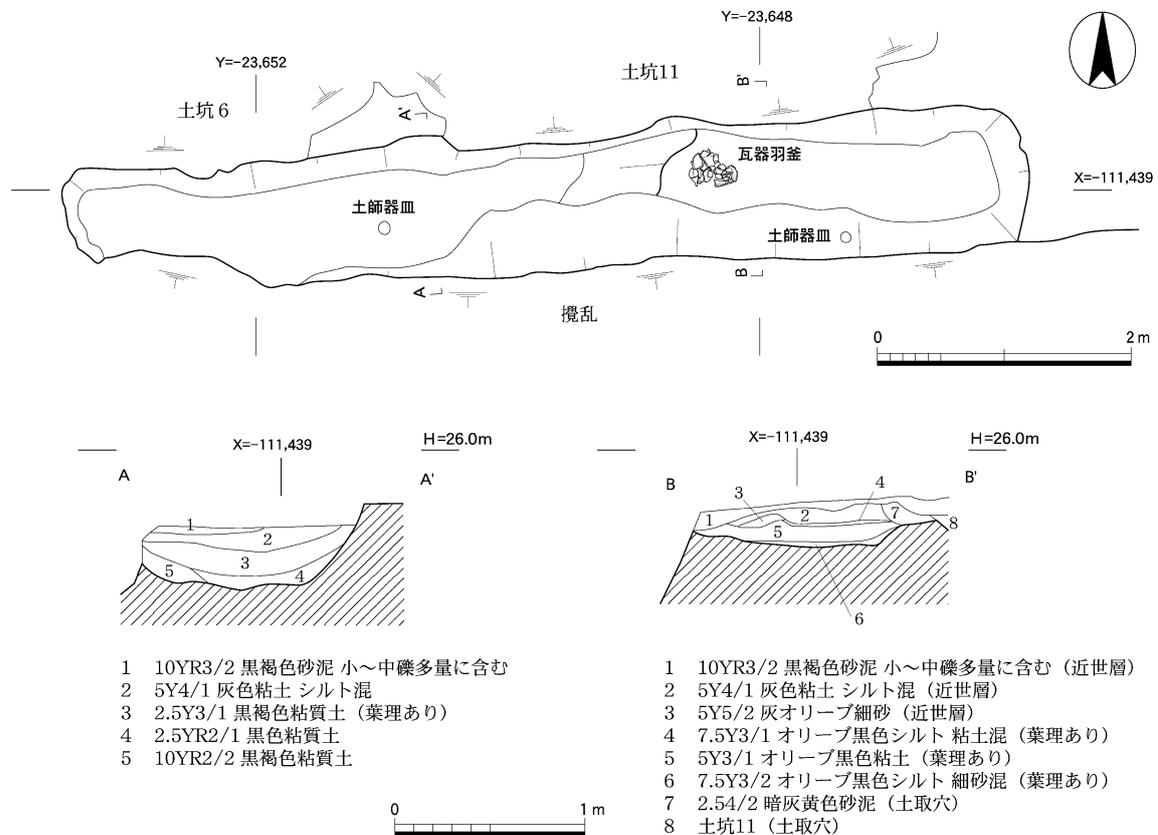
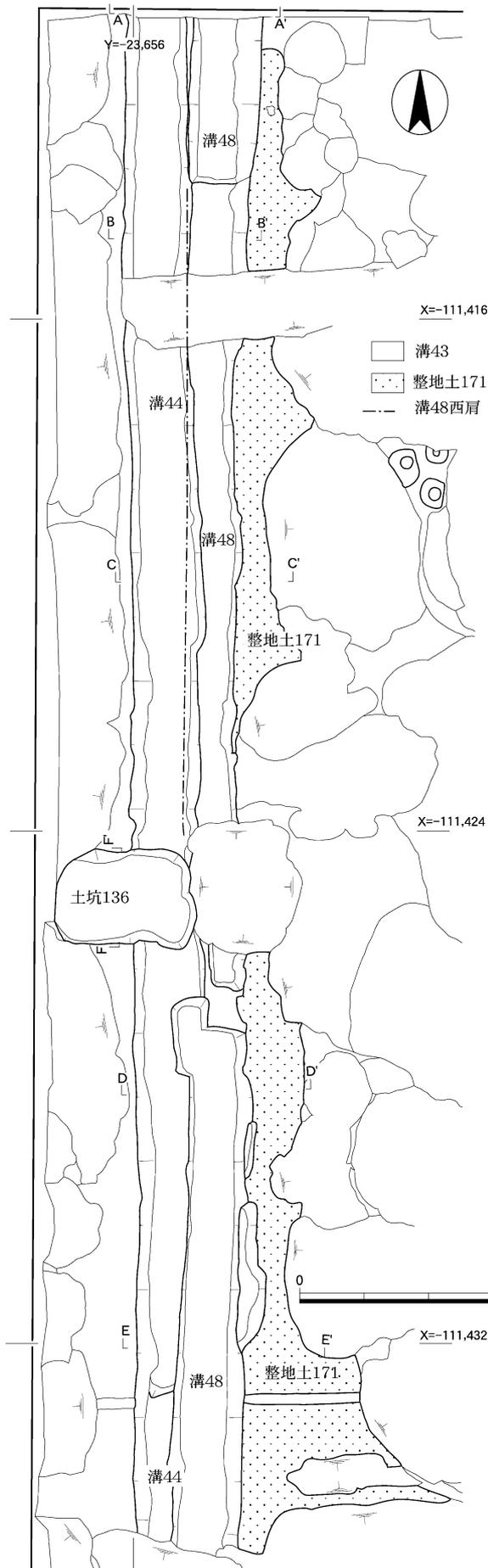
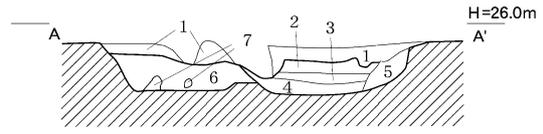


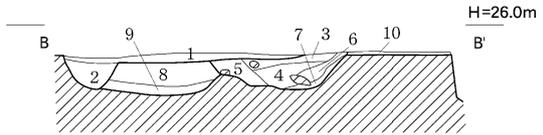
図14 溝3実測図（1：40、1：60）



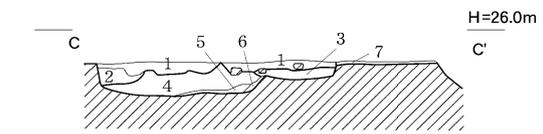
溝43・44・48、整地土171



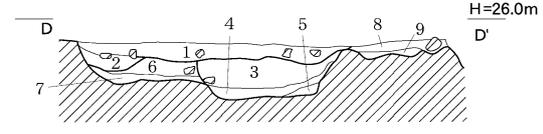
- | | |
|--|-----------------------------------|
| 1 5Y4/2 灰オリブ色細砂 (近世層) | 5 10Y3/1 オリブ黒色シルト
細砂含む (溝48) |
| 2 7.5Y3/1 オリブ黒色シルト
細砂含む・葉理あり (溝48) | 6 7.5Y4/1 灰色粘土 (溝44) |
| 3 5Y3/1 オリブ黒色シルト
細砂含む・葉理あり (溝48) | 7 7.5Y4/1 灰色粘土シルト
ブロック含む (溝44) |
| 4 10Y3/1 オリブ黒色シルト 細砂
・シルトブロック含む (溝48) | |



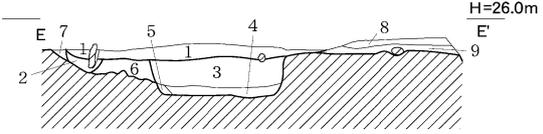
- | | |
|------------------------------------|---------------------------------------|
| 1 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥
大礫を多量に含む (近世層) | 7 2.5Y3/3 暗オリブ褐色
粘土 (溝48) |
| 2 5Y3/1 オリブ黒色粘土 (溝43) | 8 2.5Y3/1 黒褐色粘土
微砂混 (溝44) |
| 3 2.5Y3/2 黒褐色粘土 微砂混 (溝48) | 9 2.5Y3/3 オリブ黒色粘土
灰色粘土ブロック含む (溝44) |
| 4 10YR4/1 褐灰色粘土 (溝48) | 10 10YR4/3 にぶい黄褐色
シルト (整地土171) |
| 5 10YR3/1 黒褐色粘土 (溝48) | |
| 6 10YR4/2 灰黄褐色粘土
微砂混・葉理あり (溝48) | |



- | | |
|------------------------------------|----------------------------------|
| 1 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥
大礫を多量に含む (近世層) | 5 5Y3/2 オリブ黒色粘土 (溝44) |
| 2 5Y3/1 オリブ黒色粘土 (溝43) | 6 7.5Y3/1 オリブ黒色
粘土 (溝44) |
| 3 2.5Y3/2 黒褐色粘土 微砂混 (溝48) | 7 10YR4/3 にぶい黄褐色
シルト (整地土171) |
| 4 5Y2/2 オリブ黒色粘土
・葉理あり (溝44) | |

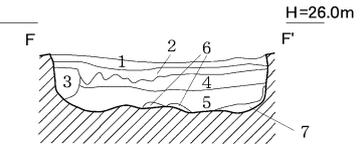


- | | |
|------------------------------------|----------------------------------|
| 1 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥
大礫を多量に含む (近世層) | 6 5Y2/2 オリブ黒色粘土 (溝44) |
| 2 5Y3/1 オリブ黒色粘土 (溝43) | 7 5Y3/2 オリブ黒色粘土 (溝44) |
| 3 2.5Y3/2 黒褐色粘土 微砂混・
葉理あり (溝48) | 8 10YR4/4 褐色砂泥 (整地土171) |
| 4 7.5Y2/2 オリブ黒色粘土 (溝48) | 9 10YR5/4 にぶい黄褐色
シルト (整地土171) |
| 5 7.5Y2/1 黒色粘土 (溝48) | |



- | | |
|------------------------------------|---------------------------------------|
| 1 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥
大礫を多量に含む (近世層) | 6 5Y2/2 オリブ黒色粘土 (溝44) |
| 2 5Y3/1 オリブ黒色粘土 (溝43) | 7 5Y3/1 オリブ黒色粘土 (溝44) |
| 3 2.5Y3/2 黒褐色粘土 微砂混 (溝48) | 8 10YR4/4 褐色砂泥
粗砂混 (整地土171) |
| 4 10YR4/1 褐灰色粘土 (溝48) | 9 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
大礫を含む (整地土171) |
| 5 5Y3/2 オリブ黒色粘土 (溝48) | |

土坑136



- | | |
|----------------------|------------------|
| 1 2.5Y3/3 暗オリブ褐色砂泥 | 5 5Y2/1 オリブ黒色粘土 |
| 2 5Y3/1 オリブ黒色粘質土 | 6 7.5Y4/1 灰色砂泥 |
| 3 5Y3/2 オリブ黒褐色粘質土 | 7 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 |
| 4 5Y2/2 オリブ黒色粘土・葉理あり | |



図15 溝43・44・48、土坑136、整地土171 実測図 (1:50、1:100)

mである。埋土は、大きく3層に分かれ、上層が沈下したと考える近世層である。中層・下層は、黒色の粘土およびシルトである。中層と下層の境には、葉理が認められる。鎌倉時代の瓦器羽釜が多く出土した。

溝 44 (図 15、図版 5・6) 調査区西部で検出した南北溝である。溝 44 の西肩は、西坊城小路東築地心推定ラインから 4.5 m 前後西に位置する。西肩沿いは幅 0.4 m 前後、深さは 0.1 m 前後の近世の耕作溝 43 が重複する。溝の東側を溝 48 に掘り込まれ、南北の中程には土坑 136 が重複する。溝の北側は調査区外に延び、南側延長部は土取土坑により攪乱されている。検出した規模は、長さが南北約 24 m、幅は 0.6 ~ 1.1 m、深さは 0.2 ~ 0.3 m 前後である。埋土の最上層は、沈下した近世層である。以下は主に黒色の粘土である。自然科学分析の軟 X 線写真では、溝の堆積構造に変形が見られることから地震の痕跡と判明した (付章参照)。

溝 48 (図 15、図版 5・6) 調査区西部、溝 44 の東側で重複して検出した。溝 48 の東肩は、西坊城小路東築地心推定ラインから 2.5 ~ 3.0 m 西に位置する。溝 44 同様、北側は調査区外に延び、南側延長部は土取土坑により攪乱されている。検出した規模は、長さ南北約 24 m、幅は 1.1 m 前後である。溝の北端約 2.5 m と南端約 8.5 m は、一段低くなり、深さは 0.25 ~ 0.3 m である。その他の深さは、0.1 ~ 0.2 m である。埋土は、最上層は沈下した近世層、中層は主に砂混じりのシルトおよび粘土であり、葉理が見られる。下層は粘土層である。溝 48 は、溝 44 との重複関係から、溝 44 が埋没したあと、時期を置かず掘り直した溝である。自然科学分析によれば、溝 44・48 とともに、中・下層とも葉理が認められ、流水はあったが滞水する穏やかな流れであり、中層では腐植の集積が進行していることから、溝内の流動が悪化していたと示唆され、溝の再構築の契機になったと示唆されている。

溝 110 (図 16、図版 5) 調査区西部南半で検出した。東に向かって、やや南寄りに走る東西溝である。西側延長部は、土坑により攪乱されている。溝の中心は、楊梅小路南築地心推定ラインから 4.3 ~ 4.8 m 北に位置する。東部の一部が土坑で攪乱されている。検出した規模は、長さが東西約 10 m、幅は 0.6 ~ 1.0 m、深さは 0.1 ~ 0.2 m である。埋土は、上層が暗褐色砂泥、下層は暗褐色および黒褐色砂泥砂混じりである。平安時代後期の土師器皿が溝の東端でまとまって出土した。

溝 256・257 調査区東部壁際で検出した。溝 256 の規模は、長さが東西約 2.2 m、幅は 0.5 m 前後、深さは約 0.1 m、埋土は黒褐色砂泥である。溝 257 の規模は、長さが東西約 1.6 m、幅が 0.6 ~ 0.8 m、深さが約 0.06 m である。埋土は褐色砂泥である。この 2 本の溝は、溝 110 の延長線上に位置する。これらは、溝の上部を後世に削平され、深い部分が遺存したものであり、溝 110 と一連の溝と考えている。

溝 134 (図 16) 調査区南西部で検出した。北側は江戸時代の土坑 20 に攪乱され、溝 110 とほぼ直交する。検出した規模は、長さが南北約 1.3 m、幅が 0.8 m 前後、深さが約 0.2 m である。

溝 139 (図 16) 調査区南西部の土坑 16 を完掘し、周辺を掘り下げた段階で検出した。西坊城小路東側溝推定ラインとほぼ重なる位置である。土坑 16 と直交する。検出した規模は、長さが

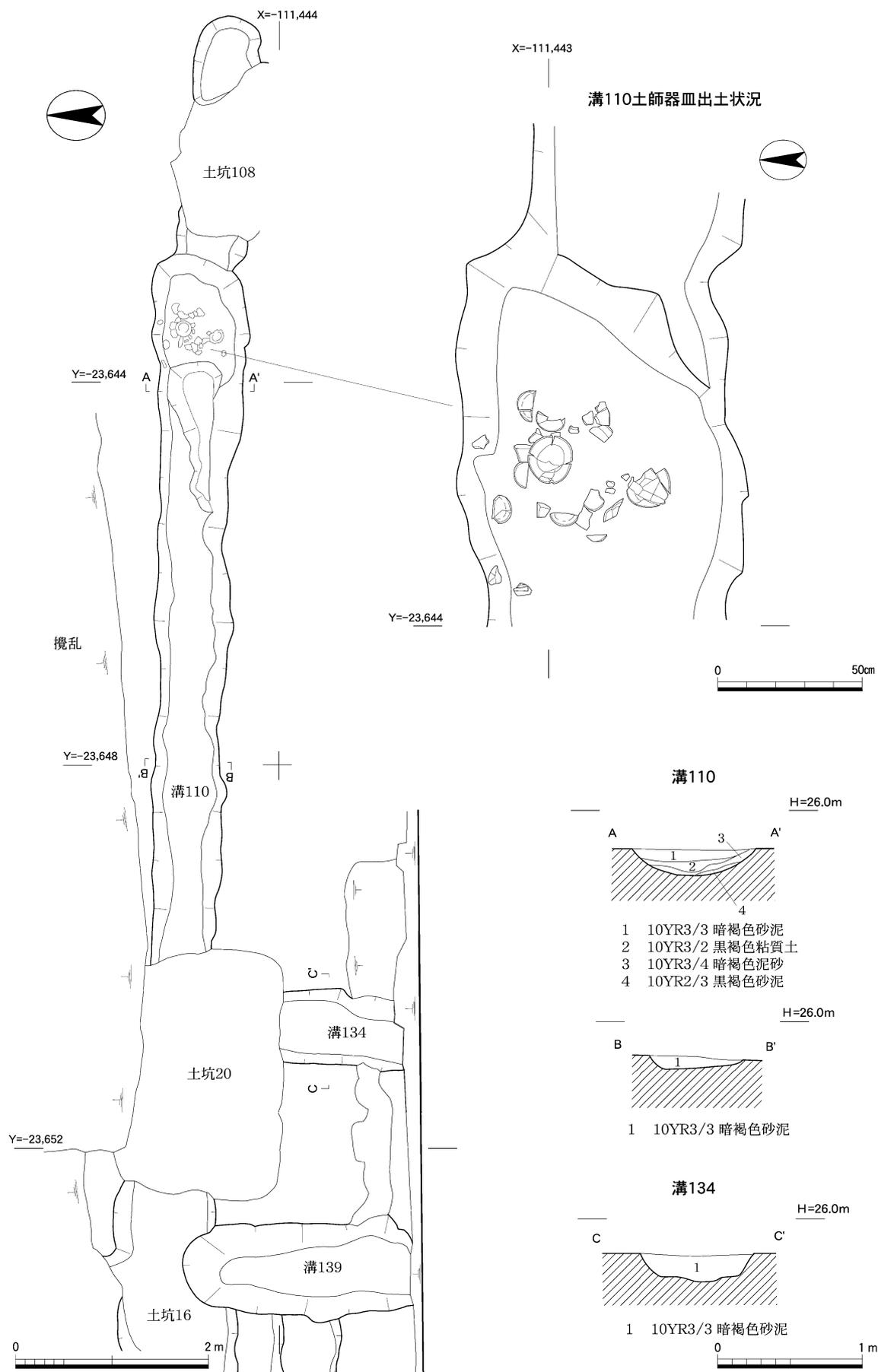


图 16 溝 110・134・139 実測図 (1:20, 1:40, 1:60)

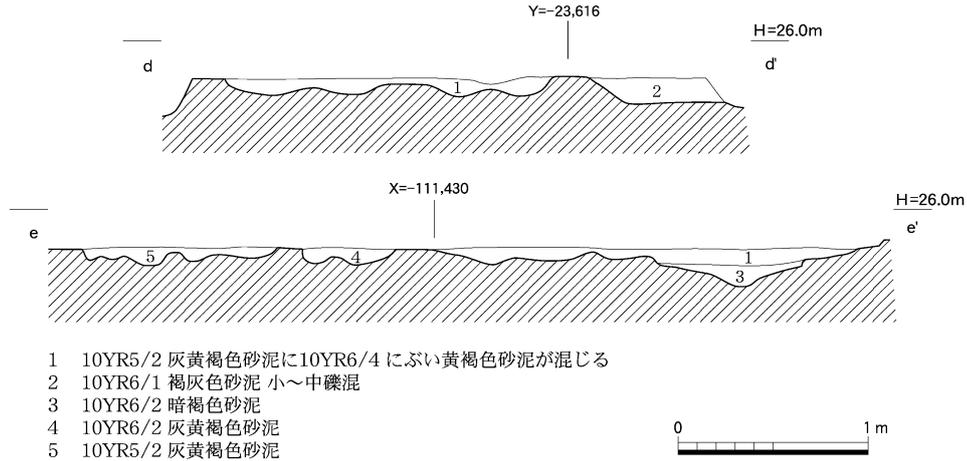


図 17 土坑 262 断面図 (1 : 40)

南北約 2.4 m、幅が約 1.0 m 前後、深さが約 0.1 m である。埋土は褐色砂泥である。溝 134 と溝 139 は、溝 110 と連繋する可能性がある。

土坑 16 (図 16) 調査区南西部で検出した。土坑 20 を隔てて、溝 110 の西側延長部にある。平面形は不整形である。検出した規模は、長さが東西約 0.2 m、幅が約 1.2 m、深さが約 0.2 m である。埋土は褐色砂泥である。この遺構は溝 110 と同じ溝の可能性はある。

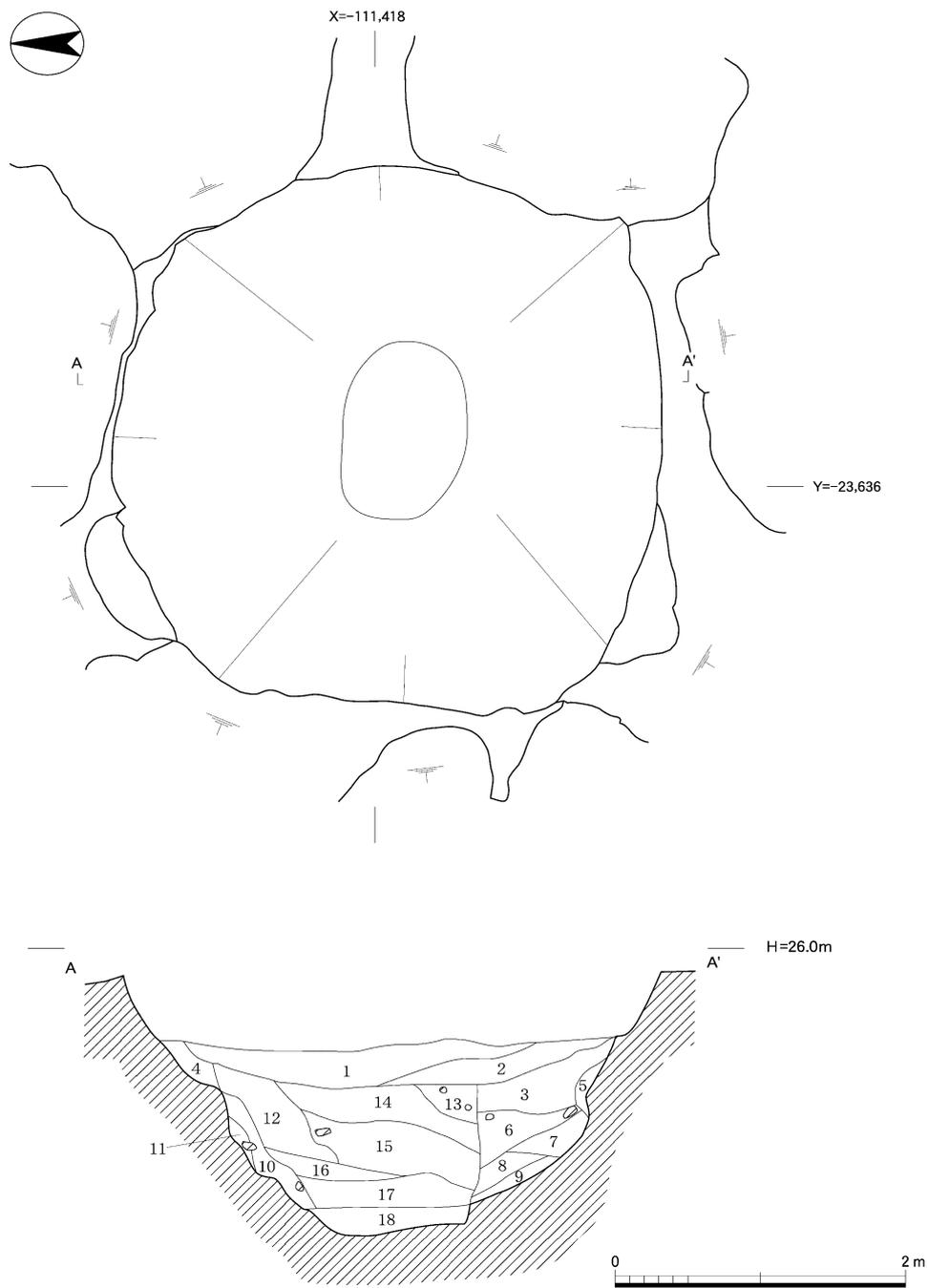
土坑 136 (図 15、図版 6) 調査区西部壁際で溝 44 と重複して検出した。平面形は、東西にやや長い隅丸方形で、東西約 2.2 m、南北約 1.5 m、深さは約 0.4 m である。埋土は、最上層は近世層、他は主にオリーブ黒色粘土である。重複する溝 44 とは検出段階では、前後関係を確認できなかった。中層には、溝 44 底面の高さと同層に流水の痕跡 (葉理・ラミナ) が認められる。これは、溝 44 の流水がこの遺構に流れこみ、溝 44 と共存していたことを示す。溝に伴う何らかの施設であろう。

土坑 262 (図 17、図版 3) 調査区東部中央部で検出し、門 2 と門 3 のほぼ中間に位置する。平面形は不整形で、底面には凹凸が認められる。規模は東西 3 m 以上、南北 4.5 m 以上の浅い窪みを整地した遺構である。深さは 0.1 ~ 0.2 m である。鎌倉時代前半の遺物が出土している。

整地土 171 (図 15) 溝 48 の東側に沿いに南北に細長く検出した。東側は攪乱坑と土取土坑により攪乱されている。検出した規模は、長さが南北約 23 m、幅は 0.5 ~ 3 m、厚さは 0.1 m 前後である。埋土は、主ににぶい黄褐色シルトである。遺物は、大半が平安時代のものであるが、鎌倉時代のものも出土している。

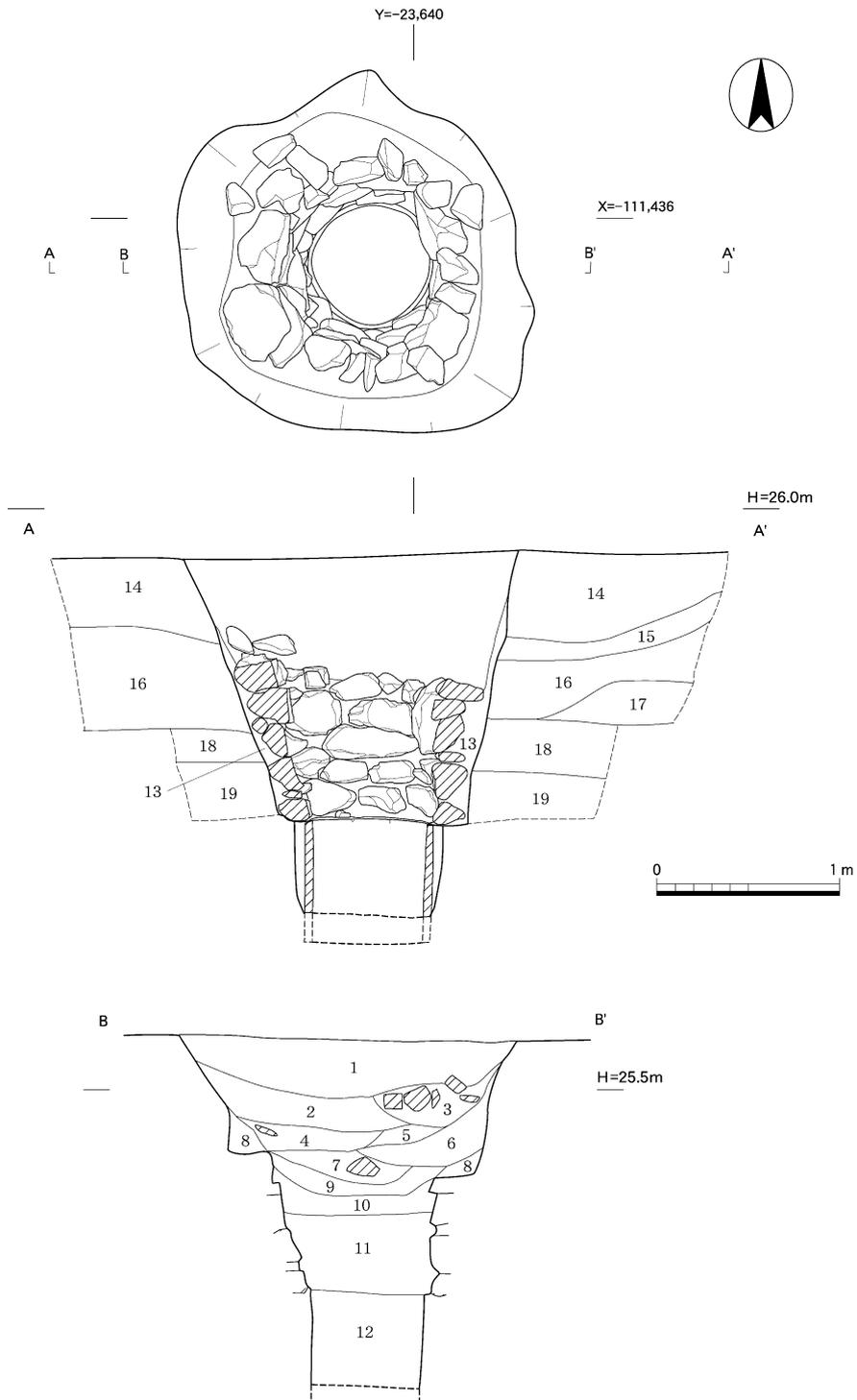
井戸 81 (図 18、図版 6) 調査区中央部北側で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、径 3.7 ~ 3.8 m、深さは約 1.8 m である。埋土は、主に灰オリーブおよび黒色系の粘土であり、最下層は砂層である。中層では縦に層が分かれ、井戸枠などは残存していなかったが、その痕跡と考えられる。埋土から、鎌倉時代前半の遺物や木片が出土している。

井戸 124 (図 19・20、図版 7) 調査区中央部南側で検出した。平面形は楕円形であり、長径が約 2.2 m、短径が約 1.9 m、底に行くほど狭くなり、円筒木枠上端で径約 0.8 m である。深さは



- | | | | |
|---|-----------------------------------|----|--------------------------------------|
| 1 | 7.5Y4/1 灰色粘土 7.5Y5/2 灰黄色粘土ブロック含む | 10 | 2.5Y3/1 黒褐色粘土 |
| 2 | 10YR3/2 オリーブ黒色粘土 | 11 | 10YR3/3 暗緑灰色微砂 |
| | 7.5Y5/2 灰黄色粘土ブロック含む | 12 | 2.5Y3/1 黒褐色粘土 7.5Y3/2 オリーブ黒色粘土ブロック含む |
| 3 | 7.5Y5/2 灰オリーブ色粘土 | 13 | 2.5Y3/1 黒褐色粘土 大礫混 |
| | 10YR3/2 オリーブ黒色粘土ブロック含む | 14 | 10YR2/1 黒色粘土 5Y4/1 灰色粘土ブロック含む |
| 4 | 10GY6/1 緑灰色粘土 粗砂混 | 15 | 2.5Y3/1 黒褐色粘土 10Y5/1 灰色粘土ブロック含む |
| 5 | 10GY6/1 緑灰色粘土 粗砂混 | 16 | 5Y3/1 オリーブ黒色粘土 |
| 6 | 7.5Y4/1 灰色粘土 2.5Y3/2 黒褐色粘土ブロック含む | 17 | 2.5Y2/1 黒色粘土 10Y5/1 灰色粘土ブロック・大礫含む |
| 7 | 5Y3/2 オリーブ黒色粘土 7.5Y4/1 灰色粘土ブロック含む | 18 | 7.5Y2/2 オリーブ黒色粗砂 中〜大礫混 |
| 8 | 5Y3/1 オリーブ黒色粘土 7.5Y4/1 灰色粘土ブロック含む | | |
| 9 | 5Y4/2 灰オリーブ色粘土 | | |

図 18 井戸 81 実測図 (1 : 50)



- | | | | |
|----|-----------------------|----|--|
| 1 | 2.5Y4/1 黄灰色微砂 | 13 | 10YR3/3 暗褐色砂礫 大礫を含む |
| 2 | 10YR3/3 暗褐色泥砂 若干礫を含む | 14 | 10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫 粗砂混
1~5cmの大礫を多量に含む |
| 3 | 10YR4/2 灰黄褐色泥砂 大礫を含む | 15 | 7.5YR5/6 明褐色細砂 |
| 4 | 7.5YR3/3 暗褐色砂泥 | 16 | 7.5YR4/4 褐色砂礫 粗砂混 大礫~極大礫を含む |
| 5 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 若干礫含む | 17 | 7.5YR4/3 褐色砂礫 粗砂混 |
| 6 | 10YR3/3 暗褐色泥砂 粗砂大量に含む | 18 | 7.5YR5/6 明褐色砂礫 大礫を含む |
| 7 | 10YR4/2 灰黄褐色泥砂 混礫 | 19 | 5YR5/2 明赤褐色砂礫 極大礫を多く含む |
| 8 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫 | | |
| 9 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂礫 砂泥混 | | |
| 10 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 腐植土混じる | | |
| 11 | 10YR3/3 暗褐色砂礫泥砂混 | | |
| 12 | 7.5YR3/3 褐色砂礫 | | |

図 19 井戸 124 実測図 (1 : 40)



図20 井戸124円筒木杵取上状況

約2mであり、検出面から深さ0.5～1.5mまでは、10～50cm大の川原石の石積みが5段残存していた。深さ1.5mから下は、ケヤキ材をくりぬいた円筒の木杵である。円筒杵の外径は約70cm、内径は約66cm、高さは約66cmである。石組みまでの埋土は、上層が褐色系の砂質層、中層が褐色系の砂泥および泥砂層、下層が砂礫層である。石組みと木杵内の埋土は、最上層が黒褐色砂泥、以下は褐色系の砂礫層である。掘形の埋土は、暗褐色砂礫である。鎌倉時代後半の遺物が出土している。

室町時代

溝状遺構1基を検出した。

溝状遺構22(図21、図版2)調査区西部南側で検出した。ひとつの遺構として考え、上層を掘り下げたところ、東西方向の溝状遺構と柱穴を検出した。溝状遺構の規模は、長さが東西約1.8m、幅は0.2～0.4m、深さは0.35～0.4mである。西側は柱穴状に約0.1m深くなる。中央部南側には、縦が約10cm、横が約14cm、厚さが約2cmの板片が残存していた。東端部ではピット状の掘形の中に径5～10cmの礫を3個検出した。遺構東部の外側で、北と南に柱穴を検出した。柱穴166は、楕円形で、長径約0.25m、短径約0.2m、深さが約0.15m、柱穴165は、半円形で、径が約0.3m、深さが約0.15mである。埋土は固く締まり、平安時代から室町時代の土器片が多量に出土する。これらの遺構の性格は不明であるが、

溝状遺構22(図21、図版2)調査区西部南側で

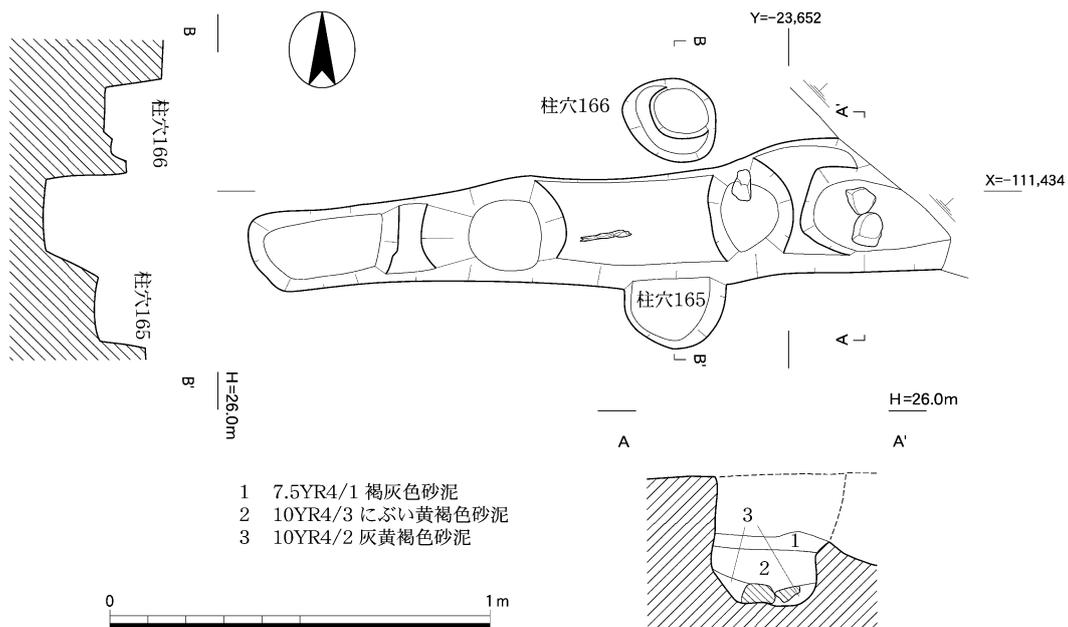


図21 溝状遺構22実測図(1:20)

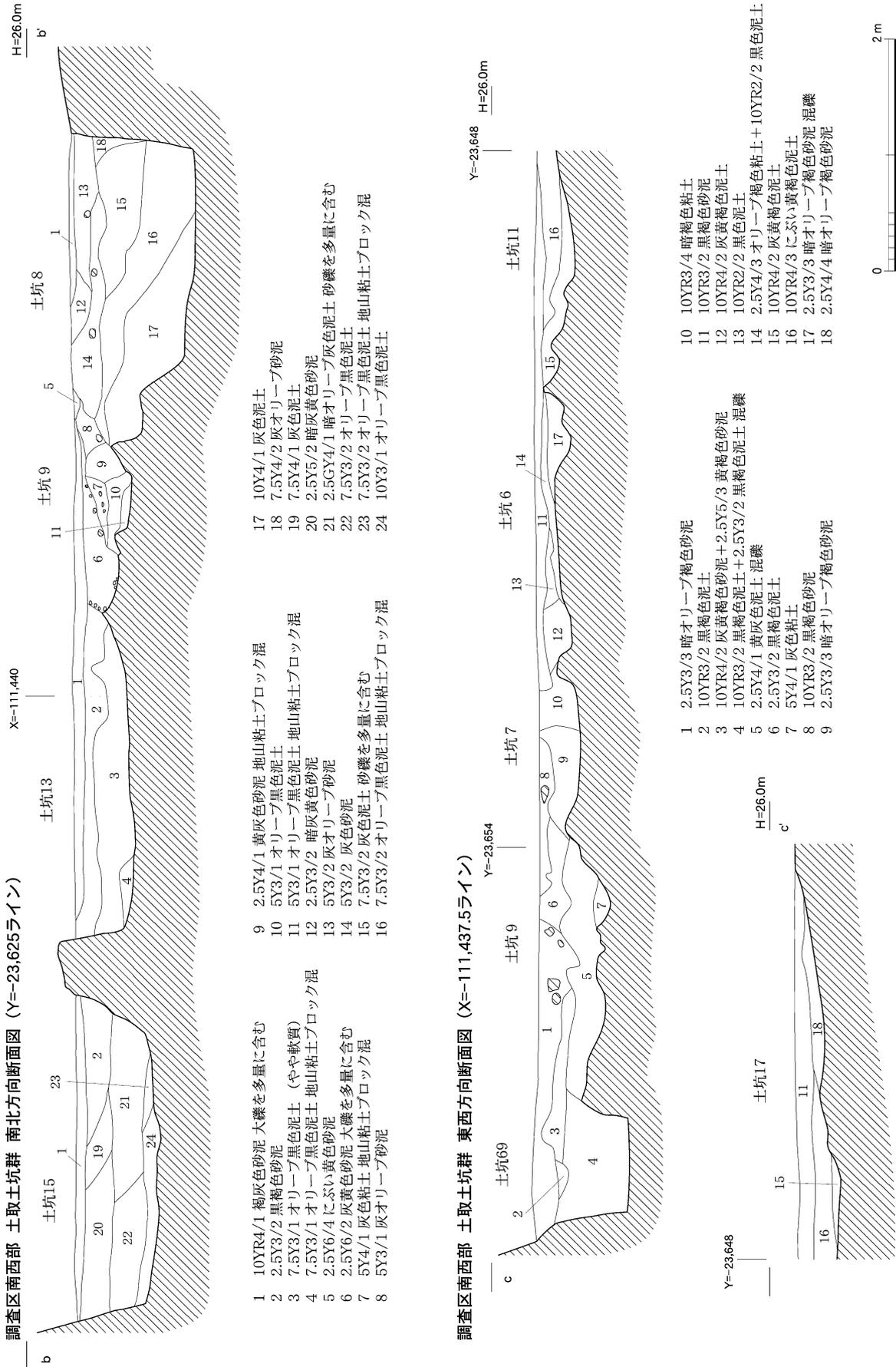


図 22 調査区南西部土取土坑断面図 (1 : 50)

江戸時代の水田区画と位置的に重なっており、何らかの区画施設の一部の可能性はある。

江戸時代

土取土坑などを検出した。

土取土坑（図 22）土取土坑は、深さ 0.1～0.3 m・径 2～6 m、深さ 0.6～0.4 m・径 3～5 m、深さ 0.7～1 m・径 2～4 m に大別でき、浅いものほど面積が広がる傾向がみられる。採取する土量に関連があると思われる。土取りの掘下げは、下層の砂礫層あるいは青灰色泥土層直上で止まる。埋土は、上層は礫や砂が多く混じり、耕作地の土層が沈下したともと考えられる。下層は泥土が多く混じり、江戸時代中期の遺物が少量出土している。混入遺物として平安時代から鎌倉時代のものが多量に出土した。埋土の堆積状況（図 22）から、土坑は土取りによる掘削後、一定時間放置され、この間に粘質土が堆積する。多くの土取土坑の埋め戻しは、平安時代から江戸時代の遺物を含む土によって一時期に行われている。また掘形の一边がほぼ直線的に並ぶラインがある。東西ラインは、X=-111,435 付近に 15 cm 前後の段差と耕作溝と考えられる東西溝があり、その西延長上で掘形の境界が並ぶ。南北ラインは、Y=-23,656 付近に位置する耕作溝 43 の両側に土坑掘形の境界が並ぶ。別の南北ラインが、さらに Y=-23,627 前後にも見られ、このラインに沿い、耕作溝と考える南北溝があり、この南北ライン延長上の調査区の北壁には、耕作地の畦畔が確認できた。土取りは、掘り下げる範囲に区画があり、その区画は耕作地の境界と考えられる。

表 4 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	土器、石器		石包丁 1 点		
奈良時代	瓦類		軒丸瓦 1 点、軒平瓦 1 点		
平安時代前期～中期	土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦類、石製品		土師器 4 点、須恵器 6 点、灰釉陶器 1 点、灰釉硯 1 点、緑釉陶器 3 点、軒丸瓦 1 点、軒平瓦 1 点、刻印瓦 4 点、丸鞆 1 点		
平安時代後期～鎌倉時代	土師器、須恵器、瓦器、陶器、輸入陶磁器、瓦類、石製品、木製品		土師器 106 点、須恵器 2 点、瓦器 41 点、山茶椀 1 点、焼締陶器 3 点、中国産青磁 3 点、中国産白磁 11 点、中国産青白磁 2 点、軒丸瓦 2 点、軒平瓦 10 点、石製品 2 点、木製品 5 点		
室町時代	土師器、輸入陶磁器、銭貨		高麗青磁 1 点		
江戸時代	陶器、磁器、金属製品		国産陶器 2 点、国産磁器 3 点		
時期不明	木製品		木製品（墨書） 1 点		
合計		105箱	220点（10箱）	4箱	91箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より 4 箱多くなっている。

4. 遺物

今回の調査で出土した遺物を時期別に大きく分けると、平安時代前期、平安時代後期から鎌倉時代、室町時代、江戸時代となる。量的には平安時代後期から鎌倉時代が最も多く、次いで平安時代前期、室町時代となる。平安時代中期の10・11世紀の遺物が出土しないのは、これまでの周辺の調査の遺物の出土傾向と同様であるが、異なるのは、室町時代の遺物が少量ではあるが、みられることである。平安時代前期の遺物は、プライマリーな状態で出土したものはほとんどなく、ほとんどが江戸時代の土取土坑からの出土である。江戸時代の土取土坑は多数検出されたが、江戸時代の遺物は極めて少なく、当時の周辺の土地利用のあり方が窺える。これまでの周辺の調査でみられた弥生時代から古墳時代の遺物はほとんどなく、図化できるものには石包丁が1点あるのみである。

(1) 土器類

溝110(図23、図版9、表5) 溝110からは総破片数275片の土器類が出土しており、今回の調査の中で最も多くの遺物が出土している。土師器、瓦器、須恵器、輸入陶磁器があるが、大半は土師器皿が占め、完形のものが多い。表5

表5 溝110出土土器の構成

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	碗・皿	731	98.3%
	鉢・盤	1	0.1%
	甕・鍋・釜	10	1.3%
	その他	0	0.0%
	不明	2	0.3%
	小計	744	100.0%
瓦器	碗・皿	30	15.5%
	鍋・釜	157	81.3%
	壺・瓶	0	0.0%
	火舎・火鉢	3	1.6%
	その他	0	0.0%
	不明	3	1.6%
小計	193	100.0%	
須恵器・山茶碗	杯・碗・皿	4	3.8%
	鉢	10	9.5%
	壺・瓶	11	10.5%
	甕	26	24.8%
	その他	6	5.7%
	不明	48	45.7%
小計	105	100.0%	
白色土器	杯・碗・皿	0	—
	高杯	0	—
	盤	0	—
	その他	0	—
	不明	0	—
	小計	0	—
国産施釉陶器	碗・皿	0	—
	壺・瓶	0	—
	その他	0	—
	不明	0	—
	小計	0	—
	焼締陶器	壺	0
甕		0	—
鉢・盤		0	—
その他		0	—
不明		0	—
小計		0	—
輸入陶磁器	碗・皿	0	0.0%
	壺・瓶	2	10.5%
	その他	0	0.0%
	不明	17	89.5%
	小計	19	100.0%
総数		1061	100.0%

表6 溝3出土土器の構成

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	碗・皿	254	99.2%
	鉢・盤	0	0.0%
	甕・鍋・釜	2	0.8%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	256	100.0%
瓦器	碗・皿	17	10.5%
	鍋・釜	139	85.8%
	壺・瓶	0	0.0%
	火舎・火鉢	3	1.9%
	その他	3	1.9%
	不明	0	0.0%
小計	162	100.0%	
須恵器・山茶碗	杯・碗・皿	4	14.8%
	鉢	6	22.2%
	壺・瓶	6	22.2%
	甕	1	3.7%
	その他	6	22.2%
	不明	4	14.8%
小計	27	100.0%	
白色土器	杯・碗・皿	0	—
	高杯	0	—
	盤	0	—
	その他	0	—
	不明	0	—
	小計	0	—
国産施釉陶器	碗・皿	0	—
	壺・瓶	0	—
	その他	0	—
	不明	0	—
	小計	0	—
	焼締陶器	壺	0
甕		1	25.0%
鉢・盤		0	0.0%
その他		0	0.0%
不明		3	75.0%
小計		4	100.0%
輸入陶磁器	碗・皿	4	100.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	4	100.0%
総数		453	100.0%

表7 溝44出土土器の構成

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	碗・皿	165	100.0%
	鉢・盤	0	0.0%
	甕・鍋・釜	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	165	100.0%
瓦器	碗・皿	27	44.3%
	鍋・釜	34	55.7%
	壺・瓶	0	0.0%
	火舎・火鉢	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	61	100.0%
須恵器・山茶碗	杯・碗・皿	0	0.0%
	鉢	0	0.0%
	壺・瓶	1	3.1%
	甕	4	12.5%
	その他	1	3.1%
	不明	26	81.3%
	小計	32	100.0%
白色土器	杯・碗・皿	0	—
	高杯	0	—
	盤	0	—
	その他	0	—
	不明	0	—
	小計	0	—
国産施釉陶器	碗・皿	1	33.3%
	壺・瓶	1	33.3%
	その他	0	0.0%
	不明	1	33.3%
	小計	3	100.0%
焼締陶器	壺	0	0.0%
	甕	0	0.0%
	鉢・盤	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	8	100.0%
	小計	8	100.0%
輸入陶磁器	碗・皿	6	100.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	6	100.0%
総数		275	100.0%

表8 溝48出土土器の構成

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	碗・皿	373	100.0%
	鉢・盤	0	0.0%
	甕・鍋・釜	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	373	100.0%
瓦器	碗・皿	7	46.7%
	鍋・釜	1	6.6%
	壺・瓶	0	0.0%
	火舎・火鉢	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	7	46.7%
	小計	15	100.0%
須恵器・山茶碗	杯・碗・皿	1	5.0%
	鉢	2	10.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	甕	11	55.0%
	その他	3	15.0%
	不明	3	15.0%
	小計	20	100.0%
白色土器	杯・碗・皿	0	—
	高杯	0	—
	盤	0	—
	その他	0	—
	不明	0	—
	小計	0	—
国産施釉陶器	碗・皿	0	0.0%
	壺・瓶	1	100.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	1	100.0%
焼締陶器	壺	0	—
	甕	0	—
	鉢・盤	0	—
	その他	0	—
	不明	0	—
	小計	0	—
輸入陶磁器	碗・皿	5	100.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	5	100.0%
総数		414	100.0%

土師器皿はすべて皿Nである。口径8.8～10.0cmの1～14と口径13.6～15.5cmの15～23がある。16～18は口縁部が丸みを持って立ち上がり、口縁端部は断面三角形を呈する。器壁はやや厚い。胎土に1mm大の長石・石英を多く含み、色調は灰褐色を呈する。

24は瓦器碗。内外面にヘラミガキを施すが、口縁部は外反、端部内面に沈線はなく器壁は薄い。土坑262(図24)52・53は土師器皿N。52は口縁部がやや外反し、端部は断面三角形を呈する。54は樟葉型瓦器碗。内外面にヘラミガキがあるが、口縁端部内面に沈線はない。

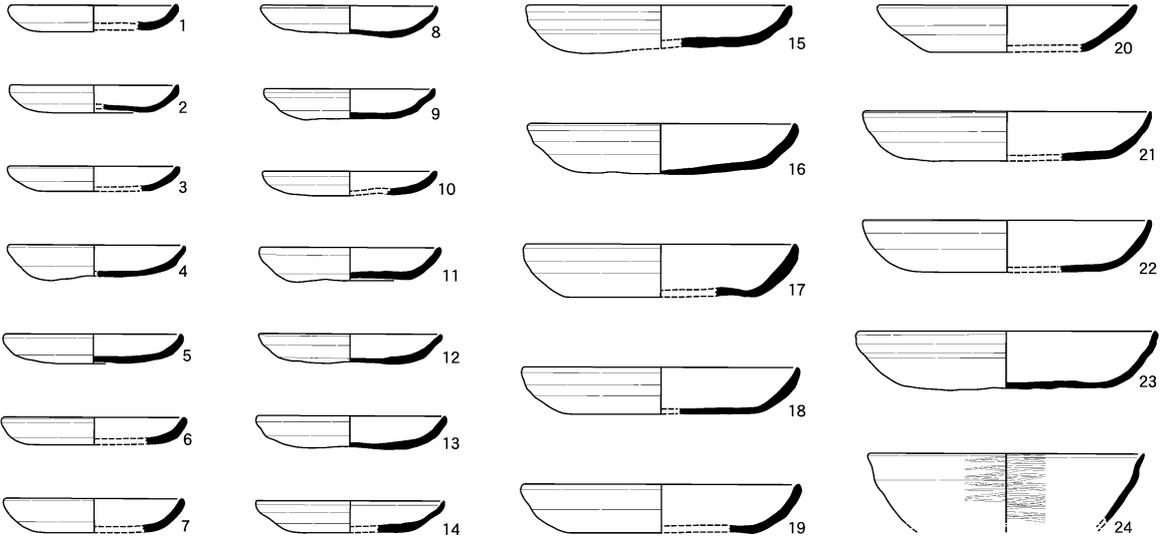
柱穴132(図24、図版10)柱穴132は門1の南東隅の柱穴、掘形内より土師器皿が出土。55・56は皿N。口径14.8～15.0cm。口縁部の2段ナデは明瞭である。

土坑136(図24)57は山茶碗。器壁はやや薄く、口縁部は外反する。

土坑16(図25)58～61は土師器皿。58は皿Ac。59～61は皿N。口径9cm前後の59と口径14cm前後の60・61がある。62は樟葉型瓦器碗。内面のヘラミガキはやや間隔があく。

溝44(図25、図版10、表7)西坊城小路東側溝は、平安時代後期から鎌倉時代にかけて掘り直されており、2条の溝が確認されているが、溝44はその古段階の溝である。総破片数275片の土器類が出土している。63～68は土師器皿N。口径8.4～9.6cmの63・64と口径14.7～

溝110



溝3

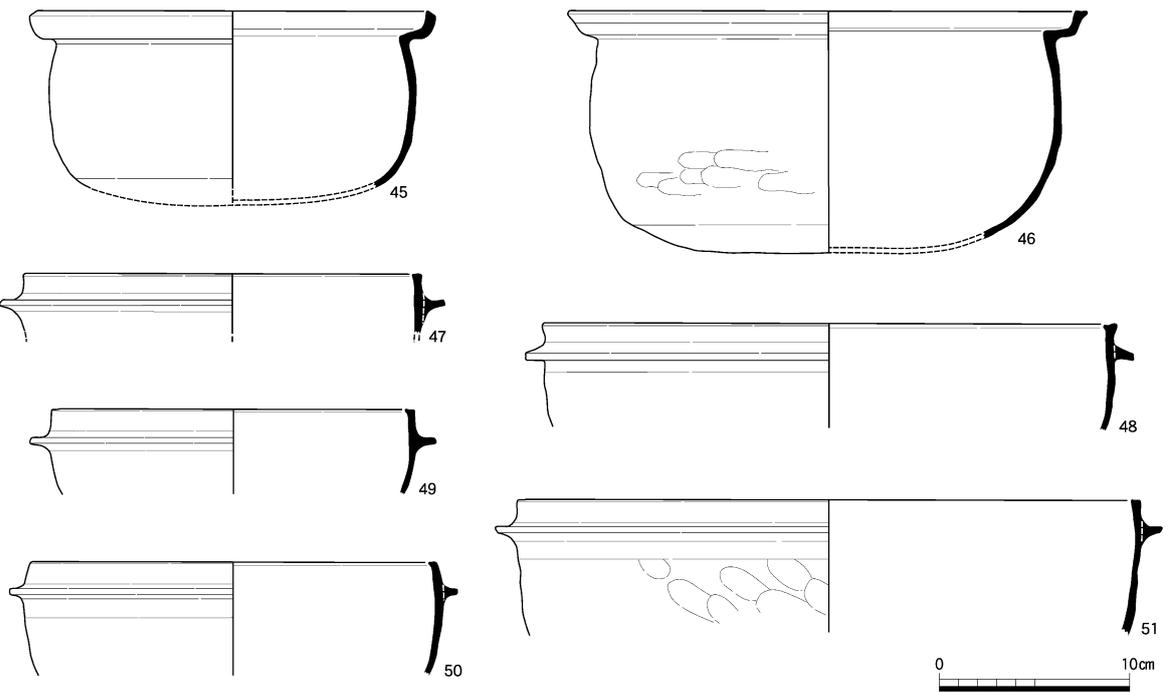
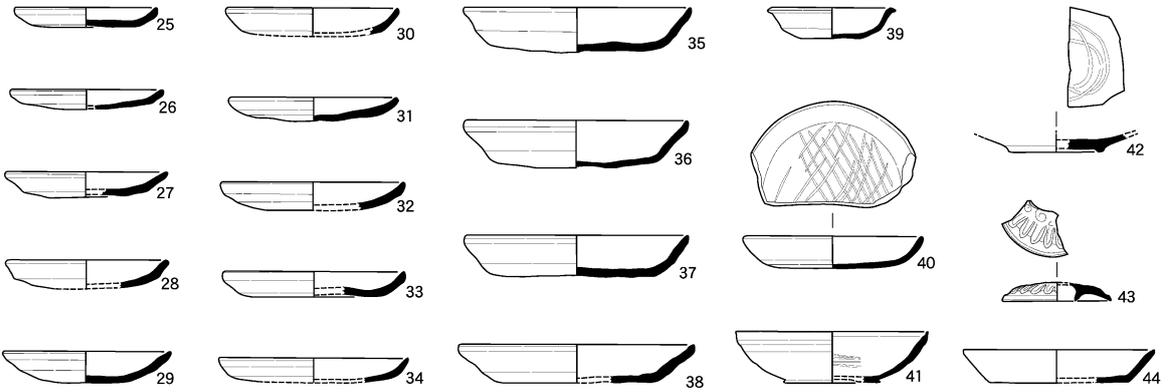


图23 溝3·110出土土器实测图(1:4)

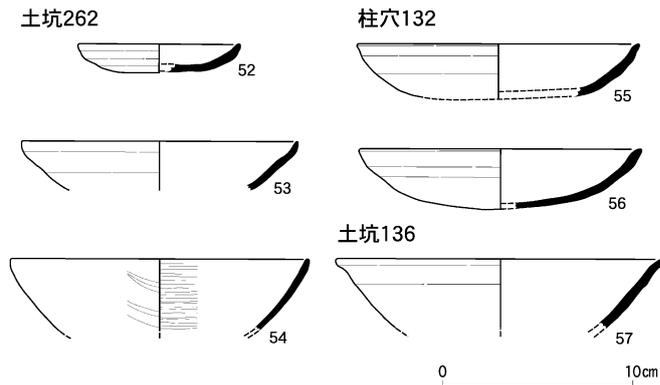


図24 柱穴132・土坑136・262出土土器実測図(1:4)

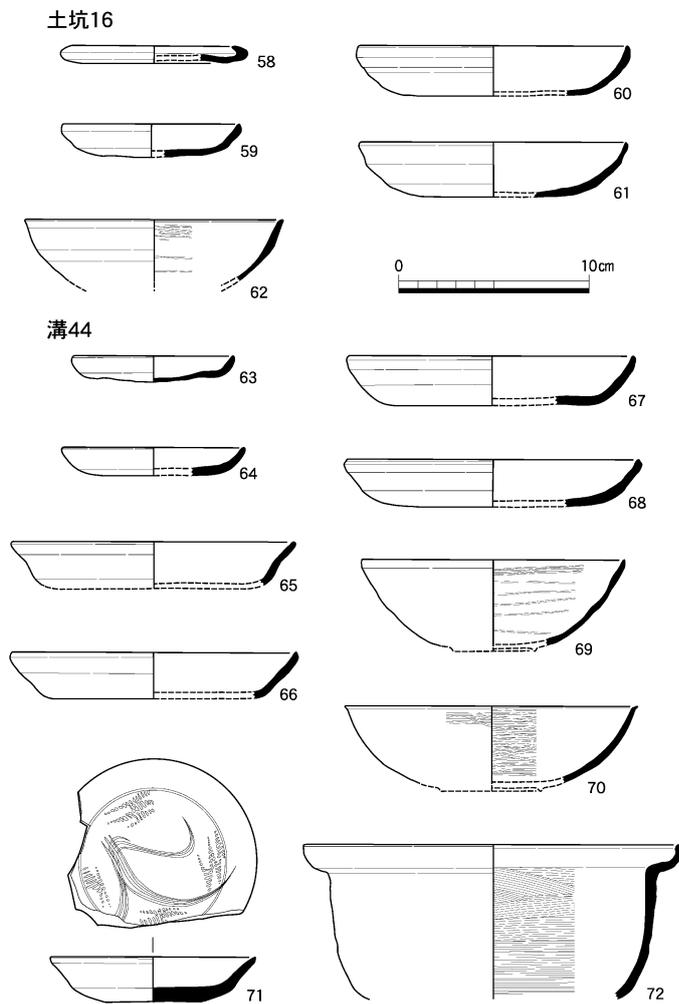


図25 土坑16・溝44出土土器実測図(1:4)

の一部分に灰釉が認められる。116は山茶碗系の鉢。117・118は瓦器釜。119は土師器釜。120・121は東播系須恵器鉢。122～131は瓦器。122はコースター状を呈する皿。土師器皿を模倣したものとみられる。内面底部に暗文は認められない。123・128は和泉型瓦器碗。126・127は大和型瓦器碗。129～131は樟葉型瓦器碗。127・130は磨滅により内外面ヘラミガキ不明である。

井戸81(図27、図版10) 井戸81から出土の土器は、すべて井戸枠抜き取り後の埋め土から

15.2 cmの65～68に分かれる。69・70は瓦器碗。69は樟葉型瓦器碗。体部内面のヘラミガキの間隔は粗い。70は大和型瓦器碗。内面のヘラミガキは密であるが、外面は口縁部付近にしか施されず、器壁は薄い。71は同安窯系青磁皿。72は瓦器鍋。

溝48(図26、図版9、表8) 溝48は西坊城小路東側溝の新段階の溝。総破片数414片の土器類が出土している。溝110と並んで遺物の出土点数が多い。土師器、瓦器、須恵器、施釉陶器、輸入陶磁器が出土し、その大半を土師器皿が占める。瓦器碗の出土点数は少ないが、同時期の左京域と比較すると高い比率で出土しており、大和型の多い点が注目される。

土師器皿類には皿Nと搬入品とみられるロク口整形のものがある。皿Nには、口径9.0～11.6 cmの73～101、14.2～15.0 cmの103～110、16.0 cmの111がある。102はロク口整形による土師器皿。口縁部の立ち上がりはきわめて低い。底部外面には糸切痕と糸切り後に付いた板状圧痕が認められる。胎土は比較的精良であるが、1～3 mm大の長石、チャートが含まれる。色調は橙褐色。112～114は輸入陶磁器。112は白磁皿。113・114は白磁碗。115は瀬戸灰釉壺、外面

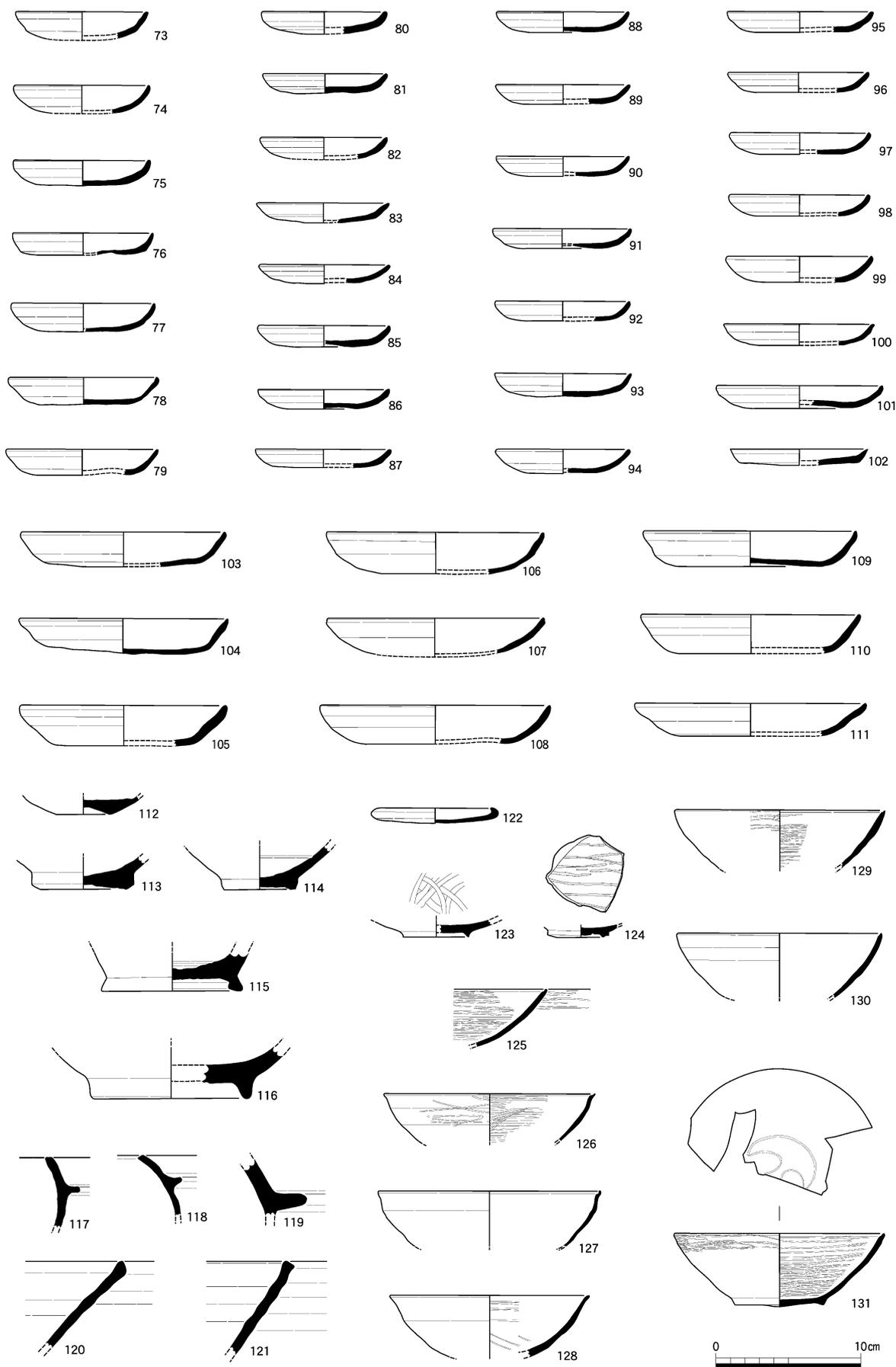


图 26 沟 48 出土土器实测图 (1 : 4)

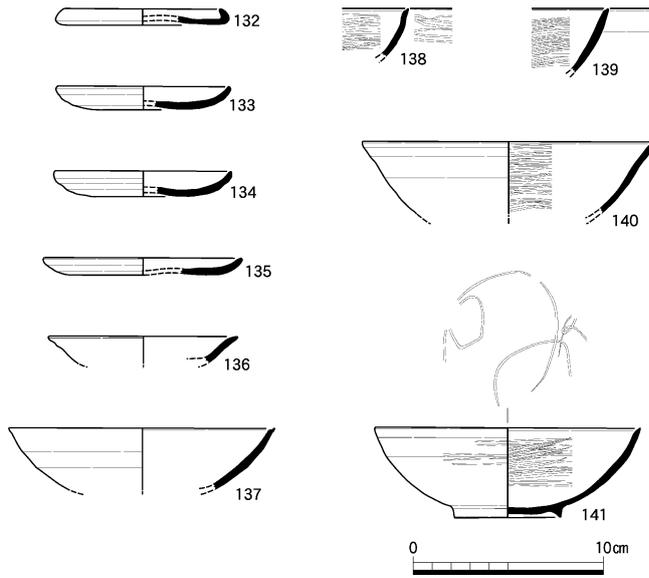


図 27 井戸 81 出土土器実測図 (1 : 4)

の出土である。132～135は土師器皿。132は皿Ac。133～135は皿N。136は白磁皿。137～141は瓦器椀。137・138・141は大和型瓦器椀。内面のヘラミガキの間隔は密である。137は磨滅によりヘラミガキは観察できない。140の内面ヘラミガキは密であるが、口縁部はやや外反気味で器壁は薄い。

溝3 (図23、図版10、表6) 溝3からは総破片数453片の土器類が出土している。土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器などがあり、瓦器の鍋釜類が

高い比率を占めるのが特徴的である。土師器皿はすべて皿Nで、皿Sの出土はない。25～38は土師器皿N。口径7.6～10.0cmのもの(25～34)と口径11.6～12cmのもの(35～38)に分かれる。39～42は瓦器。39・40は皿。39は内面底部に暗文はない。口径に対して器高が高く、白色系土師器皿に形態が似る。41・42は瓦器椀。41は器高が低く皿に近い。高台の断面形は歪な三角形を呈する。43・44は輸入陶磁器。43は青白磁合子蓋。44は白磁皿。45・46は瓦器鍋。45は46に較べて口縁部の屈曲する角度が鈍く、受け部が小さく内傾する。47～51は瓦器釜。いずれも体部内面は板状工具によるナデにより平滑に仕上げられる。47～50は口縁端部内面が小さく肥厚するが、51の口縁端部は断面方形を呈する。

井戸124 (図28、図版10) 井戸124からは土師器、瓦器、輸入陶磁器などが出土するが、量は極めて少ない。142～145は土師器皿。142は皿Ac。143～145は皿N。口径8.5cm前後の143・144と口径12.4cmの145がある。

146は瓦器皿。通常の瓦器皿よりも口径は小さく器高が高い。形態は白色系の土師器皿に似る。

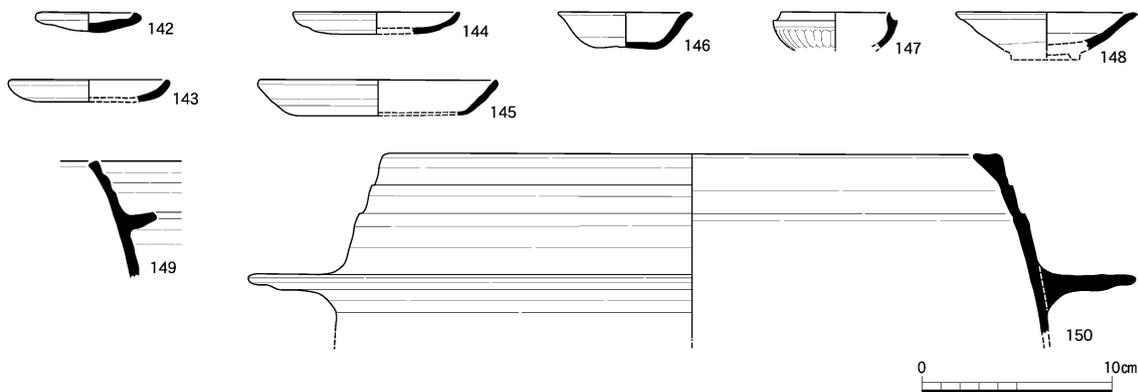


図 28 井戸 124 出土土器実測図 (1 : 4)

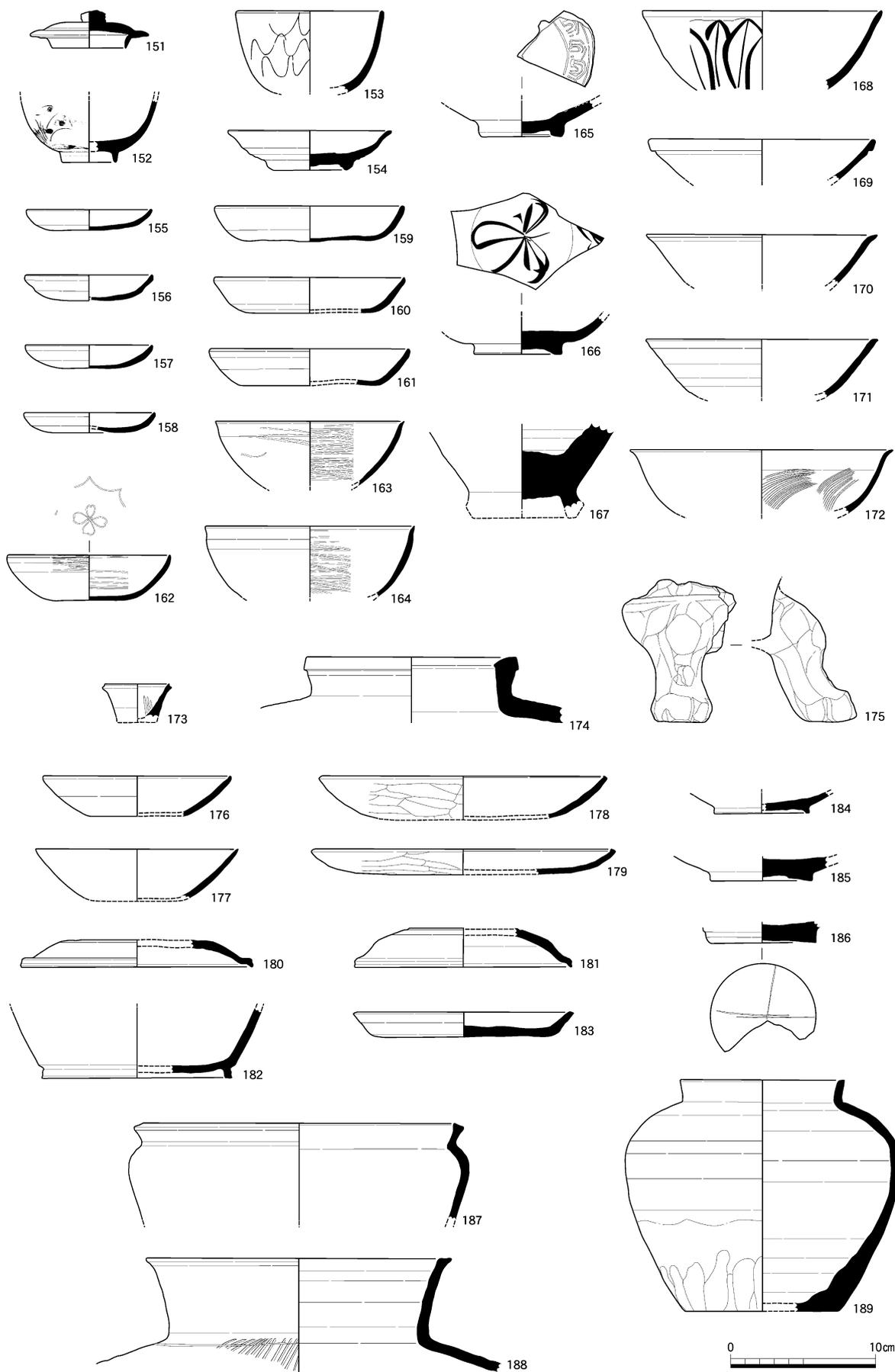


图 29 土取土坑出土土器实测图 (1 : 4)

147・148は輸入陶磁器。147は青白磁合子。148は白磁皿。149・150は瓦器釜。いずれも埋土の最上層からの出土。

土取土坑出土遺物（図29、図版10）江戸時代の土取土坑からは、平安時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代の各時代の遺物が出土している。時代別に出土量をみると、平安時代後期から鎌倉時代が最も多く、平安時代前期、室町時代、江戸時代となる。土取土坑を最終的に埋めた土は客土であり、そこに含まれる遺物の本来存在した場所は、不明である。しかし、土取土坑出土の時代毎の遺物量と、今回の調査で検出された時代ごとの遺構の遺物量の比率は、対応しており、調査地周辺に存在した土と、それに含まれる遺物である可能性が高い。遺物の出土は、調査区東側の土取土坑からはほとんどなく、西坊城小路側溝付近からが多い。

151～153は肥前系磁器。154は肥前系陶器、外面高台近くまで灰釉を施釉。155～161土師器皿N。162～164は瓦器。162は樟葉型瓦器椀、163～164は大和型瓦器椀。

165～172は輸入陶磁器。165は高麗青磁椀。内面底部に白色粘土の象嵌技法により、蓮華文、その上下に圈線を巡らせる。蓮華文は印刻による施文。施釉は内外面全面施釉、全体に貫入が認められ、色調は緑灰色を呈する。高台畳付け部から高台内面にかかる胎土目が認められる。また高台畳付け部は、滑らかで一部釉が剥れており、やすりをかけた可能性がある。時期は14世紀の後半、高麗青磁の末期の製品と考えられる¹⁾。166・168は青磁椀。167は白磁四耳壺底部。169～172は白磁椀。

173はミニチュアの播鉢。胎土には長石を含み、色調は赤褐色を呈する。信楽産と思われる。

174は焼締陶器壺。口縁端部外面は面を持ち、内面は小さく肥圧する。色調は内外面が暗い赤化色、断面が白灰色を呈する。175は瓦器。鉢形火鉢の脚部。

176～179は土師器。176・177は椀A。外面のヘラケズリは磨滅のため確認できない。178

は杯A。179は皿A。180～183・187・188は須恵器。180・181は杯B蓋。182は杯B。183は皿C。187は甕C。188は甕A。184～186は緑釉陶器。184・185は高台内面を除いて全面施釉。焼成は硬質。186は内面および外面は高台より上までを施釉。焼成は軟質。高台に「×」のヘラ記号を刻む。189は灰釉陶器壺。外面体部中位まで灰釉を施釉。

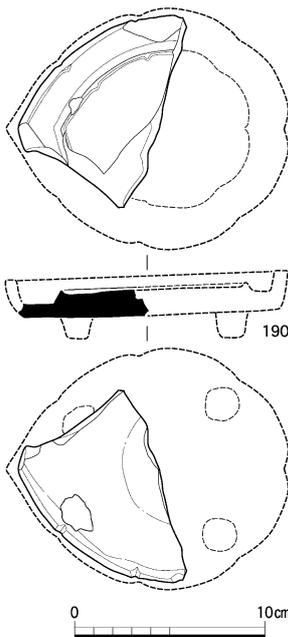


図30 碗実測図（1：4）

（2）硯（図30、図版10）

190は灰釉八花硯。陸部の外周の突帯は内面に向かって小さな凸部を持ち、復元すると7箇所となる。陸部は使用による小さな凹凸が認められる。海部外周の立ち上がりは遺存していないが、断面の厚さから7mm程度に復元できる。外面底部の中央と内面を除き灰釉を施釉。溝44からの出土であるが、平安時代前期のものである。類品が長岡京跡、平安京右京六条一坊五

町跡から出土している²⁾。

(3) 瓦類 (図 31、図版 11)

瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦があり、時代は平安時代以前の搬入瓦、平安時代中期、平安時代後期のものがあるが、平安時代後期が最も多い。出土する遺構は、大半が江戸時代の土取土坑で、その中でも調査区西側に集中する。

191 は複弁蓮華文軒丸瓦。花卉は盛り上がりがなく平坦。珠文は密に配され、傾斜する外縁には線鋸歯文が施される。内外区を分かち圈線は細い。瓦当部凹面はヘラケズリ。断面色調は灰白色を呈し、焼成は軟質である。平城宮 6282 型式。江戸時代の土取土坑出土。

192 は複弁四葉蓮華文軒丸瓦。複弁と撥形を呈する弁間文の一部がわずかに残る。断面色調は灰白色を呈し、焼成は軟質である。溝 44 出土。

193 は巴文軒丸瓦。巴は長く伸び圈線状を呈する。外縁は外側が突出し、内側が低く 2 段になる。断面色調は灰白色を呈し、焼成は軟質である。江戸時代の耕作土出土。

194 は二巴文軒丸瓦。右巻き。内外区を分かち圈線は太い。粒の大きい珠文は、一部に範傷が見られ外縁に接する。瓦当裏面の指押さえ痕は顕著である。色調は灰白色を呈し、焼成は軟質である。江戸時代の土取土坑出土。

195 は均整唐草文軒平瓦。反転する唐草と内外区を分かち界線は共に細い。密に配される主文は大きく、楕円形を呈する。瓦当面よりも瓦範が小さい為に外縁がない。色調は灰白色を呈し、焼成は軟質である。平城宮 6671 形式。江戸時代の土取土坑出土。

196 は唐草文軒平瓦。唐草文は、強く巻き込み各单位が離れる。直線顎。瓦当部は、凹面がヨコナデ、凸面は平瓦部から連続する縦方向ヘラケズリ。色調は暗灰色を呈し、焼成は硬質である。胎土には 4 mm 代の長石粒が含まれる。類例は少ないが、平安京右京六条一坊五町出土瓦と同範と思われる³⁾。江戸時代の土取土坑出土。

197 は唐草文軒平瓦。半折り曲げ式。瓦当部は、凹面が平瓦部から連続する布目、凸面はヨコナデ。平瓦部は、凹面が布目、凸面は縄叩き。色調は灰白色を呈し、焼成は軟質である。井戸 124 出土。

198 は唐草文軒平瓦。折り曲げ式。瓦当部は、凹面端部がヨコナデ、凸面は平瓦部から連続する縦方向ヘラケズリ。平瓦部は、凹面が瓦当面近くまで布目が残り、凸面は縦方向縄叩きが残り。色調は暗灰色を呈し、焼成は硬質である。胎土には 2 mm 代の長石粒が多く含まれる。江戸時代の土取土坑出土。

199 は剣頭文軒平瓦。折り曲げ式。瓦当部は、凹・凸面ともに横方向ヘラケズリ。平瓦部は、凹面が布目、凸面はナデ。平瓦右端を縦方向のヘラケズリにより面取り。色調は断面灰白色を呈し、焼成は軟質である。江戸時代の耕作土出土。

200 は剣頭文軒平瓦。折り曲げ式。瓦当部は、凹・凸面ともに横方向ヘラケズリ。平瓦部は、凹面が布目、凸面はナデ。江戸時代の土取土坑出土。

201 は剣頭文軒平瓦。折り曲げ式。瓦当部は、凹・凸面ともに横方向ヘラケズリ。平瓦部は、

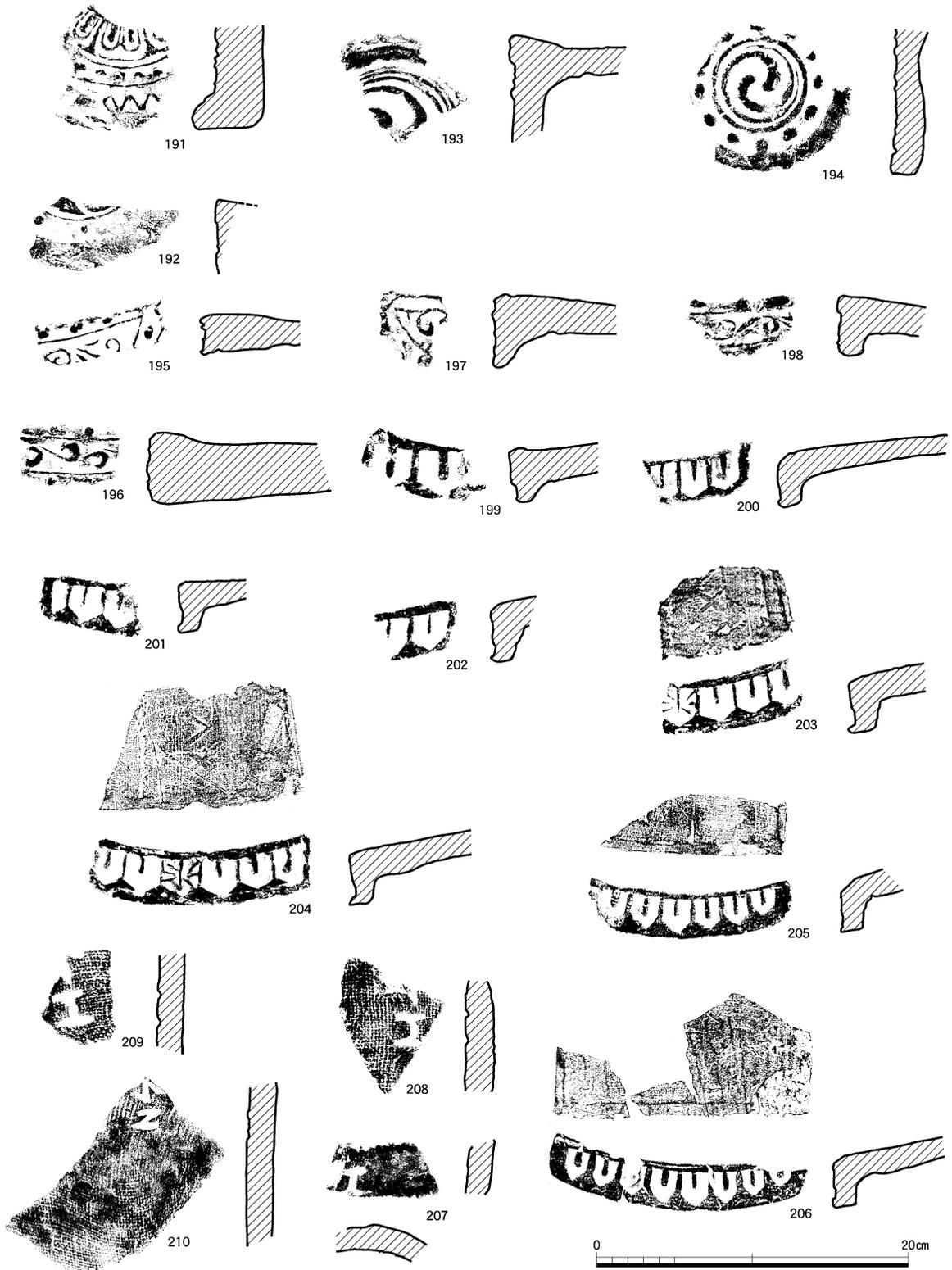


図 31 軒瓦・文字瓦拓影・実測図（1：4）

凹面が布目、凸面はナデ、顎部にそって強いヨコナデ。色調は灰色を呈し、焼成は硬質である。江戸時代の土取土坑出土。

202 は剣頭文軒平瓦。折り曲げ式。瓦当部は、凹・凸面ともに横方向ヘラケズリ。色調は白色を呈し、焼成は軟質である。江戸時代の土取土坑出土。

203・204 は剣頭文軒平瓦。同範瓦。折り曲げ式。いずれも瓦当右端を欠損するが、本来は剣頭文を7個配し、中央の剣頭文に「米」に似た中心飾りを配する。瓦当部は、凹・凸面ともに横方向ヘラケズリ。平瓦部凹面は布目。布目の上から格子叩きを施す。タタキ原体は幅2.5 cm程度の細長いものである。タタキ後にヘラ記号が刻まれる。平瓦部凸面は指頭圧痕が顕著に残る。色調は断面灰白色を呈し、焼成は軟質である。203が井戸124、204が江戸時代の土取土坑出土。

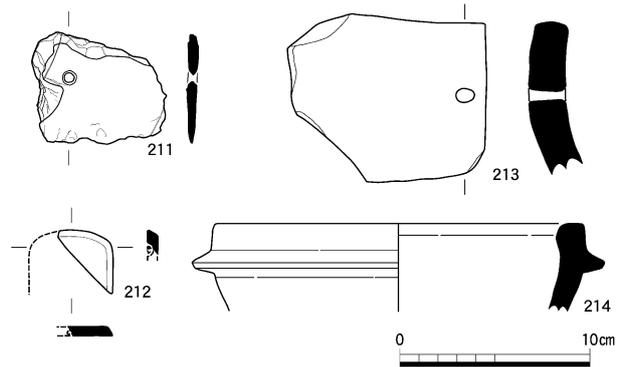


図32 石製品実測図(1:4)

205・206 は剣頭文軒平瓦。同範瓦。折り曲げ式、瓦当部分にも布目が残る。剣頭文を8個配する。瓦当部は、凹・凸面ともに横方向ヘラケズリ。平瓦部は、凹面が布目でヘラ記号が刻まれる。凸面は指頭圧痕が顕著で一部に布目が残る。色調は断面灰白色を呈し、焼成は軟質である。胎土には2 mm代の長石粒が多く含まれる。205が溝44出土。206は江戸時代の土取土坑出土。

207～210 は「木工」銘が押捺された丸・平瓦。207は丸瓦凸面に陰銘で押捺する。208～210は平瓦凹面に陰銘で押捺。207・209が江戸時代の耕作土、208が江戸時代の土取土坑出土。

(4) 石製品(図32、図版12)

211 は石包丁。全体に痛みが激しく背面は剥離している。粘板岩。溝状遺構22出土。

212 は石製帯の丸軋。残存長3.0 cm×27 cm、厚さ0.6 cmを測る。中央上部に潜り穴がある。表面・側面は平滑に磨き上げ光沢を出している。裏面は平滑に仕上げるが、光沢を放つほどには磨いていない。色調は黒色を呈する。掘立柱建物1の柱穴154出土。

213 は破損した石鍋を温石に転用したもの。上面は口縁部で右側面と下面を磨き平滑に仕上げ、右端中央に穿孔を施す。江戸時代の土取土坑出土。

214 は石鍋。江戸時代の土取土坑出土。

(5) 木製品(図33、図版12)

215 は用途不明の木製品。軸部の両端に花文を削り出す。左方が菊花文、右方も花文であるが一部欠損しており、詳細は不明である。両側の花文の一部に金箔が残る。仏具、室内装飾具の可能性が考えられる。⁴⁾溝44出土。

216 は円形の板状木製品。円形の上部に放射状の文様を墨書する。下部は欠損する。江戸時代の土取土坑出土。

217 は毬。痛みが激しく加工痕は確認できない。溝43出土。

218～220 は漆器。218・219は椀底部。218は内面に赤漆により梅花文を描く。溝44出土。

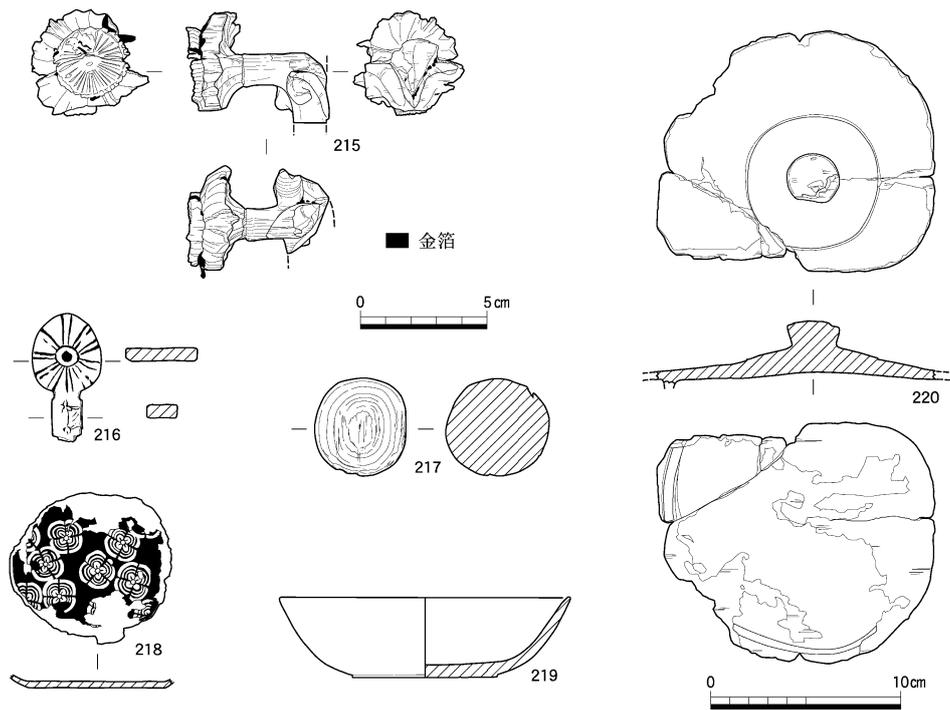


図 33 木製品実測図（1：4、215のみ1：3）

219 は井戸 81 下層出土。220 は蓋。口縁部は欠損する。外面中央に大振りなつまみを挽き出す。内面外側には受け部を構成するかえりを挽き出す。溝 44 出土。

註

- 1) 高麗青磁については、高正 龍氏（立命館大学）、韓 盛 旭氏（韓国文化遺産研究院）、降矢哲男氏（茶道資料館）から御教示を得た。
- 2) a 『長岡京市史』資料編一 1991 年
b 『平安京右京六条一坊—平安時代前期邸宅跡の調査—』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 11 冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1992 年
- 3) 註 2 の b に同じ 図版二二の 629・630
- 4) 木製品 215 については、伊東史朗氏（京都国立博物館名誉館員）より御教示を受けた。

5. まとめ

今回の調査では、平安京右京六条一坊三町南西部において、平安時代前期の掘立柱建物1棟のほか、平安時代後期から鎌倉時代の建物（門）や小路側溝、井戸などの各種遺構を検出する成果を得た。以下では、それらについて若干の検討を加えたい。

平安時代前期の遺構 平安時代前期の南北棟建物1を検出した。既調査では、同五町で1町規模の平安時代前期邸宅跡を検出している。三町では平安時代前期の井戸1基と溝1条を検出したにとどまっており、今回、建物1を検出したことは、大きな成果といえる。建物1の身舎柱穴掘形は、一辺が0.8～1.0 m、柱痕跡の径は0.3～0.4 m、柱間が8尺が主である。柱痕跡から復元できる柱径は、かなり太い¹⁾。建物1を検出した位置は、三町の南西隅部であることから、主要な建物ではないと考えられる。しかし、三町は平安京の朱雀大路に面する坊城の地として特別街区であることから、建物1は、役所や大規模な邸宅の一部の可能性が高い。

平安時代後期から鎌倉時代の遺構 今回の調査では、平安時代後期から鎌倉時代の門跡3基と条坊関連遺構と考えられる溝を数条、井戸2基などを検出した。三町の既調査では、土取土坑により攪乱されていたため、平安時代後期から鎌倉時代の遺構は、三町北西部1/4の中央付近で井

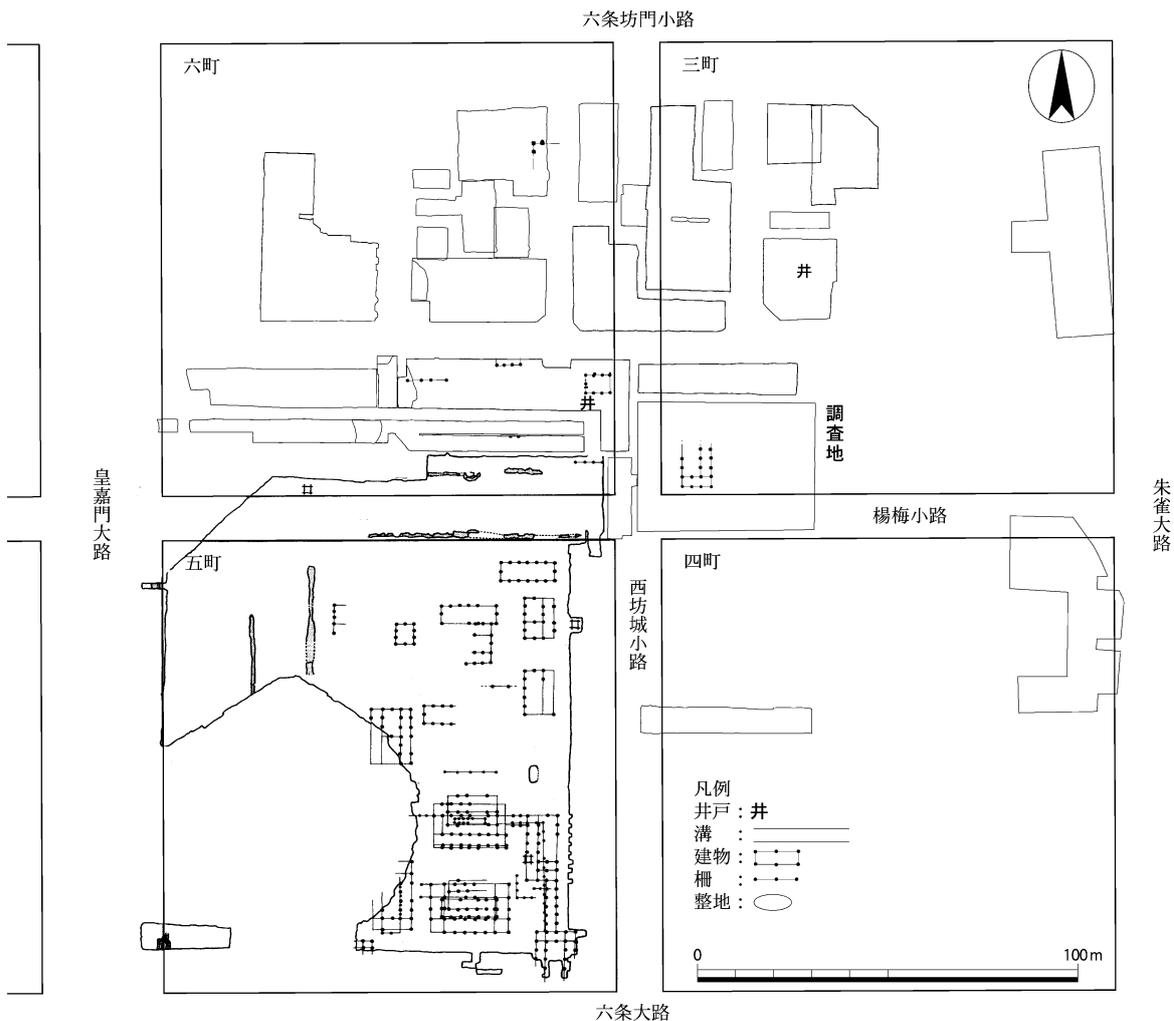


図34 平安時代前期の主な遺構（1：2,000）

戸1基を検出したのみである。今回の調査で検出した門の成立時期は、出土遺物から、門1は平安時代後期、門2・3は鎌倉時代前半と考えられる。調査地南西隣の既調査では六町の推定楊梅小路北築地心の位置で、楊梅小路に面して開く鎌倉時代の門跡を検出している²⁾。これと規模・構成を比較すると類似点も多く、門1・2は門跡と考えてよいだろう。門3は、その柱間から他の建物を考え難い。また、門2の北に位置し、ほぼ直線に並ぶ。この位置関係から、門2は道路から敷地に入る門であり、その奥に整地面（土坑262）が広がり、北側に位置する邸宅内の門であったと考えている。以上から、平安時代後期から鎌倉時代の三町は、宅地利用がなされていたと考えられる。

調査地近隣の既調査では、西坊城小路西側溝（平安時代後期）や同東側溝（平安時代末から鎌倉時代）、楊梅小路北側溝（平安時代末から鎌倉時代）を検出しており、調査地周辺は、平安時代後期から鎌倉時代には、条坊遺構の側溝が造営されていたという調査成果を得ている。

溝44と溝48は、調査地の北側の既調査で検出された西坊城小路東側溝の南延長線上に位置し、出土遺物より、ほぼ同時期の溝であることから、西坊城小路東側溝であろう。溝44・溝48は、底面標高から、水流は南行していたと考えられる。西坊城小路・楊梅小路の交差点付近は、江戸

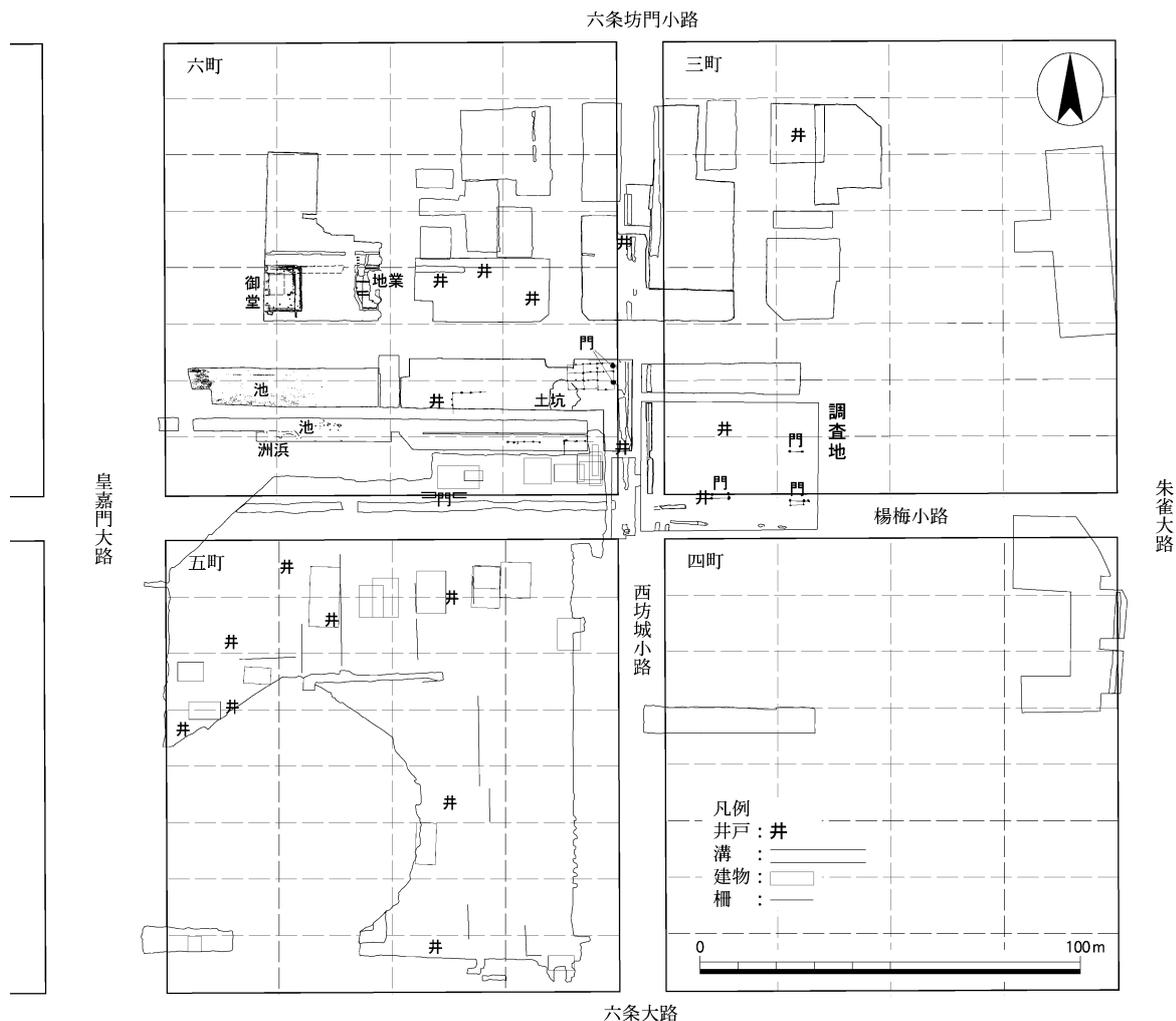


図35 平安時代後期から鎌倉時代の主な遺構（1：2,000）

時代の土取り穴によって大部分は失われている。しかし、溝 48 の南延長部、土坑 13 と土坑 15 の間にわずかに残る地山面の標高は、溝 44・48（同東側溝）の底面より高く、水流は路面部を南行していなかったと考えられ、西行していた可能性が高い。出土遺物から、溝の埋没時期は平安時代末期から鎌倉時代前半である。溝 48 の東側には、整地土 171 が広がる。東限は不明だが、その検出位置は、西坊城小路東側溝に隣接していることから、築地などに関連する可能性がある。

今回、楊梅小路の北側約 9.5 m を調査した事になるが、推定路面のほとんどが調査区内であり、検出した溝は、溝 3 および一連の溝と考える溝 110・256・257 である。溝 3 は、調査区西隣の既調査で検出された楊梅小路北側溝の東延長線上に位置し、楊梅小路北側溝であろう。西側延長部は攪乱されているが、溝の底面標高は西側へ低くなっていくことから、溝の流水は、南北溝と合流して西行していた。出土遺物から埋没時期は、鎌倉時代後半である。

溝 110・256・257 は、楊梅小路南側溝心推定ラインより 1～3 m 北に位置するが、近くでは他に溝を検出できなかったことから、これが楊梅小路南側溝の可能性もある。土坑 16・溝 134・溝 139 の埋土は、溝 110 の埋土と類似し、土坑 16 は溝 110 と、溝 134・139 は溝 110 と直交して連繋していたものと思われ、溝 134・139 は西坊城小路東側溝の可能性もある。出土遺物か

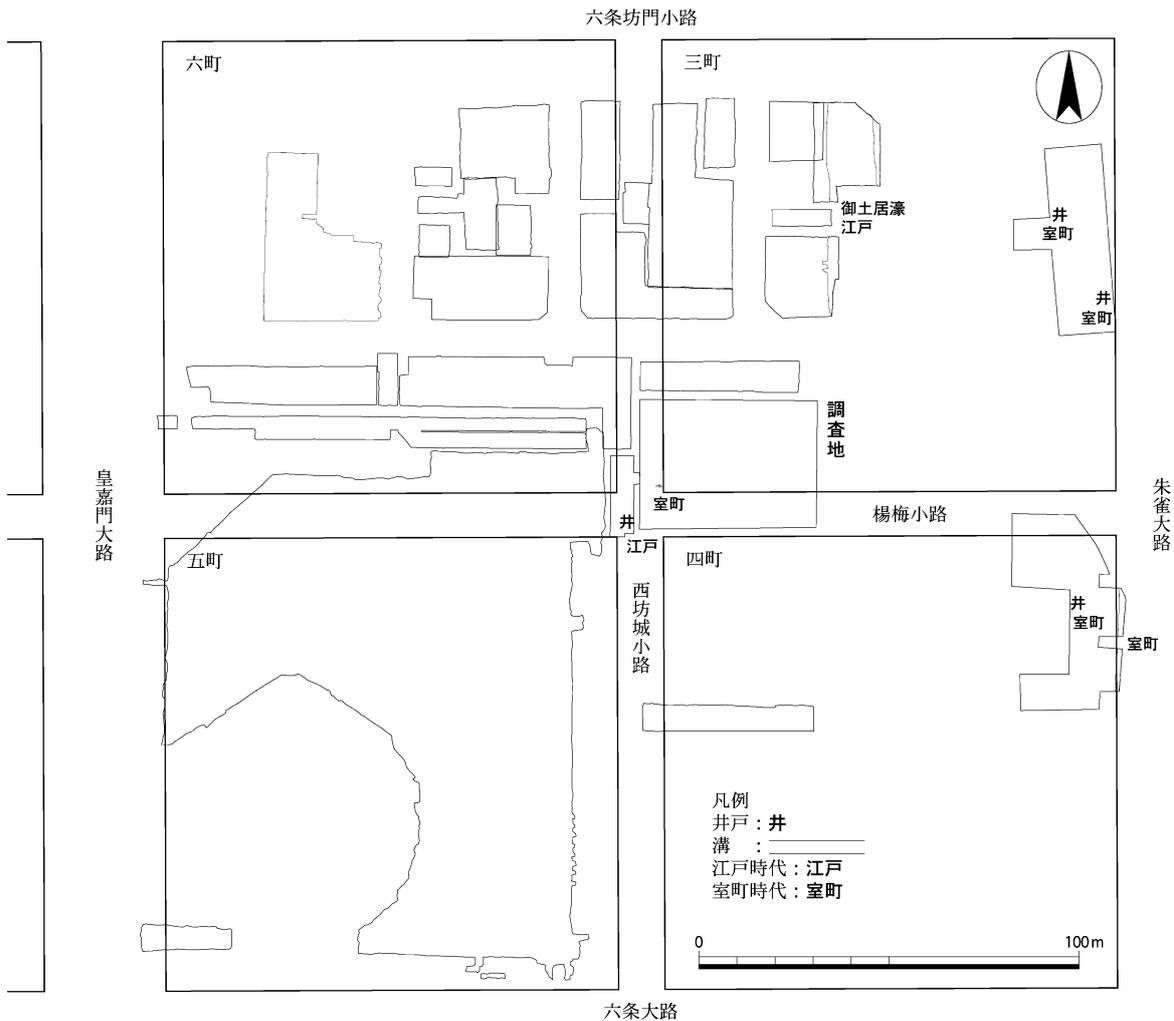


図 36 室町時代以降の主な遺構（1：2,000）

ら溝 110 の埋没時期は、平安時代後期である。

平安時代前期の条坊施行は、高い精度で行われたことが確認されている。今回の平安時代末から鎌倉時代の道路側溝も、推定ラインとはわずかに異なるものの、ほぼ踏襲して再施行が行われたことを確認した。

室町時代から江戸時代の遺構 室町時代の遺構は、ほとんど検出しなかった。江戸時代の遺構は、土取土坑を多数検出した。土取りには掘り下げる範囲の区画があった可能性が高い。これらの土取土坑の時期は、出土遺物から江戸時代中期と考えられる。

溝の自然分析による古環境の復元 今回の調査では、溝 3・44・48 において土壌サンプルを採取し、自然科学分析を実施した。詳細は付章で述べられているが、ここで幾つかの成果を要約しておく。溝 44・48（西坊城小路東側溝）の分析では、草本花粉化石が卓越し、栽培種のイネ属の割合が多く、その他は開けた場所を好むものがある。水性植物としては日当たりのよい湿地を好む種類があり、水田雑草などにあたる。栽培植物としてはイネ、コムギ、ソバ、シソ属、メロン類などがある。植物珪酸体では、栽培種のイネ属が卓越し、組織片も見られる。また寄生虫卵もみられる。溝 3 も、大型植物化石は分析していないが、他の分析では溝 44・48 と同様の状態を示している。以上のことから、これらの溝の近辺は、開けた土地であり、草地が発達し、水田や畑などの耕作地として土地利用されていた可能性が高く、溝は、耕作に関連する施設の機能があった可能性がある。一方、調査地近隣の調査成果では、平安時代後期から鎌倉時代は宅地利用がなされている。これらの異なる成果から考えられることは、溝の近辺は宅地利用がなされているが、耕作地もあり、両者が混在する土地利用形態だった可能性が高い。

調査地周辺の既調査では、平安時代前期に土地利用がなされ、その後、衰退するが、平安時代後期から鎌倉時代に再開発されるという調査成果を得ている。今回の調査も既調査と同様の成果を得た。それ以降は、三町東部の既調査において室町時代の井戸を 2 基検出されているが、建物跡などは検出されていない状況から、衰退しつつも宅地利用が続いていたと考えられる。その後、耕作地化が進み、近代に至る。

以上のような調査成果を得たが、依然として、平安時代中期の土地利用は不明瞭であり、今後の調査で明らかになることを期待したい。

註

- 1) 時期は若干新しいが、表 1 文献 2・梅川光隆ほか『平安京右京六条一坊 ―平安時代前期邸宅跡の調査―』の五町で検出した建物と比較すると、建物 1 の規模は、ほぼ同規模である。また、網 伸也「平安時代初期の大規模宅地造成について」『研究紀要 第 1 号』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994 年の記載建物との比較では、少し小さく、平安時代前期の建物としては大きい部類に入る。
- 2) 註 1 に同じ。その規模は柱間が南北 1.2 m、東西約 2.4 m。列中心に、約 4.4 m 離れて門基の柱跡。築地幅を約 1.2 m としている。

6. 付章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

今回の分析調査では、平安京右京六条一坊三町の調査区で検出された13世紀前半の溝埋土機能期の溝周辺の土地利用状況に関する情報を得ることを目的として自然科学分析調査を実施する。

(1) 調査地点・試料

分析調査は、南北方向の西坊城小路東側溝（溝44・48）と東西方向の楊梅小路北側溝（溝3）の2箇所の溝埋土について実施する（図37）。各溝の機能時期については、出土遺物から西坊城小路東側溝が13世紀前半頃、楊梅小路北側溝が13世紀中頃と推定されている。

西坊城小路東側溝は、2時期にわたる2条の溝からなり、初期段階の溝44の充填が進行した段階で、その東側（外側）に溝48が再構築されている。溝44を充填する堆積物である2層は、植物遺体が混じる砂質泥～泥からなる。全体的に著しく変形しており、流線状の構造が確認される。2層下部は加工時に取り込まれたと判断される遺構のベースをなす扇状地性の泥質砂の偽礫（ブロック土）が認められる。この偽礫は流線状の変形に沿って最配置している。2層中部では不明瞭ながら葉理が認められ、下部から連続する変形の影響および2層上部形成期の擾乱の影響により変形している。また、2層上部は著しく擾乱されており、腐植に富む。一方、溝48を充填する堆積物は、5層が植物遺体葉理を挟在するベース堆積物の偽礫が混じる砂質泥、4層が葉理構造が発達する植物遺体葉理を挟在する泥～砂質泥、3層が植物遺体葉理を挟在する擾乱された腐植に富む砂質泥からなる。溝44で認められた変形構造は確認されない。溝44の3層の上位には、溝が存在した場所の起伏を覆うように砂質泥の偽礫や砂礫などからなる人為的攪拌された盛土が行われている。

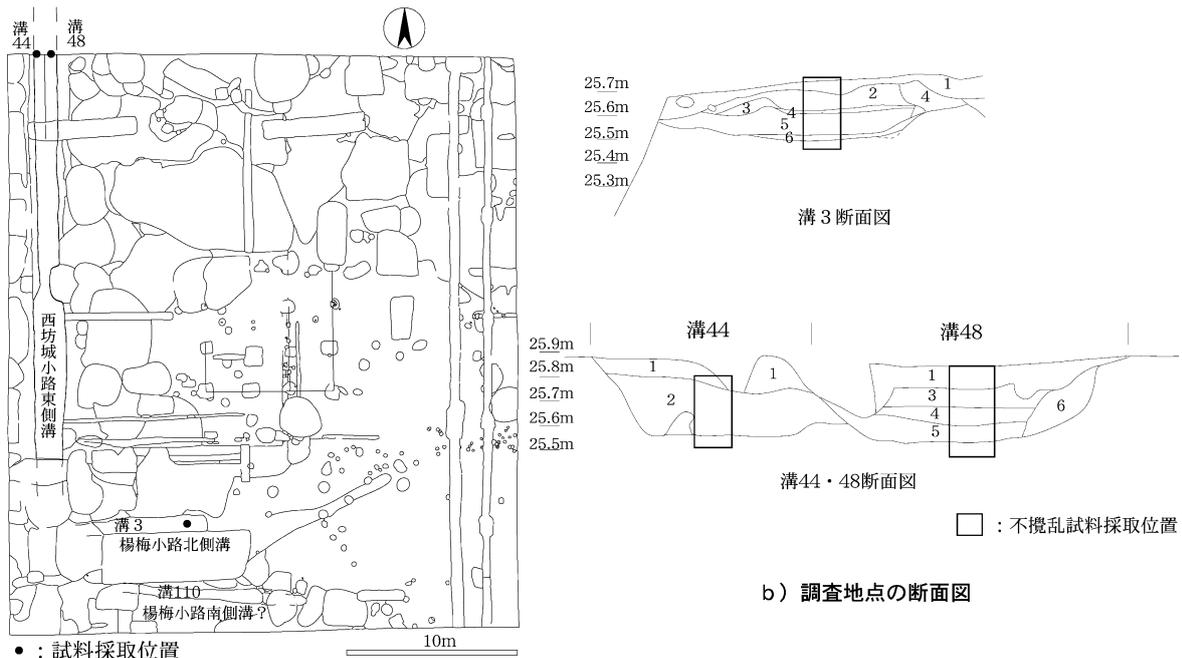
楊梅小路北側溝である溝3は、下部の6層～4層が細粒砂の葉理を挟在する腐植に富む砂質泥～泥からなる。初成の堆積構造は擾乱により不明瞭であり、見かけ上塊状である。また、上部でやや腐植に富む。上部の2層は著しく擾乱された砂質泥からなる。

分析試料は、各溝から不攪乱柱状試料として採取し、室内での観察と各分析試料の採取を行った（図37）。軟X線写真撮影観察は溝44・48の不攪乱柱状試料について実施する。花粉・植物珪酸体分析は、溝3の2層・4層、溝44の2層、溝48の3～5層の各層準、大型植物化石分析は、溝44の2層、溝48の4層から5層上部より採取した堆積物について実施する。

(2) 分析方法

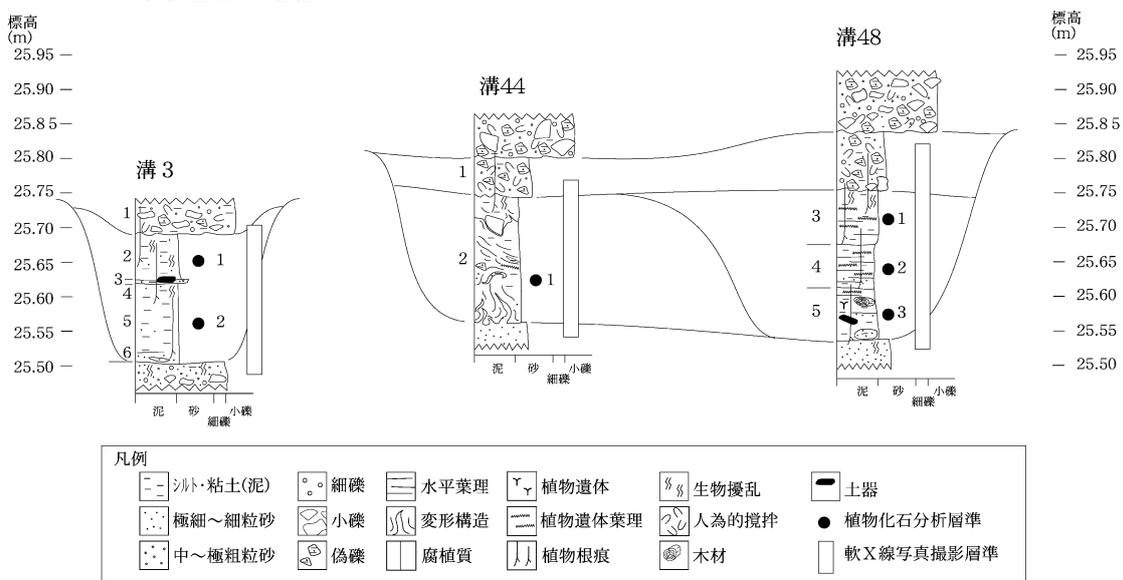
1) 軟X線写真撮影

不攪乱柱状試料について、厚さ1cmまで板状に成形し、浸潤状態のまま、管電圧50kvp、電流3mA、照射時間270秒のX線強度条件において軟X線写真撮影を実施した。撮影は元興寺文化財研究所の協力を得た。なお、軟X線写真の記載は、堆積物について宮田ほか（1990）、土壤に



a) 調査地点の位置

b) 調査地点の断面図



c) 調査地点の模式柱状図

図37 調査地点の位置および層序模式柱状図

ついて佐藤 (1990a・b)、森ほか (1992)、成岡 (1993) などを参考とする。以下に各地点の堆積層の構造について記載する。

2) 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛: 比重 2.3) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス (無水酢酸 9、濃硫酸 1 の混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。結果は同定・計数結果の一覧表として

表示する。花粉が多産する試料について、木本花粉はその総数、草本花粉等は総数から不明花粉を除いた数を基数として百分率を求め、図示する。

3) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プレウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2004）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数の一覧表で示す。また、植物珪酸体の産状の層位的変化から稲作の可能性や古植生について検討するために、出現率を図示する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

なお今回は、各分類群の含量の測定も試みた。分析の際に分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1 g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1 g あたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。この際、100 個 /g 以下は「<100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸め（100 単位にする）、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後で丸めている。また、植物珪酸体含量を図示する。

4) 大型植物化石分析

土壌 200cc を水に浸し、粒径 0.5 mm の篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実や葉などの大型植物遺体を抽出する。抽出した種実を双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等の図鑑との対照から、種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。イネの穎の破片は、基部の果実序柄の個数を数える。試料中に確認された木材・炭化材（主に径 4 mm 以上）と昆虫は、抽出・プラス表示にとどめる。分析後は、種実等を種類別に容器に入れ、70% 程度のエタノール溶液で液浸し返却する。

(3) 結果

1) 軟X線写真

溝 44 および溝 48 の試料写真・軟X線写真および主な構造のトレース図を図 38・39 に示す。X線写真の明るい部分はより高い密度の物質（ここではおもにシルトと砂・礫、酸化鉄や炭酸鉄）からなり、暗い部分は低密度の物質（水分の多い粘土、細粒のシルト、植物性の炭片、植物遺体、孔隙など）からなる。以下に各溝の堆積構造の特徴について記載する。

溝 44 充填堆積物は流線状ないし火焰状に著しく変形しており、初成の堆積構造は不明瞭となっている。溝底直上に累重する、加工時ないし機能期に取り込まれたとみられる偽礫まじりの砂質

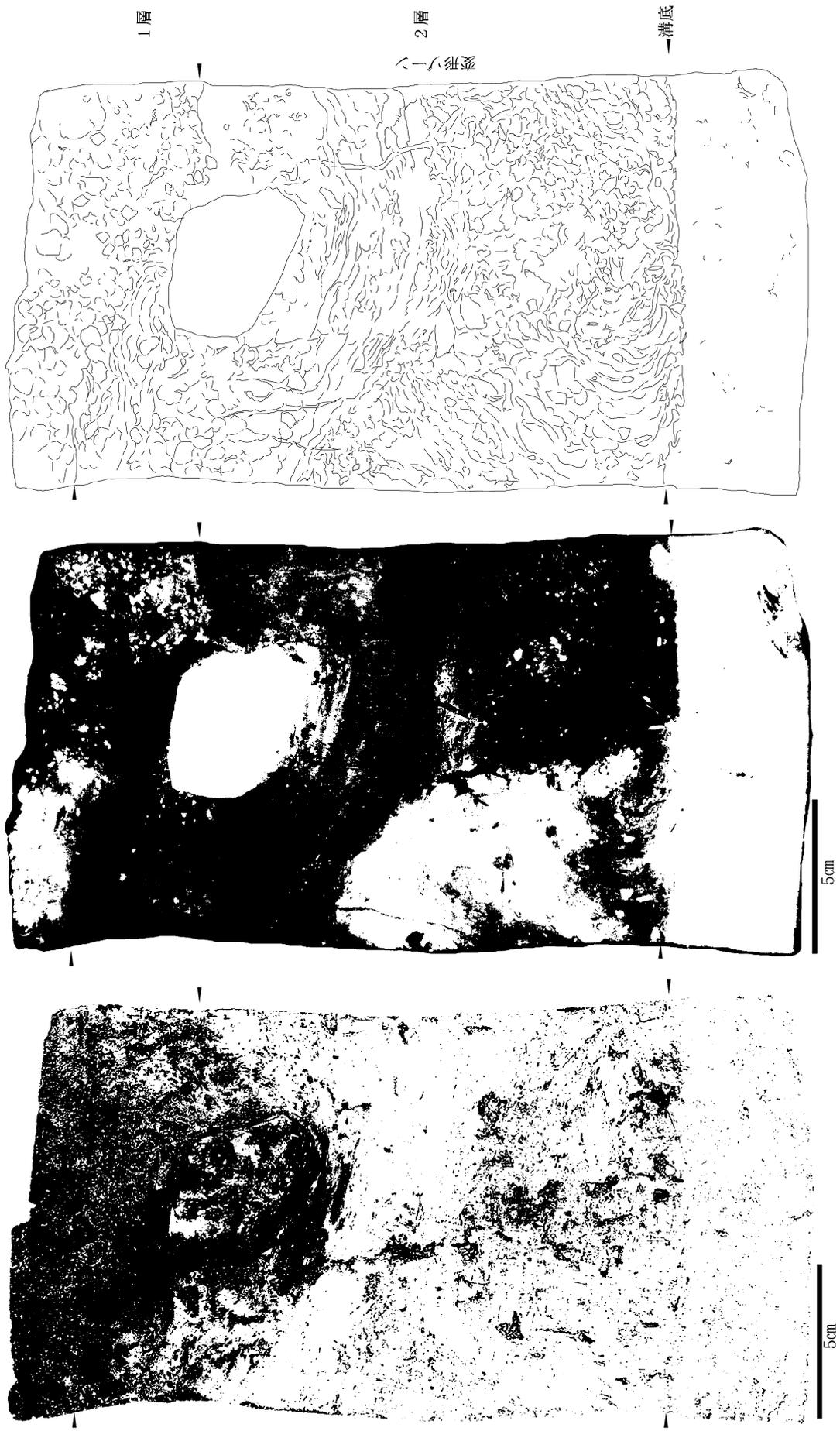


図 38 溝 44 埋土の試料・軟X線写真および主要な構造のトレース図

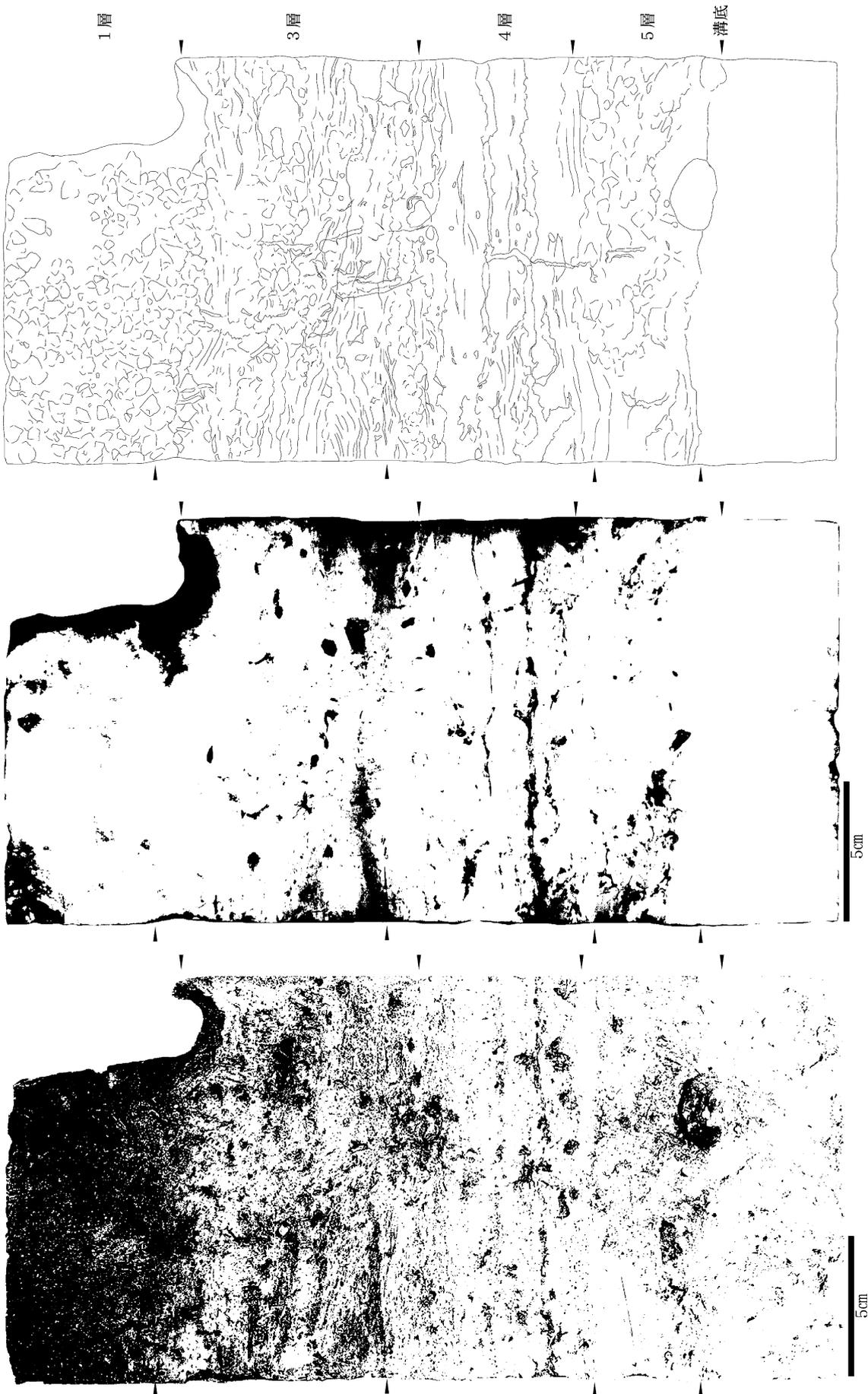


図 39 溝 48 埋土の試料・軟 X 線写真および主要構造のトレース図

表9 花粉分析結果

分類群	地点・試料番号					
	溝3		溝44	溝48		
	1	2	1	1	2	3
木本花粉						
モミ属	15	8	3	23	22	32
ツガ属	19	10	18	30	42	28
トウヒ属	5	1	2	2	2	3
マツ属単維管束亜属	1	-	-	1	-	1
マツ属複維管束亜属	40	29	46	41	55	61
マツ属(不明)	29	37	19	17	16	31
コウヤマキ属	1	2	-	3	2	1
スギ属	40	37	18	27	22	19
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	5	2	2	2	4	2
ヤナギ属	-	2	1	-	-	-
ヤマモモ属	1	-	-	2	-	-
クルミ属	-	1	1	-	-	-
クマシデ属-アサダ属	2	3	3	11	6	4
カバノキ属	4	1	8	4	1	-
ハンノキ属	1	5	16	2	1	3
ブナ属	1	5	2	8	4	2
コナラ属コナラ亜属	20	18	14	8	10	2
コナラ属アカガシ亜属	11	7	9	11	7	4
シイノキ属	1	2	1	2	1	-
ニレ属-ケヤキ属	-	-	3	8	3	3
エノキ属-ムクノキ属	3	1	1	4	-	-
サクラ属?	-	-	1	-	-	-
カラスザンショウ属	-	-	1	-	-	1
センダン属	-	1	3	-	-	1
アカメガシワ属	1	-	20	-	1	-
モチノキ属	-	-	-	-	-	1
カエデ属	7	1	-	1	-	-
ムクロジ属	-	-	1	-	-	-
サルズベリ属	1	-	-	-	-	-
カキノキ属	-	1	-	1	2	-
イボタノキ属	1	-	6	-	-	-
トネリコ属	-	-	2	-	-	-
スイカズラ属	1	-	-	1	2	2
草本花粉						
ヒルムシロ属	-	-	-	1	-	-
オモダカ属	-	2	1	-	-	-
イネ属	92	122	162	109	113	93
他のイネ科	245	292	197	127	187	160
カヤツリグサ科	13	36	13	8	25	9
ホシクサ属	1	-	-	-	-	-
イボクサ属	1	-	1	-	-	3
ミズアオイ属	-	1	2	3	5	4
ユリ科	1	-	-	-	-	-
クワ科	3	66	6	1	-	-
ギシギシ属	-	-	1	-	1	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	1	2	13	9	17	9
タデ属	-	2	5	-	1	-
ソバ属	1	2	5	3	3	3
アカザ科	11	53	21	27	59	33
スベリヒユ属	-	-	1	-	-	-
ナデシコ科	19	8	22	1	7	2
キンボウゲ属	1	2	13	1	3	-
キンボウゲ科	3	-	1	-	-	-
アブラナ科	15	18	5	2	9	3
バラ科	-	-	-	1	-	1
マメ科	-	-	-	-	-	1
ワタ属	-	1	1	-	-	-
キカシグサ属	1	1	-	-	-	-
アリノトウグサ属	-	-	-	4	1	-
セリ科	1	2	-	-	4	2
ナス科	1	-	-	-	-	-
オオバコ属	-	-	3	-	-	-
ゴキツル属	-	1	-	-	-	-
キュウリ属	1	1	-	-	-	1
ユウガオ属	-	1	-	-	-	-
ヨモギ属	4	4	5	11	12	6
ベニバナ属	1	1	6	3	5	-
キク亜科	1	2	-	1	2	1
タンポポ亜科	1	5	5	3	5	6
不明花粉	2	12	8	5	6	2
シダ類胞子						
サンショウモ	1	2	2	-	1	3
アカウキクサ属	2	1	-	-	-	-
他のシダ類胞子	113	109	64	106	151	122
合計						
木本花粉	210	174	201	209	203	201
草本花粉	418	625	489	315	459	337
不明花粉	2	12	8	5	6	2
シダ類胞子	116	112	66	106	152	125
総計(不明を除く)	744	911	756	630	814	663
糞虫卵	-	17	25	12	44	33
回虫卵	-	3	10	4	10	12
不明吸虫卵	-	1	-	-	-	-

泥が流線状の変形に沿って、中部層準まで引きずりあげられている状況が確認される。また、中上部の葉理をなす堆積物も変形している。これらの変形構造は下方から連続する一連の変形であるが、上部は溝の最終的な埋土である人為的攪拌土(盛土)である1層形成時の影響も受けている。一方、溝48では、溝44で確認された変形構造は確認されない。下部の5層には遺構のベースをなす扇状地性の泥質砂の偽礫が散在し、その上位を植物遺体からなる葉理を挟在する葉理の発達する泥ないし砂質泥からなる堆積物が累重し、上部の3層では擾乱が著しくなる状況が確認される。

2) 花粉分析

結果を表9、図40に示す。花粉化石の保存状態は、保存状態の良い個体や悪い個体が混在するが、概ね良好である。花粉化石群集は、全ての溝試料で類似する。全体の種類構成をみると、いずれの試料も草本花粉の割合が50~60%と高く、その大部分がイネ科である。木本花粉は全体の20~30%程度である。

木本花粉をみると、マツ属(特に複維管束亜属)の割合が高く、木本花粉全体の約半数を占める。その他、針葉樹のモミ属、ツガ属、スギ属、落葉広葉樹のコナラ亜属等を伴う。

多産する草本類では、イネ科が高率を占める。イネ科の中には栽培種のイネ属型の花粉が含まれる。そ

の割合はイネ科全体の30～40%程度である。イネ科の他には、クワ科、アカザ科、ナデシコ科、アブラナ科、ヨモギ属等のほか、水生植物のオモダカ属、ミズアオイ属、サンショウモ、アカウキクサ属、栽培植物（もしくは栽培植物を多く含む分類群）であるカキノキ属、ソバ属、ワタ属、キュウリ属、ユウガオ属、ベニバナ属など多くの分類群が産出し、種類構成は豊富である。

その他、寄生虫卵が溝3の試料1を除き産出する。鞭虫卵が多く、次いで回虫卵も検出される。検出数は多くて50個程度である。今回定量分析を行っていないため正確な数値は不明だが、分析処理や同定の段階で記録している数値からおおよその数量を割り出すと、1ccあたりの寄生虫卵は、検出数が多い試料で、最大600～800個/ccくらいとみられる。

3) 植物珪酸体分析

結果を表10・11、図41・42に示す。各溝試料からは植物珪酸体が産出するものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。各溝の植物珪酸体の産状は概ね類似する。以下に産状を示す。

溝3の2層・5層では、2層で含量密度がやや高いものの、相対的な群集組成は両層でほぼ同様である。産出分類群では、栽培植物のイネ属が多産し、葉部に形成される短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体、これらの列状に配置した組織片、籾殻に形成される穎珪酸体が認められる。イネ属の相対的産出率は、短細胞珪酸体が40～50%、機動細胞珪酸体が35～45%、含量密度では、短細胞珪酸体が約1.1万個/g、機動細胞珪酸体が約5,000個/g、穎珪酸体が3,000個/g前後を示す。イネ属以外の分類群では、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが産出する。

溝44の2層では、含量密度は、約2.8万個/gである。イネ属に由来する葉部短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体、これらを含む組織構造、籾殻の穎珪酸体が産出する。イネ属の相対的産出率は、短細胞珪酸体が約50%、機動細胞珪酸体が約20%、含量密度は短細胞珪酸体が約1.1万個/g、機動細胞珪酸体が約1,400個/g、穎珪酸体が約500個/gである。イネ属以外の分類群では、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが産出する。

溝48の3～5層では、多少の層位的変化が確認されるが、栽培植物のイネ属の産出が目立つなど概ね類似する。植物珪酸体含量密度は、最下部の5層で約4.8万個/g、上位の4層で約4.1万個/gにやや減少し、3層で約4.5万個/gに増加する。産出分類群では、イネ属の葉部短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体、これらを含む組織片、籾殻の穎珪酸体などイネ属由来の珪酸体が多産する。イネ属の含量密度は層位的に変化し、5層では短細胞珪酸体が約1.3万個/g、機動細胞珪酸体が約4,600個/g、穎珪酸体が約2,100個/g、4層では短細胞珪酸体が約7,200個/g、機動細胞珪酸体が約4,300個/g、穎珪酸体が約1,100個/gに減少し、3層では短細胞珪酸体が約1.3万個/g、機動細胞珪酸体が約5,200個/g、穎珪酸体が約1,600個/gに増加する。イネ属以外の分類群では、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが産出する。

表 10 植物珪酸体分析結果 (産出個数)

分類群	地点・試料番号					
	溝3		溝44	溝48		
	1	2	1	1	2	3
イネ科葉部短細胞珪酸体						
イネ族イネ属	126	132	204	113	76	128
タケ亜科ネザサ節	18	8	12	8	7	11
タケ亜科	57	38	60	25	47	53
ヨシ属	12	6	15	14	15	15
ウシクサ族コブナグサ属	2	1	2	6	3	1
ウシクサ族ススキ属	-	1	7	-	6	4
イチゴツナギ亜科	14	11	12	11	16	13
不明キビ型	43	39	39	45	30	33
不明ヒゲシバ型	17	11	18	14	18	11
不明ダンチク型	14	7	27	12	12	13
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
イネ族イネ属	64	58	26	45	46	44
タケ亜科ネザサ節	18	4	11	9	23	8
タケ亜科	40	20	15	23	35	37
ヨシ属	4	9	4	8	25	9
ウシクサ族	-	1	4	-	3	6
シバ属	5	3	5	5	8	4
不明	54	32	56	33	56	47
合計						
イネ科葉部短細胞珪酸体	303	254	396	248	230	282
イネ科葉身機動細胞珪酸体	185	127	121	123	196	155
総計	488	381	517	371	426	437
珪化組織片						
イネ属類珪酸体	38	33	9	14	12	20

数値は産出個数を示す。

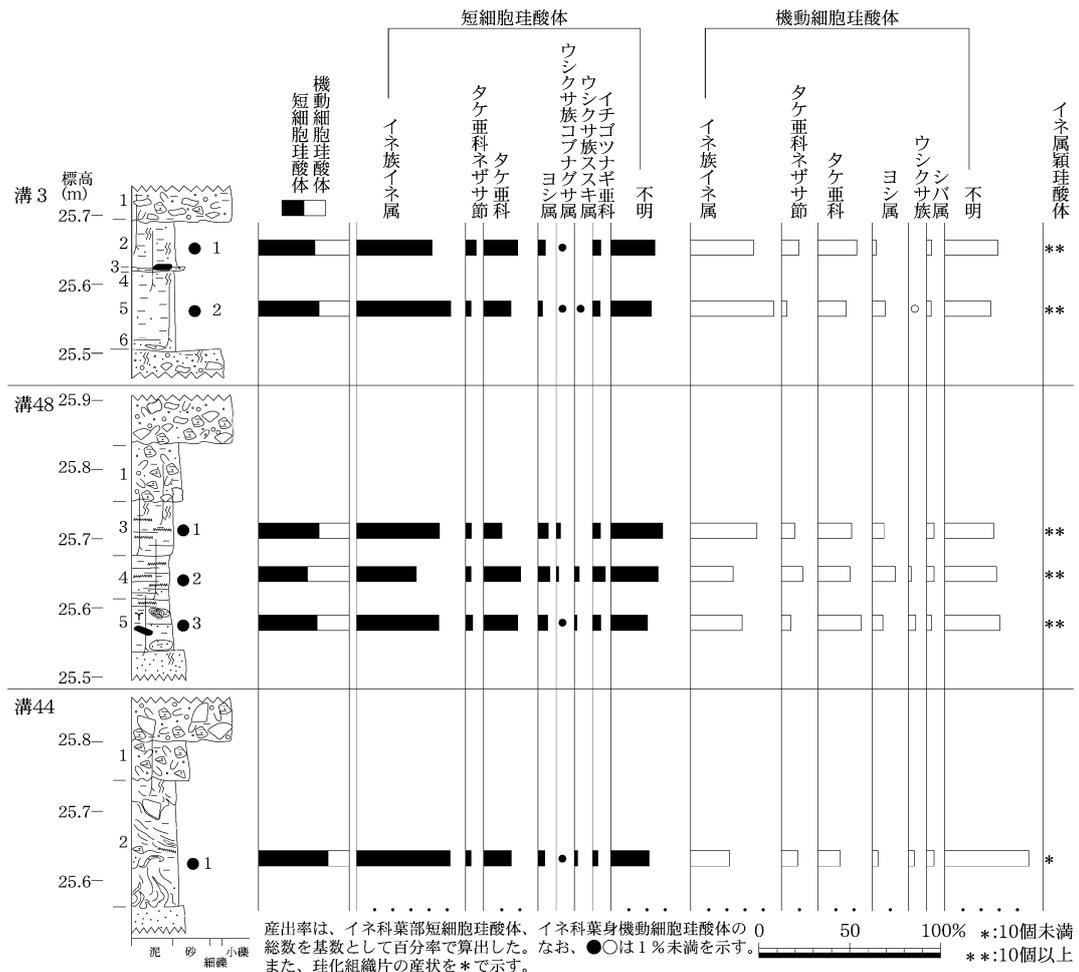


図 41 植物珪酸体群集の層位分布

表 11 植物珪酸体分析結果（含量密度）

分類群	地点・試料番号					
	溝3		溝44	溝48		
	1	2	1	1	2	3
イネ科葉部短細胞珪酸体						
イネ族イネ属	11,100	11,700	10,900	13,200	7,200	13,400
タケ亜科ネザサ節	1,600	700	600	900	700	1,200
タケ亜科	5,000	3,400	3,200	2,900	4,400	5,500
ヨシ属	1,100	500	800	1,600	1,400	1,600
ウシクサ族コブナグサ属	200	<100	100	700	300	100
ウシクサ族ススキ属	-	<100	400	-	600	400
イチゴツナギ亜科	1,200	1,000	600	1,300	1,500	1,400
不明キビ型	3,800	3,500	2,100	5,200	2,800	3,500
不明ヒゲシバ型	1,500	1,000	1,000	1,600	1,700	1,200
不明ダンチク型	1,200	600	1,400	1,400	1,100	1,400
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
イネ族イネ属	5,600	5,200	1,400	5,200	4,300	4,600
タケ亜科ネザサ節	1,600	400	600	1,000	2,200	800
タケ亜科	3,500	1,800	800	2,700	3,300	3,900
ヨシ属	400	800	200	900	2,400	900
ウシクサ族	-	<100	200	-	300	600
シバ属	400	300	300	600	800	400
不明	4,800	2,800	3,000	3,800	5,300	4,900
珪化組織片						
イネ属珪酸体	3,400	2,900	500	1,600	1,100	2,100
合計						
イネ科葉部短細胞珪酸体	26,700	22,600	21,200	28,900	21,700	29,500
イネ科葉身機動細胞珪酸体	16,300	11,300	6,500	14,300	18,500	16,200
珪化組織片	3,400	2,900	500	1,600	1,100	2,100
総計	46,400	36,800	28,200	44,800	41,400	47,800

数値は含量密度（個/g）を示す。各種類の値は、10の位で丸めて(100単位)表示する。なお、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。<100は100個/g未満を示す。

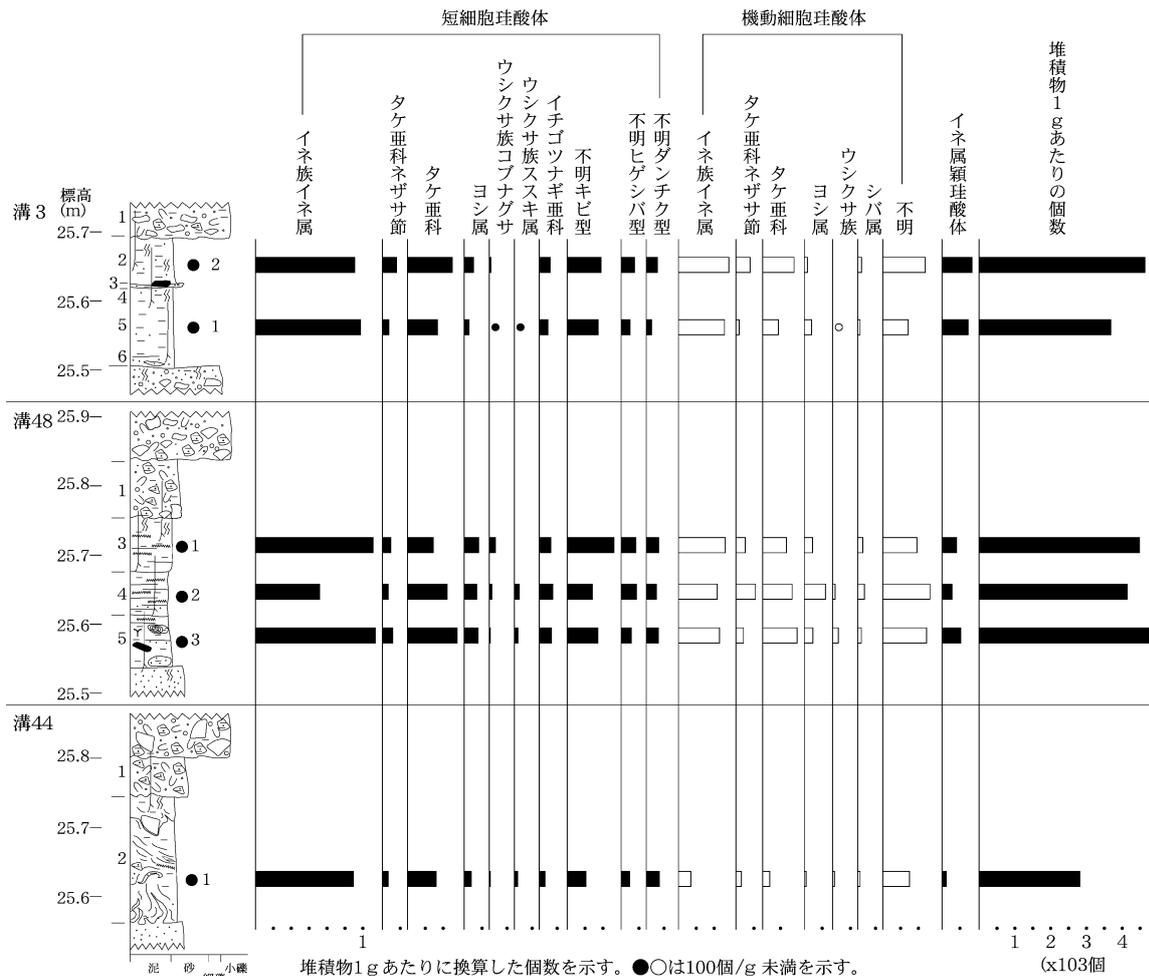


図 42 植物珪酸体含量密度の層位分布

4) 大型植物化石分析

大型植物化石分析結果を表 12 に示す。溝 44・48 の全試料を通じて、裸子植物 2 分類群 4 個の葉・枝と、被子植物 33 分類群 652 個、不明 13 個の種実が産出した。大型植物化石の遺存状態は比較的良く、表面に藍鉄鉱と思われる鉱物が付着した個体がみられた。また、産出した種実のうち、栽培種のイネ 4 個、コムギと、ムラサキシキブ属、チドメグサ 1 個は炭化していた。

大型植物化石群集は、栽培種を含む草本由来の化石が主体で、木本由来が著しく少ないことが特徴である。栽培種は、イネの類 130 個、コムギ 1 個、ソバ 1 個、シソ属 1 個、メロン類 18 個と、栽培種の可能性が高いナス科 (以下、栽培種に含める) 25 個が確認された。栽培種を除く分類群は、草本は明るく開けた場所などに生育する、いわゆる人里植物に属する分類群が多く、オモダカ属、ホタルイ属、イボクサ、ミズアオイ属などの水生植物や、ミゾソバ (近似種)、タガラシ、クサネム (近似種)、タカサブロウなどのやや湿った場所に生育する植物、その他のやや乾いた場所に生育する植物などが確認された。木本は、溝 48 から確認されるのみで、針葉樹のモミ (属) や、低木のキイチゴ属、ムラサキシキブ属や籐本のブドウ属などの伐採地や崩壊地、林縁などの明るく開けた場所に先駆的に侵入する樹種が確認された。以下に、各溝試料の産状を記す。

・溝 44 2 層 (試料 1)

草本 26 分類群 (オモダカ属、イネ、コムギ、イネ科、カヤツリグサ科、ツユクサ、イボクサ、イラクサ科、ギシギシ属、ミゾソバ近似種、タデ属、ソバ、アカザ科、ヒユ科、スベリヒユ科、ナデシコ科、タガラシ、アオツツラフジ、カタバミ属、エノキグサ、チドメグサ属、イヌコウジュ属、ナス科、メロン類、タカサブロウ、キク科) 287 個、不明 13 個の種実が検出された他、炭化材、昆虫が確認された。ヒユ科が 117 個と最も多い。栽培種は、イネ 12 個、コムギ 1 個、ソバ 1 個、ナス科 12 個、メロン類 15 個 (モモルディカメロン型 1 個、マクワ・シロウリ型 2 個を含む) が確認された。

・溝 48 4 層～5 層上部 (試料 2・3 層準)

木本 5 分類群 (針葉樹のモミ、モミ属、広葉樹のキイチゴ属、ブドウ属、ムラサキシキブ属) 10 個、草本 20 分類群 (イネ、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、ギシギシ属、タデ属、アカザ科、ヒユ科、スベリヒユ科、ナデシコ科、タガラシ、クサネム近似種、カタバミ属、チドメグサ属、シソ属、ナス科、メロン類、タカサブロウ) 359 個の葉・枝・種実が検出された他、木材、炭化材、植物のトゲ、昆虫が確認された。栽培種のイネが 118 個と最も多く、ヒユ科 (68 個)、タガラシ (53 個) が次ぐ。イネ以外の栽培種は、シソ属 1 個、ナス科 13 個、メロン類 3 個が確認された。

以下に、各分類群の形態的特徴等を記す。

<木本>

・モミ (*Abies firma* Sieb. et Zucc.) マツ科モミ属

葉の破片が検出された。黒褐色、線形で扁平。完形ならば長さ 0.9- 3 cm、幅 2- 3 mm 程度。基部は楔形に細まり、葉痕 (茎に接着する部分) は吸盤状。破片は基部を欠損し、長さ 4.8 mm、最

表 12 大型植物化石分析結果

分類群	部位	状態	地点・試料番号		備考
			溝44 1	溝48 2・3	
木本					
モミ	葉	破片		1	
モミ属	葉	破片		1	
				1	
	枝	破片		1	
キイチゴ属	核	完形		4	
ブドウ属	種子	破片		1	
ムラサキシキブ属	核	完形		1	炭化
木材(径4mm以上)				+	
炭化材(径4mm以上)			+	+	
草本					
オモダカ属	果実	完形	1		
イネ	穎	破片	12	114	
				4	炭化
コムギ	胚乳	完形	1		炭化
イネ科	果実	完形	14	9	
ホタルイ属	果実	破片		2	
カヤツリグサ科	果実	完形	4	8	
ツククサ	種子	完形	1		
イボクサ	種子	完形	17	3	一部表面藍鉄鉱?付着
ミズアオイ属	種子	完形		5	
イラクサ科	果実	完形	1		
ギシギシ属	果実	完形	7	1	
ミソバ近似種	果実	完形	1		表面藍鉄鉱?付着
		破片	2		
タデ属	果実	完形	4		2種以上
		破片	1	4	
ソバ	果実	完形	1		
アカザ科	種子	完形	2	3	
ヒユ科	種子	完形	117	68	
スベリヒユ科	種子	完形	5	32	
ナデシコ科	種子	完形	31	10	
タガラシ	果実	完形	9	53	
アオツツラフジ	核	完形	1		表面藍鉄鉱?付着
クサネム近似種	果実	破片		1	
カタバミ属	種子	完形	7	10	
		破片	1		
エノキグサ	種子	完形	1		
		破片	2		
チドメグサ属	果実	完形	2	7	
		完形	1		炭化
		破片	1		
イヌコウジュ属	果実	完形	1		
シソ属	果実	破片		1	
ナス科	種子	完形	4	3	
		破片	8	10	
メロン類(モモルディカメロン型)	種子	破片	1		
メロン類(マクワ・シロウリ型)	種子	完形	2		
メロン類	種子	破片	12	3	
タカサブロウ	果実	完形	11	5	
		破片		3	
キク科	果実	完形	1		
不明種実			13		
植物のトゲ		破片		1	
昆虫		破片	+	+	
分析量			200cc 336.1g	200cc 324.1g	

注)試料中に確認された木材・炭化材・昆虫は、抽出・プラス表示にとどめる

大幅は2 mm程度。先端部は鋭く2裂して針状に尖ることから、若木の葉と思われる。葉表面には中肋に沿って凹む溝があり、裏面の溝の両側に白色の気孔帯が配列する。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

葉の破片と枝が検出された。灰褐色、葉は先端部が残る破片は長さ4.5 mm、基部が残る破片は長さ1.2 mm、最大幅は3 mm程度の線形で偏平。先端部は鈍頭または凹頭。基部はねじれるように楔形に細まり、葉痕（茎に接着する部分）は吸盤状。葉表面には中肋に沿って凹む溝があり、裏面の溝の両側に白色の気孔帯が配列する。枝は長さ1.7 cm、径3 mm程度で、表面には径1 mm程度の円形の葉痕がらせん状に配列する。

・キイチゴ属 (*Rubus*) バラ科

核（内果皮）が検出された。灰褐色、長さ2-2.5 mm、幅1-1.5 mm、厚さ1 mm程度の偏平な半月-三日月状半倒卵体。腹面方向にやや湾曲する。表面には大きな凹みが分布し網目模様をなす。

・ブドウ属 (*Vitis*) ブドウ科

種子の破片が検出された。灰-黒褐色、完形ならば径3.5 mm程度の広倒卵体、側面観は半広倒卵形。基部の臍の方に向かって細くなり、嘴状に尖る。背面にさじ状の凹みがある。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形の深く窪んだ孔が存在する。種皮は薄く硬く、断面は柵状。破片は中央の縦筋を境に半分欠損し、大きさ4 mm程度。

・ムラサキシキブ属 (*Callicarpa*) クマツヅラ科

核（内果皮）が検出された。炭化しており黒色、長さ2 mm、径1 mm程度のやや偏平な倒卵体。背面は丸みがあり、腹面中央はやや窪む。腹面方向に湾曲し、側面観は三日月形。中央部の内果皮が極めて薄く柔らかい。縁部分の内果皮は厚く、やや弾力がある。

<草本>

・オモダカ属 (*Sagittaria*) オモダカ科

果実が検出された。淡黄褐色、径2.5 mm程度の偏平で歪な倒卵体。果皮は薄く翼状で翼の外形を欠損する。表面は微細な網目が縦方向に並ぶ。中に入る1個の種子が透けてみえる。種子は茶褐色、径1 mm程度の倒U字状に曲がった円柱状で偏平。種皮は薄く膜状で、表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

穎(果)の破片が検出された。淡-茶褐色、一部の穎は炭化しており黒色。完形ならば長さ6-7.5 mm、幅3-4 mm、厚さ2 mm程度のやや偏平な長楕円形。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎（護穎と言う場合もある）と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲穂を構成する。果皮は柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。破片は基部の果実序柄部で、大きさ1-4 mm程度。

・コムギ (*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色、長さ3 mm、径2 mm程度の楕円体。腹面は正中線上にやや深く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑。

・イネ科 (Gramineae)

果実が確認された。イネ、コムギ以外の形態上差異のある複数種を一括した。淡-茶褐色、長さ 2.5-3 mm、径 1 mm 程度の狭卵 - 半偏球体で背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面は平滑で微細な縦長の網目模様が縦列する。

・ホタルイ属 (Scirpus) カヤツリグサ科

果実の破片が検出された。黒褐色、完形ならば長さ 2-2.3 mm、径 1.8 mm 程度の片凸レンズ状広倒卵体。頂部は尖り、基部は切形で刺針状の花被片が伸びる。背面正中線上は鈍稜。果皮表面は光沢があり、不規則な波状横皺状模様が発達する。破片は基部を欠損し、大きさ 1.5 mm 程度。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が検出された。ホタルイ属以外の形態上差異のある複数種を一括した。淡-黒褐色、レンズ状または三稜状倒卵体。径 1-1.5 mm 程度。頂部の柱頭部分はやや伸び、基部は切形。果皮表面は平滑 - 微細な網目模様がある。長さ 1.2-1.5 mm、径 0.7 mm 程度の三稜状狭倒卵体で表面には微細な疣状突起が密布する、カヤツリグサ属 (Cyperus) に似る個体や、径 1.5 mm 程度の三稜またはレンズ状倒卵体で頂部の柱頭部分がわずかに伸び、表面には微細な網目模様がありざらつく、スゲ属 (Carex) に似る個体などがみられる。

・ツククサ (Cochloselinum) ツククサ科ツククサ属

種子が検出された。灰褐色、長さ 3 mm、径 2 mm 程度の歪な半横長楕円体。背面は丸みがあり、腹面は平らである。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。背面と側面の表面には、大きなすり鉢状の孔が散在する。他の面には円形の小孔が散在する。

・イボクサ (Aneilema keisak Hassk.) ツククサ科イボクサ属

種子が検出された。灰褐色、長さ 2-3.5 mm、径 1.5- 2 mm 程度の歪な半横長楕円体。背面は丸みがあり、腹面は平ら。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、表面は円形の孔が散在する。表面に藍鉄鉱と思われる藍灰色の鉱物が付着する個体が見られる。

・ミズアオイ属 (Monochoria) ミズアオイ科

種子が検出された。淡褐色、長さ 2 mm、径 0.6 mm 程度の楕円体。種皮は薄く透き通り、柔らかい。表面には 10 本程度の太い縦隆条と、その間に細い横隆条が密に配列する。

日本に分布するミズアオイ属は、ミズアオイ (*M. korsakowii* Regel et Maack) とコナギ (*M. vaginalis* (Burm.f.) Presl var. *plantaginea* (Roxb.) Solms Laub.) の 2 種があるが、実体顕微鏡下観察による区別は困難である。

・イラクサ科 (Urticaceae)

果実が検出された。灰褐色、長さ 1 mm、幅 0.8 mm 程度のやや偏平な非対称広倒卵体。両端は尖り、中央部は両凸レンズ形。果皮表面は粗面。

・ギシギシ属 (Rumex) タデ科

果実が検出された。暗灰褐色、長さ 2- 3 mm、径 1.5 mm 程度の三稜状広卵体。三稜は鋭く明瞭で、

両端は急に尖る。果皮表面はやや平滑。果実周囲に花被が残る個体もみられる。花被は灰褐色、径3mm程度の心円形で粗い網目模様をなし、縁には歯牙がある。中肋は瘤状に膨れる。

・ミゾソバ近似種 (*Polygonum cf. thunbergii* Sieb. et Zucc.) タデ科タデ属

果実が検出された。灰褐色、長さ4-5mm、径3mm程度の丸みのある三稜状卵体。頂部は尖り、基部は切形で径0.8mm程度の萼がある。果皮は柔らかく、表面には微細な網目模様がある。表面に藍鉄鉱と思われる藍灰色の鉱物が付着する個体も見られる。

・タデ属 (*Polygonum*) タデ科

果実が検出された。ミゾソバ近似種以外の形態上差異のある複数の種を一括した。黒褐色、長さ2-3mm、径1.5-2mm程度の二面体または三稜状卵-広卵体。基部は切形、萼が残る個体もみられる。果皮表面はやや平滑で光沢がある個体や、明瞭な網目模様がある個体などがみられる。

・ソバ (*Fagopyrum esculentum* Moench) タデ科ソバ属

果実が検出された。灰褐色、長さ4mm、径4mm程度の三稜状広卵体。三稜と頂部は鋭く尖り、面は凹む。果皮表面はやや平滑。

・アカザ科 (*Chenopodiaceae*)

種子が検出された。黒色、径1mm程度のやや偏平な円盤状。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が放射状に配列し、光沢がある。

・ヒユ科 (*Amaranthaceae*)

種子が検出された。溝44 1層準からは、苞(果)に包まれた個体も確認された。黒色、径1-1.3mm程度の偏平な円盤状。縁は稜状で、基部は凹み臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が配列し、光沢がある。種子を包む苞果は淡褐色、やや偏平な広卵体。質は薄く透き通り、表面に皺がある。

・スベリヒユ科 (*Portulacaceae*)

種子が検出された。黒色、径1mm程度のやや偏平な腎状円形。基部は凹み、臍がある。臍には種柄の一部が残る。種皮表面には鈍円錐状突起が臍から同心円状に配列する。

・ナデシコ科 (*Caryophyllaceae*)

種子が検出された。淡-茶褐色、径1-1.5mm程度のやや偏平な腎状円形。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く表面には瘤-針状突起が臍から同心円状に配列する。

・タガラシ (*Ranunculus sceleratus* L.) キンポウゲ科キンポウゲ属

果実が検出された。径1mm、厚さ0.5mm程度のやや偏平な広楕円体。果皮表面は粗面。中心部は淡黄褐色でやや凹み、縁は黄白色の海綿状で水に浮きやすい。

・アオツヅラフジ (*Cocculus orbiculatus* (L.) DC.) ツヅラフジ科アオツヅラフジ属

核が検出された。灰褐色、長さ4mm、幅4.5mm、厚さ2.5mm程度のやや偏平な偏円体。中央は大きく窪み、周囲の隆起一端が開いた馬蹄形。基部は切形。基部を除く縁には隆条が長軸に対し直角に列生する。核は硬く厚く、表面は粗面。表面に藍鉄鉱と思われる藍灰色の鉱物が付着している。

・クサネム近似種 (*Aeschynomene cf. indica* L.) マメ科クサネム属

果実（節果）の破片が検出された。灰褐色、完形ならば長さ4 cm程度、幅5-6 mm、厚さ1 mm程度の扁平な非対称な広線形で縁には筋があり、腹面方向にやや湾曲する。頂部と基部は伸び、果皮表面は粗面。破片は6-8個程度の短軸方向の節に沿って分離した扁平な長方形で、頂・基部は斜切形。大きさは6 mm程度。

・カタバミ属 (*Oxalis*) カタバミ科

種子が検出された。黒褐色、長さ1-1.5 mm、幅1 mm程度の扁平な倒卵体。基部はやや尖る。種皮は薄く、表面には4-7列の肋骨状横隆条が配列する。

・エノキグサ (*Acalypha australis* L.) トウダイグサ科エノキグサ属

種子が検出された。黒褐色、長さ1.8 mm、径1 mm程度の倒卵体。基部はやや尖り、Y字状の稜がある。種皮は薄く硬く、表面には細粒状凹点が密布する。

・チドメグサ属 (*Hydrocotyle*) セリ科

果実が検出された。淡-灰褐色、径1 mm程度のやや扁平な半月形。一端には太い柄があり、合生面は平坦。果皮は厚く、やや弾力がある。表面には1本の明瞭な円弧状の稜がある。溝44 1層準からは、炭化した個体も確認された。

・イヌコウジュ属 (*Mosla*) シソ科

果実が検出された。淡-灰褐色、径1.2 mm程度の倒広卵体。基部には臍点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面は浅く大きく不規則な網目模様がある。

・シソ属 (*Perilla*) シソ科

果実の破片が検出された。灰褐色、完形ならば径1.6-2.4 mm程度の倒広卵体。基部には大きな臍点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面は浅く大きく不規則な網目模様がある。破片は大きさは2 mm程度。

・ナス科 (*Solanaceae*)

種子が検出された。淡-灰褐色、径2-4 mm程度の扁平で歪な腎臓形。基部のくびれた部分に臍がある。種皮表面には微細な星型状網目模様が臍から同心円状に発達する。径3-4 mm程度の大型個体を含むことから、ナス (*Solanum melongena* L.) などの栽培種に由来する可能性が高い。

・メロン類 (*Cucumis melo* L.) ウリ科キュウリ属

種子が検出された。淡-灰褐色、狭倒皮針形で扁平。長さ8-9 mm、幅3-4 mm、厚さ1-1.5 mm程度と、藤下 (1984) の基準による中粒のマクワ・シロウリ型 (長さ6.1-8.0 mm)、大粒のモルディカメロン型 (長さ8.1 mm以上) が確認される。種子の基部には倒「ハ」の字形の凹みがある。種皮表面は比較的平滑で、縦長の細胞が密に配列する。

・タカサブロウ (*Eclipta prostrata* (L.) L.) キク科タカサブロウ属

果実が検出された。灰-茶褐色、長さ1.5-2 mm、径1-1.2 mm程度のやや扁平な三角状倒狭卵体。両端は切形、果皮は海綿状で、両面には瘤状突起が分布する。両縁に翼があり、水に浮きやすい。

・キク科 (*Compositae*)

果実が検出された。淡-灰褐色、長さ2.5 mm、径0.8 mm程度の線状長楕円体。頂部は切形で円形

の臍がある。果皮表面には微細な網目模様が縦列する。

(4) 西坊城小路東側溝（溝 44・48）の溝機能期の古環境

ここでは、今回調査を行った西坊城小路東側溝および楊梅小路北側溝近辺の堆積環境について、上述してきた調査結果に基づいて検討する。

13 世紀前半頃に機能していたと推定される西坊城小路東側溝は、調査区が位置する扇状地を構成する堆積物を掘削して構築されている。扇状地堆積物は溝構築までに聚楽土採取のためなど、人為的に削平されており、本溝もその削平面上に構築されている。本溝は、新・旧の 2 時期にわたる 2 条の溝からなるが、いずれの溝も同様な堆積環境を示唆する有機物を含む泥質堆積物により充填されている。このことは、新旧の溝が機能期を通じて、溝内への堆積物の流入過程が変化していないこと、すなわち溝近辺の環境が大きく変化していないことを示唆する。溝 44 は下記する地震動による変形により初成の堆積構造が不明瞭となっているが、推定される変形前の堆積構造は、溝 48 と同様な植物遺体葉理を挟在する、葉理の発達する泥質堆積物からなる構造である。このような層相から、溝 44・溝 48 機能期の溝内は、水が流下していたが、埋土を一掃するような流れではなく、滞水する時期を挟在する緩やかな流れであったことが推定される。溝埋土からは、大きな木製品や遺物などが出土しているが、これらは人為的に投棄されたものと判断される。また、溝埋土上部はいずれの溝も擾乱が著しくなり、腐植の集積が進行していることから、埋土上部形成期に溝内の水の流動が悪くなっていたことが示唆され、溝の再構築も、このような、水の流動の悪化を契機としていることが示唆される。

旧段階の溝 44 は、植物遺体が混じる砂質泥～泥からなるが、上述した軟 X 線写真結果から流動変形している状況が確認された。溝下部に堆積していた溝構築時ないし機能時に取り込まれた遺構のベースをなす堆積物の偽礫が、この変形により、埋土中部層準まで引きずり上げられている状況が確認された。このような溝 44 で確認された変形構造は、Matsuda (2000) により定義されている、水底下の堆積物でみられる地震動による変形構造に類似する。Matsuda (2000)・松田 (1999) によると、1 回の地震動によって変形した堆積物の垂直範囲を変形ゾーンと呼び、水底に堆積した泥質堆積物（上部ほど水分を多く含むとともに、厚密を受けていないため流動性に富む。より下位では粘性・可塑性に富み、最下部では剛性が高まる性質をもつ）に認められる 1 つの変形ゾーンは、上から順に（1）水と堆積物が乱流によって混ざり合い、ほとんど塊状を呈する液層の流動変形ユニット (liquidized deformation unit)、（2）上部で、変形に際して引きずり上げられた下位層の羽毛状、火焰状（ただしフレイム構造とは別種）の流線パターンや細粒の中礫サイズ以細のブロックの散乱、下部に下向きに凸な形に変形した葉理から構成されるロード構造をなす含水塑性変形ユニット (hydroplastic deformation unit)、（3）下向きのフィッシャーや微小断層がみられる脆性変形ユニット (brittle deformation unit)、から構成されるとされる。また、これらの垂直的な変形ユニットの配列が重複した変形ゾーンの識別に役立ち、ユニット（1）の上位にユニット（3）あるいは（2）が認められれば、より新しい地震イベントが推定できる

とされる。

今回の溝 44 で確認された変形構造は、ユニット（2）の含水塑性変形ユニットに相当するもので、1 回の地震イベントにより形成されたものと判断され、地震発生時の溝内の水位が高かったことが窺える。また、地震イベントの年代は、変形ゾーン上端直上および直下の堆積物の年代によって決まるとされる（Matsuda,2000）。今回の変形ゾーンの上端は、埋土を覆う人為的盛土である 1 層の影響により不明瞭となっているため特定できない。ただし、再構築された新段階の溝 48 や 13 世紀中頃の溝 3 では、溝 44 のような変形構造が確認されないことから、地震の発生層準は溝 44 埋土上部形成期から溝 48 構築期までの間の時期と推定される。溝 44 および溝 48 から出土する遺物は、いずれも同時期の 13 世紀前半に帰属するものからなる。これらことから、地震の発生時期は 13 世紀前半頃と推定される。京都近辺は、古くから大規模な地震の記録が多数存在する地域であり、宇佐見（1996）による集成をみると、13 世紀前半およびその時期に近い記録地震として、元暦 2 年（1185）7 月 9 日に発生した推定震度 7.4 の地震がある。本地震は、京都の被害が大きく、建物の倒壊などが記録されている。今回の溝埋土を変形させた地震が、この元暦 2 年の地震に相当する可能性もあるが、出土遺物の時代性とは多少時期差が生じている。記録地震以外の地震に相当する可能性もあり、平安京域における今後の地震痕跡情報の蓄積をもって再評価する必要がある。

以上のような西坊城小路東側溝の溝の堆積環境を踏まえると、溝埋土中から産出した植物微化石や大型植物化石のうち微細な種実は、溝内やその近辺に生育していたものに由来することが推定される。溝埋土の花粉化石群集と大型植物化石群集は、ともに草本由来の化石が卓越することが特徴であり、産出分類群の構成も両者で対応関係にある分類群が多く、さらに栽培種を多く含むことが特徴である。

草本花粉化石では、栽培種のイネ属を含むイネ科の割合が高く、カヤツリグサ科、クワ科、ギシギシ属、アカザ科ーヒユ科、スベリヒユ科、アブラナ科、キンポウゲ属、ヨモギ属など開けた場所を好む分類群からなる。これらは、集落や田畑の雑草としても普通に見られる種類である。また、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、サンショウモ、アカウキクサ属といった水生植物は、日当たりの良い湿地を好み、水田雑草として普通にみられる分類群である（近年は農薬等の影響で減少しているが）。大型植物化石で産出する分類群のうち、イネ属や水生植物の分類群は花粉化石と対応関係にある。また、タガラシはキンポウゲ属、チドメグサ属はセリ科、タカサブロウはキク亜科に含まれる分類群であり、花粉化石との対応関係が示唆される。なお、タガラシと、タカサブロウは水生植物である。さらに、大型植物化石ではカタバミ属、エノキグサなど花粉化石ではみられない分類群も産出する。栽培植物に着目すると、花粉化石では、イネ属、ソバ属、キュウリ属（メロン類を含む）、ユウガオ属（ヒョウタン類を含む）がみられる。大型植物化石では、イネ、コムギ、ソバ、シソ属、メロン類が産出する。

一方、植物珪酸体群集は、ヨシ属など湿地に生育する分類群も産出するが、栽培種のイネ属が卓越することが特徴である。栽培種イネ属の産出率や含量密度は、杉山（2000）や近藤（1988）

で調査された現生水田におけるイネ属植物珪酸体含量と同等あるいはこれを越える値を示している。また、イネ属の組織片も認められることから、稲刈や稲藁の破片が溝内に多く埋積した可能性がある。

以上の溝内の植物化石の産状を整理すると、栽培種のイネ(属)に由来する花粉化石、植物珪酸体、種実が多産し、随伴する分類群の多くが水田や畑の雑草に成りうるものが多いことが特徴といえる。したがって、溝機能期の溝近辺は、開けた草地であり、水田や畑などの耕作地として土地利用されていた可能性が高いと考えられる。この点から、西坊城小路東側溝は耕作に関連する施設としての機能を有していた可能性がある。なお、溝埋土からは、鞭虫卵をはじめとする寄生虫卵も産出する。寄生虫卵の量は、金原・金原(1994)によれば100個/cc未満は汚染の範囲内であり、トイレ遺構では少なくとも1000個/ccの寄生虫卵が含まれるとされる。今回は、定量分析を実施していないが、数百個/cc程度とみられ、中間的な状況を示す。寄生虫卵は、平安京右京三条一坊二町跡でも検出される。これらは、人畜の糞尿により溝内が汚染されていた可能性を示すものであるが、集落などの生活環境に由来するのか、肥料等の耕作に由来するものであるかは、土地利用状況も加味しながら検討していく必要がある。

(5) 楊梅小路北側溝(溝3)の溝機能期の古環境

13世紀中頃に機能していた楊梅小路北側溝である溝3は、埋土下部は細粒砂の葉理を挟在する腐植に富む砂質泥～泥により充填されており、その上位に著しく擾乱された砂質泥が累重している。このように埋土上部形成期には、堆積物の供給システムが変化していることになり、溝周辺的环境が変化した可能性が示唆される。溝3埋土下部は、上述の西坊城小路東側溝と同様な水位の高い状況で形成された堆積物である可能性が高いが、擾乱状況や層相変化を踏まえると、楊梅小路北側溝機能期の方が溝内の水位が低く、土壤発達する期間を挟在していた可能性が高い。

本溝埋土については大型植物化石の産状を調査していないものの、花粉化石・植物珪酸体の産状は、上述の西坊城小路東側溝と同様な産状を示す。このことから、楊梅小路北側溝機能期も基本的には草地在り、水田や畑などの耕作地として土地利用が行われていた可能性が高いが、周辺の土地利用なども加味しながら検討していく必要がある。

(6) 13世紀の森林植生について

上述したように13世紀前半～中頃の溝埋土中の植物化石群集は、草本類の卓越が特徴であり。溝近辺に鬱蒼とした林分が存在した可能性は極めて低い。木本花粉化石群集をみると、マツ属などの風媒でかつ花粉生産量の多い分類群が多産している。これら多産する種類は調査地点の遠方の植生を反映している可能性が高い。最も多産するマツ属複維管束亜属は、極端な陽樹であり、二次林の代表的な樹種であり、周辺植生はマツ属からなる二次林であったことが推定される。

マツ属のほかにモミ属・ツガ属・スギ属といった温帯針葉樹も比較的多く産出する。これら温帯針葉樹は、現在では扇状地、谷頭、斜面地など土地条件の悪い場所に生育している場合が多く、

これらも遠方に生育していた可能性がある。ただし、モミ属については大型植物化石で葉の破片が確認されており、花粉化石群集でも溝 48 に限って比較的多産しているなど局地性が示唆されることから、調査地点から比較的近い場所に生育していた可能性もある。また、溝 3 のカエデ属や溝 44 のアカメガシワ属は、マツ属に比較して相対的な花粉生産量が極端に少ない分類群であるにも関わらず、比較的多産している。これらの樹種も溝沿いに分布していた可能性がある。このうちアカメガシワ属は、コナラ亜属、センダン属、スイカズラ属、ムラサキシキブ属等とともに森林縁辺部の植生や二次林などに普通な分類群である。これらのことから、13 世紀頃の森林植生は、植生攪乱の影響を受けた二次林的性格の強い林分であったことが推定される。

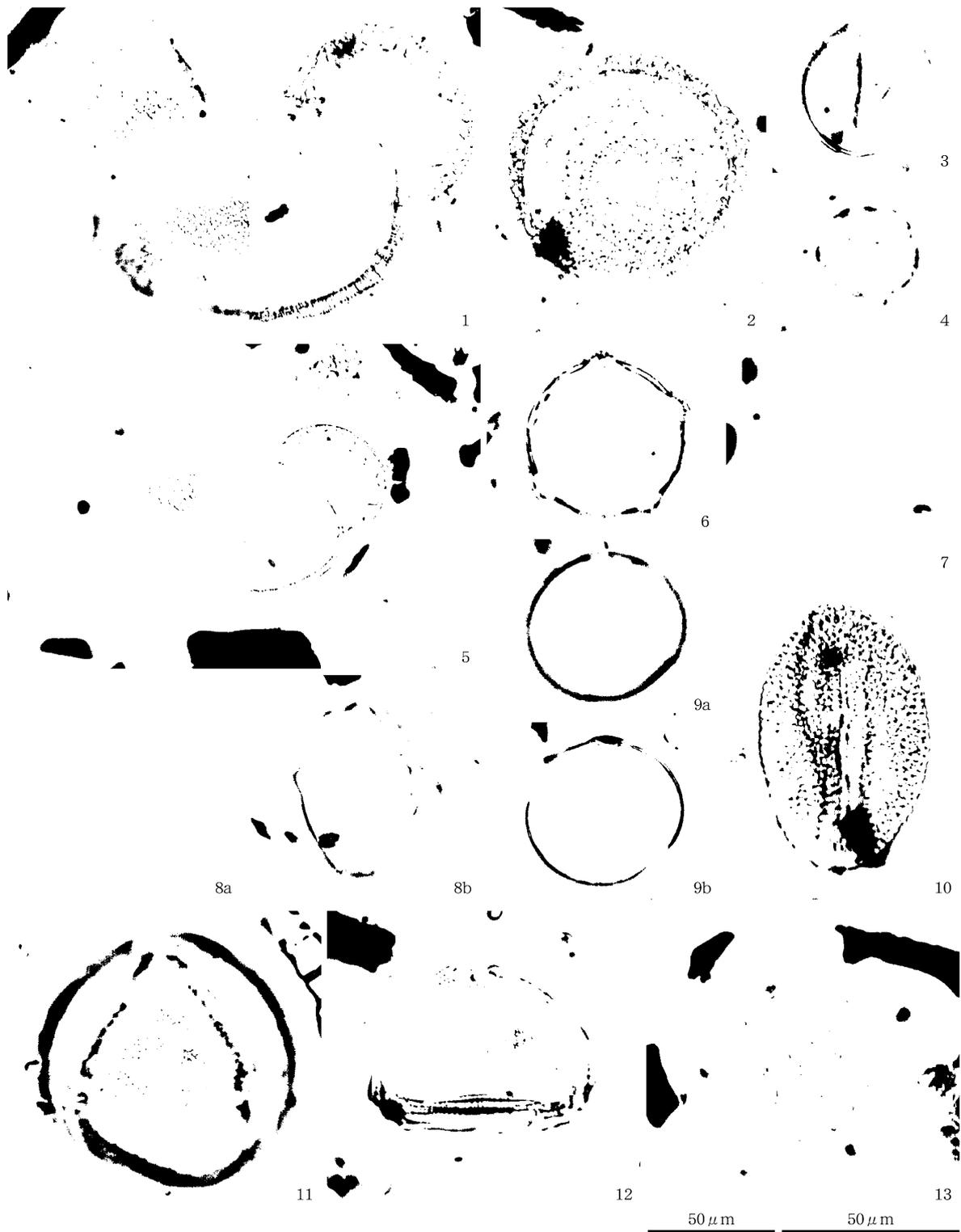
ところで平安京域では、各地で断片的であるが植生史に関する情報が蓄積されてきている。平安京右京五条二坊九町・十六町では平安時代～中世の包含層等の花粉化石群集（パリノ・サーヴェイ株式会社,1991）、平安京右京三条一坊三・六・七町跡では平安時代の園池埋土の植物化石群集（環境考古学研究会,2002）、平安京右京三条一坊二町跡では 12 世紀の朱雀大路西側溝埋土の花粉化石・種実化石群集（環境考古学研究会,2004）、史跡二条離宮では 9 世紀～13 世紀まで続く庭園の池埋土の花粉化石群集（環境考古学研究会,2001）、平安京左京二条二坊十町（高陽院）跡では 11 世紀の池埋土の花粉・植物珪酸体群集（古環境研究所,2001）、大覚寺大沢池の 12 世紀～14 世紀の池堆積物の花粉化石群集（未公表）が得られている。これらの調査成果をみると、大覚寺大沢池堆積物においてマツ属の増加傾向が確認されているものの、増加時期を特定するには至っていない。今回の結果が地域的な植生変化を反映しているとすれば、13 世紀前半には既にマツ属が多産していることから、マツ属の増加が 12 世紀後半に急激に起こっていることになる。

中世以降のマツ属の増加傾向については、長岡京域（パリノ・サーヴェイ,2003 など）や、河内平野周辺の多くの遺跡で確認されている。これらの調査成果をみると、マツ属花粉の増加は段階的に進行し、古墳時代以降にマツ属が増加傾向を示し、中世以降に急増し、近世以降にさらに増加し卓越するようになる場合が多い。ただし、マツ属の増加時期や増加パターンは、地域や流域間で異っていることも指摘されている（辻本・辻,2008）。上記したように平安京域では、12 世紀末にマツ属花粉が急増している可能性が高い。長岡京域でも、ほぼ同時期に増加しているものの、増加層準における花粉化石群集に占める木本花粉の割合は平安京域と長岡京域では異なり、平安京域で低率である。このような地域間での違いは、マツ属増加の背景にある植生攪乱の様相の違いを反映している可能性が高い。平安京域では、中世から近世にかけての変遷も不明であり、今後、調査事例の蓄積をもって再評価したい課題である。

引用文献

- 藤下 典之,1984,出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法.古文化財の自然科学的研究,古文化財編集委員会編,同朋舎,638-654.
- 石川 茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 環境考古学研究会,2001,自然科学分析.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-15 史跡旧二条離宮

- (二条城),財団法人 京都市埋蔵文化財研究所,55-58.
- 環境考古学研究会,2002,自然遺物の環境考古学分析.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-5 平安京跡右京三条一坊三・六・七町跡,財団法人 京都市埋蔵文化財研究所,33-47.
- 環境考古学研究会,2004,溝64の土壌分析について.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-6 平安京右京三条一坊二町跡,財団法人 京都市埋蔵文化財研究所,21-23.
- 金原正明・金原正子,1994,堆積物中の情報の可視化.可視化情報,14,9-14.
- 近藤 鍊三,1988,十二遺跡土壌の植物珪酸体分析.鑄師屋遺跡群十二遺跡—長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書—,御代田町教育委員会,377-383.
- 近藤 鍊三,2004,植物ケイ酸体研究.ペドロジスト,48,46-64.
- 株式会社 古環境研究所,2005,自然科学分析.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-7 平安京左京二条二坊十町(高陽院)跡,財団法人 京都市埋蔵文化財研究所,34-47.
- Matsuda,J.-I.,2000,Seismic deformation structures of the post-2300 a BP muddy sediments in Kawachi lowland plain,Osaka,japan,Sedimentary Geology,135,99-116.
- 松田順一郎,1999,瓜生堂遺跡第45-2時発掘調査でみられた古地震痕跡,都市計画道路大阪瓢箪山線建設に伴う瓜生堂遺跡第45時発掘調査概要報告,財団法人東大阪市文化財協会,233-242.
- 宮田雄一郎・山村恒夫・鍋谷 淳・岩田尊夫・八幡雅之・結城智也・徳橋秀一,1990,淡水生デルタの形成過程—琵琶湖愛知川河口部を例として—2.地質構成と堆積相.地質学雑誌,96,839-858.
- 森 也寸志・滋賀摂子・岩間憲治・渡辺紹裕・丸山利輔,1992,土地利用による土壌間隙構造の差異—軟X線による観察を中心として—.土壌の物理性,No.66,19-27.
- 中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.
- 成岡 市,1993,土壌粗間隙の形態とその測定法—土壌の不均一性と物質移動の研究前線.日本土壌肥料科学雑誌,64-1,90-97.
- 佐藤幸一,1990a,八郎潟干拓地重粘土水田土の粗間隙の発達とその意義.農業土木学会誌,60,25-30.
- 佐藤幸一,1990b,八郎潟干拓地における畑地と草地土壌の粗間隙の発達とその意義.農業土木学会誌,60,287-292.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,1991,平安京右京五条二坊九町・十六町発掘調査花粉・植物珪酸体報告,平安京右京五条二坊九町・十六町 京都市右京区西院三蔵町,京都文化博物館,108-116.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2003,自然科学分析の成果.向日市埋蔵文化財調査報告書第61集,長岡京跡・物集女車塚周辺遺跡,財団法人 向日市埋蔵文化財センター,270-283.
- 杉山 真二,2000,植物珪酸体(プラント・オパール).辻 誠一郎(編著)考古学と自然科学3 考古学と植物学,同成社,189-213.
- 辻本 裕也・辻 康男,2008,生駒山北部の古墳時代以降の花粉化石群集の特徴と植生変遷.日本花粉学会第49回大会講演要旨集,83p.
- 宇佐見龍夫,1996,新編日本被害地震総覧[増補改訂版],東京大学出版会,493p.



- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1 モミ属(溝3;2) | 2 ツガ属(溝3;2) |
| 3 スギ属(溝3;2) | 4 アカザ科-ヒユ科(溝3;2) |
| 5 マツ属複維管束亜属(溝3;2) | 6 クマンデ属-アサダ属(溝3;2) |
| 7 センダン属(溝3;2) | 8 カキノキ属(溝3;2) |
| 9 イネ属(溝3;2) | 10 ソバ属(溝3;2) |
| 11 ユウガオ属(溝3;2) | 12 キュウリ属(溝3;2) |
| 13 ペニバナ属(溝3;2) | |

図 43 花粉化石



- 1 イネ属短細胞珪酸体(溝3;1)
- 3 イネ属短細胞珪酸体(溝48;3)
- 5 ヨシ属短細胞珪酸体(溝48;2)
- 7 ススキ属短細胞珪酸体(溝48;2)
- 9 イネ属機動細胞珪酸体(溝3;1)
- 11 イネ属機動細胞珪酸体(溝48;3)
- 13 ヨシ属機動細胞珪酸体(溝48;2)
- 15 シバ属機動細胞珪酸体(溝48;3)

- 2 イネ属短細胞珪酸体(溝44;1)
- 4 ネザサ節短細胞珪酸体(溝48;2)
- 6 コブナグサ属短細胞珪酸体(溝3;1)
- 8 イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(溝48;2)
- 10 イネ属機動細胞珪酸体(溝44;1)
- 12 ネザサ節機動細胞珪酸体(溝48;2)
- 14 ウシクサ族機動細胞珪酸体(溝48;2)
- 16 イネ属穎珪酸体(溝3;1)

図 44 植物珪酸体



- | | | |
|------------------------------|------------------------------|-----------------------|
| 1 モミ 葉(溝48;2・3) | 2 モミ属 葉(溝48;2・3) | 3 モミ属 葉(溝48;2・3) |
| 4 モミ属 枝(溝48;2・3) | 5 キイチゴ属 核(溝48;2・3) | 6 ブドウ属 種子(溝48;2・3) |
| 7 ムラサキシキブ属 核(溝48;2・3) | 8 オモダカ属 果実(溝44;1) | 9 イネ 穎 炭化(溝48;2・3) |
| 10 イネ 穎(溝48;2・3) | 11 コムギ 胚乳(溝44;1) | 12 イネ科 果実(溝44;1) |
| 13 ホタルイ属 果実(溝48;2・3) | 14 カヤツリグサ科 果実(溝48;2・3) | 15 ツクサ 種子(溝44;1) |
| 16 イボクサ 種子(溝44;1) | 17 ミズアオイ属 種子(溝48;2・3) | 18 イラクサ科 果実(溝44;1) |
| 19 ギシギシ属 果実(溝44;1) | 20 ギシギシ属 果実(溝44;1) | 21 ミソソバ近似種 果実(溝44;1) |
| 22 タデ属 果実(溝44;1) | 23 タデ属 果実(溝44;1) | 24 ソバ 果実(溝44;1) |
| 25 アカザ科 種子(溝44;1) | 26 ヒユ科 種子(溝44;1) | 27 スベリヒユ科 種子(溝48;2・3) |
| 28 ナデシコ科 種子(溝44;1) | 29 タガラシ 果実(溝48;2・3) | 30 アオツツラフジ 核(溝44;1) |
| 31 クサネム近似種 果実(溝48;2・3) | 32 カタバミ属 種子(溝44;1) | 33 エノキグサ 種子(溝44;1) |
| 34 チドメグサ属 果実(溝48;2・3) | 35 イヌコウジュ属 果実(溝44;1) | 36 シソ属 果実(溝48;2・3) |
| 37 ナス科 種子(溝44;1) | 38 メロン類(モルディカメロン型) 種子(溝44;1) | |
| 39 メロン類(マクワ・シロウリ型) 種子(溝44;1) | 40 タカサプロウ 果実(溝44;1) | 41 キク科 果実(溝44;1) |

図 45 大型植物化石

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうろくじょういちぼうさんちょうあと							
書名	平安京右京六条一坊三町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2008-7							
編著者名	布川豊治・鈴木廣司・南 孝雄							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2008年11月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 ろくじょういちぼう 六条一坊 さんちょうあと 三町跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 ちゅうどうじみなみまち 中堂寺南町 ちない 地内	26100		34度 59分 43秒	135度 44分 28秒	2008年5月 8日～2008 年9月18日	1,670m ²	中央市場 施設新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
平安京右京 六条一坊 三町跡	都城跡	弥生時代			石包丁、弥生土器			
		奈良時代			軒平瓦、軒丸瓦			
		平安時代前期 ～中期	掘立柱建物1棟		土師器、須恵器、灰釉 陶器、灰釉硯、緑釉陶 器、瓦類、丸靱		建物は南北棟、平 安時代前期	
		平安時代後期 ～鎌倉時代	西坊城小路東側溝、 揚梅小路北側溝、 門、井戸		土師器、須恵器、瓦器 山茶椀、焼締陶器、輸 入陶磁器、軒瓦、石製 品、木製品			
		室町時代	溝状遺構		高麗青磁			
		江戸時代	土取土坑		染付陶磁器			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-7
平安京右京六条一坊三町跡

発行日 2008年11月25日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
住所 〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961